



特定非営利活動法人
ふれいす東京

TOKYO

2017年度 年間活動報告書

目次

1. ご挨拶

中野区役所に輝く巨大レッドリボン	2
------------------------	---

2. 部門報告

事務・総務	3
ホットライン	11
Sexual Health Project	19
Gay Friends for AIDS	25
ネスト	30
バディ	40
HIV 陽性者と周囲の人/確認検査待ちの人への相談サービス	44
研究・研修	55

2006年に女性として、初めて第20回日本エイズ学会学術集会の大会長に池上千寿子が選ばれ、2017年には生島がゲイ男性として初めて第31回日本エイズ学会学術集会の会長に指名された。会場となった中野サンプラザの隣に位置する中野区役所には、2017年11月24日～26日の会期中、7.5m×12mという巨大なレッドリボンが掲げられた。



これを実現できたのは、オープンリーゲイである石坂わたる氏（中野区区議会議員）の仲介で中野区長につながり、観光、都市開発を担当する部署が窓口となり、今回の学会の開催にあたり、区役所内の調整役をお手伝いいただいたことが大きい。

レッドリボンをかける際、施設管理担当者に相談すると、いくつかの条件をクリアする必要があると指摘された。1) この看板が造作物かどうかを確認する必要がある。造作物ならば確認申請が必要になり、期日に間に合わないことになる。2) ベランダが、避難路になっており、消防法上、OKかどうか。

これらを、リボン製作をしてくれた業者さんと一緒に、区役所内担当部署、関係省庁に確認をして、すべてをクリアすることができた。

さらには、すでに、年間のスケジュールは決まっており、複数の横断幕が庁舎にかけられる予定が決まっていた。担当部署の責任者から区長に相談してもらったところ、調整してあげなさいというTOPの判断が出て、そこから、庁舎内の調整があり、無事に1週間弱の期間、単独の掲示が実現された。また、中野サンモールの商店街、JR中野駅の改札前にもバナー広告が同時に掲示された。

最初は不可能だと思われたレッドリボンの掲示だが、いろいろな人の手助けにより、次第に道が開かれていた。今後この成功体験に学ぶ必要があると感じた。誰かに相談してみる、依頼してみるということ、動き出す前から遠慮して、声を潜めてしまうのではなく、声をあげてみるこの大切さを学ばせていただいた。

この数年、認定NPOになるためのサポーター募集に、3年でのべ500人以上の方が手をあげてくださった。想像以上に多くの皆様が示してくださった、お気持ちは、私たちが活動を続けていくための大きな希望となった。そして、いよいよ2018年9月に申請を行う予定で準備を進めている。

ぷれいす東京は、相談支援機関である。不安相談や陽性者や周囲の人向けに相談サービスを提供している。それと同時に、HIVはとても身近であるというリアリティ、早めに感染を知る事で長くうまく付き合える様に治療技術が大きく進歩したことなど、社会に不足している情報やイメージを、HIV陽性者、パートナー、家族など、当事者の参加により、発信していきたい。そのことにより、より多くの「HIVのリアリティ」や「HIVの情報/イメージのアップデート」など、今後も続けていきたいと考えている。

1. 2017年度のハイライト

●第31回 日本エイズ学会学術集会

生島 嗣

第31回日本エイズ学会学術集会・総会は平成29年11月24日から11月26日まで開催され、1,500人を超える皆さまにご参加いただき終了しました。基礎研究、臨床活動、社会活動、メディアそして多くのHIV陽性者や周囲の人たちが参加してくださいました。また、展示への出展、共催、後援、ご寄付などで多くの企業・団体の方にご参加・ご協力をいただきました。本当にありがとうございました。

プログラム委員会は、臨床系：岡 慎一（国立国際医療研究センター）、基礎系：俣野 哲朗（国立感染症研究所）、社会系：生島 嗣（おれいす東京）が各部門長になり、基礎系10人、臨床系12人、社会系9人の方々のお知恵とお力添えをいただきました。

エイズ学会会員の皆さまからは、300題をこえる演題申込みがあり、一般演題：220、一般ポスター：80、シンポジウム（9セッション）、ワークショップ（6セッション）を編成することができました。また、エイズ学会や関連団体による医師、薬剤師、看護師向けの認定講習会（4セッション）を開催することができました。

さらに、プログラム委員有志により、医療、福祉等学生むけ教育セッションを行い、合計で37名の学生の皆さまにご参加いただきました。

この会議を実現するため、企業、団体の皆さまにお力添えをいただきました。この場を借りて改めて厚く御礼を申し上げます。

今回は、中野区からの大きな力添えをいただきました。石坂わたる中野区議の紹介で区長につないでいただき、都市観光・地域活性化の部門に協力していただき、本当にお世話になりました。市民公開シンポジウムには中野区長、中野区議会議長にもご挨拶をいただきました。

また中野区には、市民むけのイベントTOKYO AIDS WEEKS 2017を共催していただきました。多くのNGOやグループ、個人に企画・運営に参加していただき、メインイベントは学会会場から徒歩5分の場所で約20プログラムが開催され、多くの市民が参加しました。

第31回日本エイズ学会学術集会・総会の組織運営の大きな底力の一つはボランティアさんたちの存在です。

会議の運営は株式会社コンベンションリンケージがサポートしてくださいました。

本会議に関係されたすべての皆さま、ありがとうございました。

第31回日本エイズ学会学術集会・総会
会長 生島 嗣

●TOKYO AIDS WEEKS 2017

桜井 啓介

2015年、2016年と開催してきたTOKYO AIDS WEEKSですが、今年は映画上映やトークショーなど4日間で20のプログラムと展示、さらに毎年恒例となりつつあるゲイコーラスのコンサートもあるという大規模イベントとなりました。

日本エイズ学会学術集会と時間が重なるということもあり、来場者数が読めないイベントでしたが、蓋を開けてみれば延べ来場者数は1,600名を超え、盛況となりました。ご来場いただきました皆様には改めて御礼申し上げます。

一方、イベントの舞台裏では、Gay Friends for AIDS部門のイベントチームに加えて、おれいす東京の各部門のスタッフ、さらには公募に応募して下さった方など20名ほどがスタッフとして運営にあたり、また各プログラムではさまざまな団体が企画を立ち上げて下さいました。広報の面では、レインボー・リール東京の会場にブースが設置されたり、InterFMの番組で告知の時間をいただいたりしました。

そうしたさまざまな方が関わる中で、新しいネットワークが生まれていくという、イベントが持つ力、ダイナミズムを感じられたことが、2017年の大きな収穫のひとつだったのではないかと思います。



レインボーリールでのブース



●Gay Men's Chorus for TOKYO AIDS WEEKS 2017

加藤 力也

2015年のTOKYO AIDS WEEKS立ち上げより、毎年ゲイ男声の合唱ミニコンサートを行なっています。3回目となる今回も約30名のコーラス参加者が集まり、11月25日(土)の夕方、第31回日本エイズ学会学術集会の会場であるコンgresクエア中野地下コンベンションホールのホワイエで開催しました。

合唱指導経験の豊富な指揮者・伴奏者の下、年齢や合唱経験など様々で多様な参加者は当日の午前中を含め3回の練習で本番に臨みました。中にはかなり遠方からの参加者もあり、少ない練習時間の中、高いモチベーションで取り組んでくれました。本番ではポップスやミュージカルナンバーなどを中心に6曲を演奏しました。毎回お揃いのTシャツでステージに乗りますが、今回は目にも鮮やかなレッドリボンの色でもある赤で統一、メンバー同士の一体感や観客へのアピールに一役買いました。

毎回この合唱ステージを聴いた方々から、「とても良かった」「感動した」「涙が出ました」などの感想をいただきますが、今回も学会関係者を含め非常に多くの方に会場にお越しいただき、とても温かいコンサートになりました。毎年恒例となった『上を向いて歩こう』を会場のみなさんも一緒に歌いましょうという呼び掛けにも、非常の多くの方が参加して下さいました。

2018年も開催すべく準備を始めています。世界中でHIV/エイズについて思いを寄せる時期に、HIV陽性者当事者や医療者を含む多くの方々に癒しと楽しい時間を提供し、ゲイの文化的な側面に触れてもらう機会を持ちたいというのがこのコンサートの目的です。今後も継続して開催していきたいと考えています。



●LASH調査

生島 嗣

LASH調査は、GPS機能付きの出会い系アプリを利用するMSM・ゲイ・バイセクシュアル男性(トランス男性などを含む)を対象に、薬物使用や性生活等に関する自己回答式インターネット調査(LASH: Love Life and Sexual Health)を2016年9月22日~同年10月22日に実施しました。回答者の多くはMSMですが約1%の回答者はトランスジェンダーでした。今後、国内外の学会などで成果については発表をしていく予定です。

また、2017年11月20日に単純集計をとりまとめ報告書として印刷し、第31回日本エイズ学会学術集会で配布を開始し、web上にもPDFを公開しました。また、大阪、

福岡、東京、札幌、那覇にて報告会を開催し、多くの当事者や関係者に報告を行いました。さらに、「意外と知らない僕らのリアルなセックスライフ—LASH調査報告書—」という冊子を発刊し、東京レインボープライドなどで、MSMや関係者に配布を行う予定です。



意外と知らない僕らのリアルなセックスライフ—LASH調査報告書— 表紙



LASH報告書 表紙

●企業とのコラボ

佐藤 郁夫

ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会からの助成で、「Living Together」のコンセプトを社会に共有するための冊子の制作をしたのに引き続き、今年度は広く市民にHIVやその周辺のことへの理解を深めるためのプログラム「ぶれいすトーク」への助成をいただき、2回開催しました。

第1回 1月8日(月・祝)

第31回日本エイズ学会学術集会~アンコール発表会
ぶれいす東京のスタッフや研究班が関わった9題の発表の再演。

第2回 1月27日(土)

感情の「みかた」~つらい感情も、あなたの「味方」になります。~

堀越 勝さん(国立精神・神経医療研究センター 認知行動療法センター センター長)の講演。

また、10代のためのWebサイト「Mex(ミークス)」にHIV/エイズに関するコラムを4回にわたり、代表の生島が執筆しました。

第1回 HIV/エイズってうつったら死ぬって本当? 治療すれば怖くない?

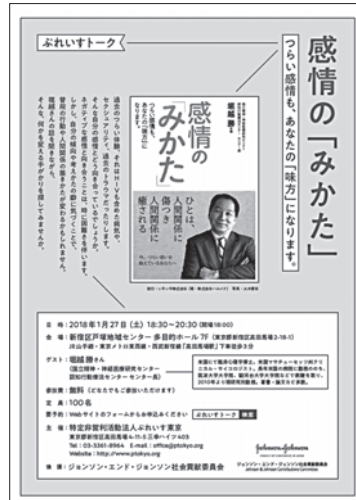
第2回 HIV/エイズにならないためにはどうしたらいいの?

第3回 エイズになってしまったかも…実際に寄せられた10代からの相談と回答

第4回 大切な友達や恋人から「HIVに感染している」と知らされたらどうする?

普段、10代とのつながりが少ないので、言葉の選び方や表現に少し苦労しましたが、とてもわかりやすくまとまりました。ぜひご覧ください。

サポートいただきましたジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会とMex(ミークス)に、この場をお借りして、お礼を申し上げます。



2. 外部委員会への参加

生島、牧原や池上らが、国や自治体などをはじめとする外部機関にHIV/エイズ関係の委員として参加しています。

東京都内の医療機関などでは、行政や民間団体などと垣根を越えて連携しつつ、HIVにどう向きあっていくのかを協議する場が設けられています。ぶれいす東京は、会議の場への参加のみにとどまらず、会議をきっかけとして保健所や医療機関からくる問い合わせや相談に対して積極的に協力を行っています。

- ・厚生労働省エイズ動向委員会 委員
- ・厚生労働省エイズ対策研究事前評価委員会 委員
- ・東京都エイズ専門家会議 委員
- ・独立行政法人国際協力機構 (JICA) エイズ対策支援委員会 委員
- ・日本エイズ学会 監事
- ・日本エイズ学会 理事
- ・日本性教育協会運営委員会 副委員長
- ・公益財団法人エイズ予防財団「同性愛者等に対するHIV/エイズ予防啓発事業」連絡協議会 委員
- ・独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構「雇用管理サポート事業」協力専門家
- ・財団法人友愛福祉財団 理事
- ・新宿区HIV/AIDS関係機関ネットワーク連絡会 委員
- ・東京都「若者の自立等支援連絡会」委員
- ・葛飾区エイズ連絡会議 委員
- ・特定非営利活動法人エイズ&ソサエティ研究会議 副代表

3. ぶれいす東京事務所のご案内

- 事務所開所時間：月～土/12:00～19:00
- 事務所所在地：〒169-0075
東京都新宿区高田馬場4-11-5 三幸ハイツ403
- 電話：03-3361-8964
- FAX：03-3361-8835
- E-mail：office@ptokyo.org
- 活動会員：212名(うち議決権をもつ会員：49名)
- 賛助会員：個人60名、団体7団体
- 役員名簿：理事の任期は2年で、現在の理事は以下の8名です。

- ・生島 嗣(代表を兼任)
- ・牧原 信也(運営委員長を兼任)
- ・池上 千寿子
- ・樽井 正義
- ・根岸 昌功
- ・兵藤 智佳
- ・山下 敏雅
- ・佐藤 郁夫

- 監事：常住 豊
- 事務所スタッフ：フルタイム2名、パートタイム6名
- 定例会議：事務局会議(毎月2回)、運営委員会(毎月1回) 理事会(随時)

●業務受託事業

厚生労働省

- ・「HIV陽性者等のHIVに関する相談・支援事業(ピア・カウンセリング等による支援事業)」

東京都

- ・東京都夜間休日HIV/エイズ電話相談
- ・東京都HIV検査情報Webの制作(<http://tokyo-kensa.jp/>)
- ・東京都によるゲイ雑誌・Webへの広告制作

企業からの事業受託/後援事業

- ・鳥居薬品株式会社の後援で、冊子「Living with HIV～身近な人からHIV陽性と伝えられたあなたへ～」を無償で配布。また、冊子の手記とその活用方法などを紹介するWebサイトを開設。

●協働プロジェクト

- ・TOKYO AIDS WEEKS 2017

●活動助成をいただいた団体

- 公益財団法人東京都福祉保健財団

●寄付をいただいた団体

ヴィーブヘルスケア株式会社、MSD株式会社、オフィス Two I、カラフル@はーと、ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会、聖公会東京教区、中外製薬株式会社、約束の虹ミニストリー(50音順、敬称略)

～以下は、BOOK 募金 (*)・募金箱などによるご寄付～
ANGEL LIFE NAGOYA (*), 名古屋市医師会看護専門学校 (*), News Café, NOT ALONE CAFE会場募金箱、ぶれいす東京・多目的室募金箱、Rainbow Health Talk会場募金箱 (50音順、敬称略)

多くの個人の方からもご寄付をいただきました。お名前の掲載は控えさせていただきますが、心よりお礼申し上げます。

4. ぶれいす東京事務所の日常活動

ぶれいす東京の事務所は、月～土の 12 時～ 19 時にオープンしています。フルタイム・スタッフ 2 人、パートタイム・スタッフ 6 人に加え 1 人が部門コーディネーターとして活動しています。それ以外に、人員の少なさを事務所ボランティアの方々がカバーしてくれています。

○部門コーディネーター

[ホットライン部門]	佐藤
[Sexual Health Project]	生島
[Gay Friends for AIDS 部門]	sakura
[ネスト部門]	佐藤、加藤、原田
[パディ部門]	牧原
[HIV 陽性者と周囲の人 / 確認検査 待ちの人への相談サービス部門]	生島、牧原
厚生労働省受託事業	佐藤
[研究・研修部門]	生島
[事務・総務部門 経理担当]	伊澤

●新人スタッフ合同研修の実施

牧原 信也

ぶれいす東京の秋の風物詩、各部門合同での「新人ボランティアスタッフ 合同研修会」を 9 月に開催しました。会場はいつもの新宿 NPO 協働推進センターで、オリエンテーションと研修を実施しました。今年も朝から夕方までたっぷりぶれいす漬けになるお献立だったので、みなさま毎回お腹いっぱいになった？、させられたのではないかと思います。

今年で 16 年目を迎えましたが、まだまだ色々な方が活動に関心を持ち、参加いただけていることをうれしく思います。

今回も講義形式とワークショップ形式を織り交ぜた、ぶれいす東京のオリジナルプログラムで 3 日間開催しました。

▼合同研修オリエンテーション

9 月 2 日 (土) 14:00 ~ 16:00

於：新宿 NPO 協働推進センター

参加者合計 21 名 (個別も含む)

▼新人スタッフ合同研修

9 月 10 日 (日)、17 日 (日)、23 日 (土/祝)

10:00 ~ 17:00

於：新宿 NPO 協働推進センター 参加者 15 名

講義は、1 日 3 ~ 4 コマを 3 日間開催。1 コマは 50 分 ~ 90 分、休憩 10 分。プログラムの内容は以下のとおり。

○9 月 10 日 (日)

- | | |
|--------------------------|--------|
| 1. 社会的な背景 | 池上 千寿子 |
| 2. 医学的基礎知識① HIVの基礎知識と検査法 | 福原 寿弥 |
| 3. 手記を読むワークショップ | スタッフ |
| 4. 陽性者の社会生活 | 生島 嗣 |

○9 月 17 日 (日)

- | | |
|------------------------|-------|
| 1. セクシュアリティの多様性について | 大槻 知子 |
| 2. 医学的基礎知識② 性感染症の基礎知識 | 福原 寿弥 |
| 3. セイファーセックス・リスクアセスメント | スタッフ |
| 4. エゴグラムと交流分析 | 野坂 祐子 |

○9 月 23 日 (土/祝)

- | | |
|----------------------------|---------------|
| 1. 制度や社会サービス | 牧原 信也 |
| 2. ネスト・プログラムの取り組み | 加藤 力也 / 佐藤 郁夫 |
| 3. 相手のある保健行動～コンドーム使用と使用依頼～ | スタッフ |
| 4. 3 日間の振り返り / 今後の活動について | |



●ボランティア交流会の開催

「新人ボランティアスタッフ 合同研修会」を経由して、ぶれいす東京のさまざまな部門で多くのボランティアが活動しています。普段、部門をまたがって交流をもつことはなかなかできませんが、昨年からのすべてのボランティアを対象に、交流会を開催しています。

Sexual Health Project で活動するスタッフが中心となり、企画・運営を行いました。ゲームなどのお楽しみ企画もあり、とても楽しい時間を過ごしました。今後も継続して行く予定です。(詳しくは P.19 の報告を参照)

●「みんなでヨガ」の開催

ネスト・プログラム利用登録者とぶれいす東京スタッフを対象とした「みんなでヨガ」を、6月と10月の2回開催しました。(詳しくはP.23の報告を参照)

●Webサイトの運営

ぶれいす東京のWebサイトは、2015年7月31日に、HIV陽性者とそのパートナーや家族、ともだちのためのサイト「web NEST」と統合してリニューアルし、スマートフォン対応もしました。Gay Friends for AIDS (Gフレ)部門のサイトの他、厚生労働科学研究班の「地域におけるHIV陽性者等支援のためのウェブサイト」および「Love Life & Sexual Health (LASH)」、「Living with HIV ~身近な人からHIV陽性と伝えられたあなたへ~」など、情報豊富な各サイトも運営しています。またジャンププラスとの共同プロジェクト「とも・ナビweb」、長期療養シリーズのウェブサイト「HIV陽性者の視点で読み解く 長期療養時代」も運営しています。

また、2017年12月に、英語のページを開設しました。ぶれいす東京の概要やFAQなどを掲載しています。グローバル・ナビゲーションの「English」からご覧いただけます。

○WebサイトURL

- ・ぶれいす東京(PC版・スマホ版)
<http://www.ptokyo.org/>
- ・Gay Friends for AIDS <http://gf.ptokyo.org/>
- ・地域におけるHIV陽性者等支援のためのウェブサイト
<http://www.chiiki-shien.jp/>
- ・Love Life and Sexual Health (LASH)
<http://lash.online/>
- ・Living with HIV
~身近な人からHIV陽性と伝えられたあなたへ~
<http://lwh.ptokyo.org/>
冊子無料配布プロジェクトを実施中

特定非営利活動法人日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラスとの共同プロジェクト

- ・HIV陽性者の視点で読み解く 長期療養時代
<http://chokiryoyo.ptokyo.org/>
- ・とも・ナビweb ~ HIVで通院されている皆さまへ~
<http://www.janpplus.jp/tomonavi/>

その他にも、Facebook(<http://www.facebook.com/PLACETOKYO>)やTwitter(<http://twitter.com/placetokyo>)といったソーシャル・メディアも活用し、Web上で随時情報発信を行っています。



● 冊子などの制作物

ぶれいす東京では、HIV 陽性者のサポートや一般へ向けた予防啓発など、さまざまな活動の成果を冊子などの形にまとめています。これらの冊子は、陽性者や周囲の人などの当事者、ぶれいす東京にボランティアなど何らかの形で関わってくださっている方々、あるいは教育やセクシュアリティ、医療、福祉などの専門家をはじめ、広くさまざまな層へ向け、一部を除き原則有償実費にて頒布しています。

以下の冊子をはじめとする制作物をご希望の方は、ぶれいす東京 Web サイト「冊子・頒布物」のページから「印刷物等申込票」をダウンロードして必要事項をご記入の上、事務所にメール (office@ptokyo.org) か FAX (03-3361-8835) でご送付ください。各冊子類の内容も同サイトにて紹介していますので、ぜひご覧ください。

▼ HIV 陽性者の手記など「生の声」をまとめた冊子

【Living Together シリーズ】

- ・『Living with HIV ～身近な人から HIV 陽性と伝えられたあなたへ～』(後援：鳥居薬品株式会社)

HIV 陽性者のパートナー、家族、友だち、職場の仲間など、身近な人から HIV 陽性と伝えられた人と HIV 陽性者による計 24 編の手記と、基礎知識やデータを取りまとめた短いコラムを掲載。通知を受けた人への支援ツールとしても活用できる。2013 年制作 (A5 サイズ 60 ページ)。2014 年第 2 刷、2015 年第 3 刷、2017 年第 4 版。

鳥居薬品様のご協力により、無償配布を行っています。

- ・『Living Together “Our Stories”』

さまざまな立場の方から寄せられた 19 編の手記とチャームングな写真が、HIV/AIDS とともに生きている人もそうでない人も「すでにみんな一緒に生きている」ことを実

感させてくれる。「Sexual Health コラム」も収載し、学校や家庭、職場で活用できる教材。2005 年制作 (A5 サイズ 4 色刷り 36 ページ)。

▼ 予防啓発活動を通じて生まれた冊子

【Sexual Health シリーズ】

- ・『Sexual Health Book ②』

Sexual Health シリーズのニューフェイス Sexual Health Book ② が誕生。感染予防、避妊、デート DV など性の健康情報だけでなく、性の多様性とコミュニケーションのポイントについてもとりあげ、わかりやすく、しかも自分の事として気づくための工夫がなされている。学校、家庭、職場などで教材として活用できる冊子。2014 年制作 (A6 サイズ 16 ページ)。

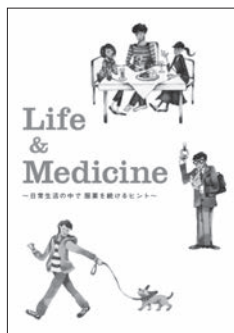
- ・『Sexual Health ゲーム編』

授業やイベント、セミナー等で活用できる、「ゲームで遊びながら学ぶ性の健康」のノウハウが満載。2005 年制作 (A5 サイズ 2 色刷り 32 ページ)。

▼ HIV 陽性者へのケア活動を通じて生まれた冊子 (陽性者およびそのパートナー、家族には無償頒布)

- ・『Life & Medicine ～日常生活の中で 服薬を続けるヒント～』

(制作：ぶれいす東京、発行：ヤンセンファーマ株式会社) 生活者の視点から HIV 陽性者の服薬を支援することを目的に作られたツール。陽性者 20 名に対するインタビューと、全国の陽性者 151 名から回答を得たアンケートで構成。2012 年制作 (A5 サイズ 4 色刷り 40 ページ)。PDF 版は、ヤンセンファーマ株式会社の Web サイトでダウンロード・閲覧が可能。(http://www.janssen.com/japan/patient/hiv)



▼その他制作物(詳しくはお問い合わせください)

- ・日本エイズ学会学術集会・総会 HIV陽性者参加支援スカラシップ 報告書(第20～30回)
ぶれいす東京とはばたき福祉事業団、日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラスが共同発行。
- ・ぶれいす東京年間活動報告書(2011～2016年度)
- ・Living Together Manual
- ・OUR DAYS
- ・OUR DAYS [Episode 2]
- ・たんぽぽ
東京都発行の新陽性者向け冊子、ぶれいす東京が制作や改訂に協力。
- ・職場とHIV/エイズハンドブック ― HIV陽性者とともに働くみなさまへ―
ぶれいす東京が編集協力した、東京都発行の冊子。

●マスメディアへの協力

今年度もテレビ・ラジオ番組、新聞や雑誌など各種メディアからの取材依頼がありました。新聞やゲイ雑誌など多方面の取材に協力・寄稿し、情報発信をサポートしました。また、研究成果や相談対応に基づく情報提供、可能な範囲でのHIV陽性者の紹介を行いました。事前に企画書を提出していただき、内容の妥当性や取材協力者のプライバシーへの配慮などを確認し協力しています。

- ・メディカルレビュー社 HIV感染症とAIDSの治療 Vol. 8 No.1 座談会「[90-90-90]に向けたHIV検査のあり方」(6月発行)
- ・東京都人権啓発センター TOKYO人権第74号 2017年夏号「HIVを正しく理解し、エイズについて自然に話せる社会をつくりたい」(5/31発行)
- ・NHK事前取材協力(6/20)
- ・Atlas2018「VOICES AND FACES FROM TOKYO」(7月掲載)
- ・毎日新聞「HIV:正しく理解を 養老ホームの生活相談員ら研修会」(9/6掲載)
- ・JaNP+ ニュースレター第33号「第31回日本エイズ学会の開催に向けて」(9月発行)
- ・日本評論社 LGBTのひろば「平和な世界にかかる虹」(9/30発行)
- ・NHK松山放送局 事前取材協力(10/19)
- ・日本記者クラブ 記者会見 第31回日本エイズ学会「エイズ対策最前線 PrEPって何?」(11/1)
- ・毎日新聞「ひと:生島嗣さん=第31回日本エイズ学会学術集会・総会の会長を務める」(11/21掲載)
- ・NHK Eテレ「#ジューダイ 生放送でお悩み相談 ツイッター連動」(11/30放送)
- ・毎日新聞 科学の森「進化するHIV治療 あす世界エイズデー」(11/30掲載)

- ・The Japan Times NATIONAL/SOCIAL-ISSUES 「Boys' for rent in Tokyo: Sex, lies and vulnerable young lives」(11/23掲載)
- ・毎日新聞「エイズ 恐れに負けず--治療23年 歯科医師の信念」(11/26掲載)
- ・ビッグイシュー日本版 第324号ビッグイシューアイ「HIV/エイズへの認識の変更が必要。感染しても老後を考えられる時代」(12/1発行)
- ・エフエム おのみち 2017年世界エイズデー特番に協力(12/1放送)。
- ・部落解放・人権研究所 被差別マイノリティのいま「HIV陽性者としての差別体験」(12/10発行)
- ・週刊プレイボーイ「知られざるHIV療の最前線と日本の課題―感染に気付いていない人が5千人以上!?!」(12/27掲載)
- ・10代のためのWebサイトMex(ミークス)
第1回「HIV/エイズってうつったら死ぬって本当?治療すれば怖くない?」(11/14掲載)
第2回「HIV/エイズにならないためにはどうしたらいいの?」(11/28掲載)
第3回「エイズになってしまったかも…実際に寄せられた10代からの相談と回答」(1/16掲載)
第4回「大切な友達や恋人から「HIVに感染している」と知らされたらどうする?」(2/6掲載)
- ・市民活動のひろば 第157号「ありのままに行きられる社会を―HIV/エイズとともに24年」(1/20発行)
- ・TBSラジオ「荻上チキ・Session-22」ラブセッション～HIV/エイズ啓発プロジェクト
「職場でのカミングアウトはわずか1割。HIV陽性者が働きやすい職場とは?」(3/9放送)
「HIV陽性者の高齢化を見据えて。医療・介護の現状と今後」(3/16放送)
- ・北海道新聞「HIV対策 闘う感染者」(3/29掲載)
ゲイ雑誌「サムソン」に寄稿 2017年6月号(2017/4発売)～2018年5月号(2018/3発売)に連載中
(掲載、放送の記載がないものは、取材協力日)

●協働プロジェクトの窓口・調整など

2017年度も、他団体との協働プロジェクトなどに引き続き参画しました。

「Living Together計画」として、HIVのリアリティを伝えるプロジェクトを、特定非営利活動法人aktaと特定非営利活動法人ぶれいす東京が窓口になって行っています。

一昨年、昨年に引き続き、TOKYO AIDS WEEKS 2017を開催しました。今年度は、中野区との共催で、第31回日本エイズ学会学術集会・総会(会長 生島嗣)と連動して開催されました。会場提供、広報等、中野区に多大なご協力をいただきました。また、ヴィーブヘルスケア株

式会社に協賛をいただきました。この場をお借りして、お礼を申し上げます。(詳しくはP.3をご覧ください。)

●認定NPO法人化計画 経過報告

2015年から進めてきた認定NPO法人になるためのサポーター依頼にあたって、多くの方々にご支援・ご協力いただき、心より御礼申し上げます。私たちの呼びかけに、多くのみなさまから申込をいただき、申請に必要な人数のサポーターを得ることができました。深く感謝を申し上げます。これから準備を整え、2018年9月に認定NPO法人の申請を行う予定です。

認定NPO法人になると寄付者は金額に応じ、所得税と地方税をあわせて、寄付金額の最大50%の税額控除を受けられる可能性があります。団体としては、寄付が集めやすくなり、財政基盤の強化につながります。

認定NPO法人の申請後も、引き続き、毎年100人以上のサポーターにご支援いただいている実績が必要です。どうぞ今後もご支援いただけますようお願いいたします。

認定サポーターになっていただくには

条件は下記2つです。

- ① 1年度(4月から翌年3月)に3,000円以上の寄付
- ② 東京都に提出する非公開の名簿への掲載
(氏名・住所、団体の場合は団体名・所在地)

・郵便振替の場合

氏名、自宅住所のほかに、通信欄に、「ぶれいす東京への寄付」「認定NPOサポーター希望」と明記

・銀行振込・ゆうちょ送金の場合

件名：認定NPOサポーター希望

本文：特定非営利活動法人ぶれいす東京 あて

- 1) 振込情報(振込日/振込先銀行/振込名/金額)
- 2) 寄付者情報(氏名/自宅住所、または団体名/所在地)
- 3) ぶれいす東京への寄付

・クレジット決済の場合

金額を入力して、「ぶれいす東京への寄付」、「認定NPO計画サポーター希望」を選択して送信。

決済情報のページに氏名、自宅住所を入力

詳しくは、Webサイトの「認定NPOになることを応援する(<http://ptokyo.org/support/authorizednpo>)」をご覧ください。

○ご寄付をいただける場合には、下記の口座宛にお振込をお願いいたします。会員の方が会費を納入いただく場合も、同じ口座宛にお振込ください。クレジットカードに

よる寄付(1回ごと/毎月の定額)もできます。また、不要になった本やDVD、CD、ゲームなどを「BOOK募金」に送ることで、ぶれいす東京に寄付をすることもできます。

お振込先

・ゆうちょ銀行振替口座 00160-3-574075

「特定非営利活動法人ぶれいす東京」

※ご送金いただく際に、通信欄に寄付か会費納入かご一筆ください。専用の振替用紙もあります。

・三井住友銀行 高田馬場支店

普通預金 2041174

「特定非営利活動法人ぶれいす東京」

※銀行からお振込いただいた場合は、お手数ですがその旨をご連絡いただければ幸いです。

※クレジットカード決済による寄付とBOOK募金の詳細は、ぶれいす東京Webサイトの案内「寄付・応援する」をご覧ください。

部門報告 (ホットライン)

1. 活動のあらまし

HIV/エイズに関して、不安や疑問がある人の相談を受けたり、情報を提供する場として、

- ＊「ぶれいす東京 HIV/エイズ電話相談」
- ＊「東京都 HIV/エイズ電話相談(夜間/休日)」(東京都委託事業)

を運営している。

2. スタッフの構成(2018年3月現在)

- ・コーディネーター 1名
- ・世話人 4名
- ・スタッフ 24名(実働)

3. 活動内容

○「ぶれいす東京 HIV/エイズ電話相談」

電話番号：03(3361)8909 [1回線]
実施日：日曜日 13:00～17:00

○「東京都 HIV/エイズ電話相談(夜間/休日)」

(東京都委託事業)

電話番号：03(3292)9090 [2回線]
実施日：金曜日 18:00～21:00
(但し、祝日の場合は、14:00～17:00)
土/日曜日 14:00～17:00

○スタッフミーティング

毎月1回、第3日曜日 11:15～13:15
合わせて、ケースカンファレンスや学習会を行っている。

○世話人会

部門内の調整・企画の場として有志により構成。ホットライン部門研修に携わっている。

基本は毎月1回、第3日曜日 10:00～11:00にミーティングを開催。

○東京都 HIV/エイズ電話相談連絡会

東京都エイズ対策係と共同委託先の HIVと人権・情報センター東京の三者による定例会議。

毎月第2金曜日に都庁にて開催している。

○東京都 HIV/エイズ電話相談連絡会全体会

東京都エイズ対策係と共同委託先の HIVと人権・情報センター東京に係るスタッフで構成され、2012年度から始まった。年1回開催。

4. 2017年度の相談状況

1)「ぶれいす東京 HIV/エイズ電話相談」

●相談実績報告(2017年4月1日～2018年3月31日)

年間活動日数	51日間
総相談時間数	204時間
活動スタッフ数	のべ54名
年間相談数	396件
	男性 344件 女性 49件 不明 3件
	うち 陽性者 10件
	確認検査待ち 2件
	陽性者周囲 1件

●相談件数(ぶれいす東京)

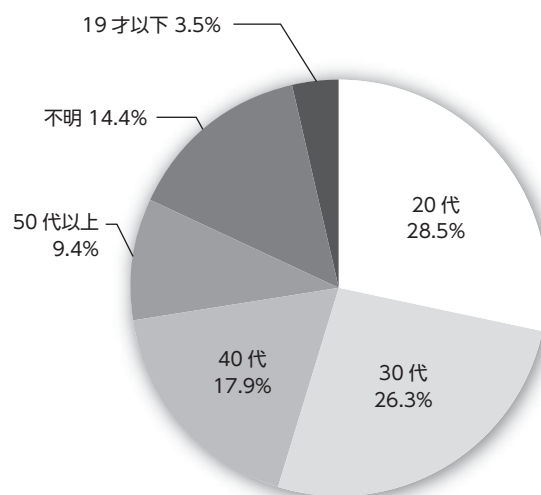
今年度の相談件数は、396件(昨年度：439件)だった。月平均/33件(同：36.6件)、1日平均/7.8件(同：8.6件)で、昨年と比べると月に3.6件の減少だった。過去の推移は、501件、479件、508件、439件、396件で、この5年間で1番低い数字だった。

●相談者の内訳(ぶれいす東京)(グラフ1)

性別は、「男性」344件(86.9%)、「女性」49件(12.4%)、「不明」3件(0.8%)だった。男女の割合は5年間同様の傾向を示した。

年代は「20代」28.5%、「30代」26.3%と昨年度より少し減少した。「40代」17.9%、「50代以上」9.4%と若干増加したが、「19才以下」は3.5%と変動がなかった。

グラフ1 相談者の年代(ぶれいす東京) n=396
2017年4月～2018年3月

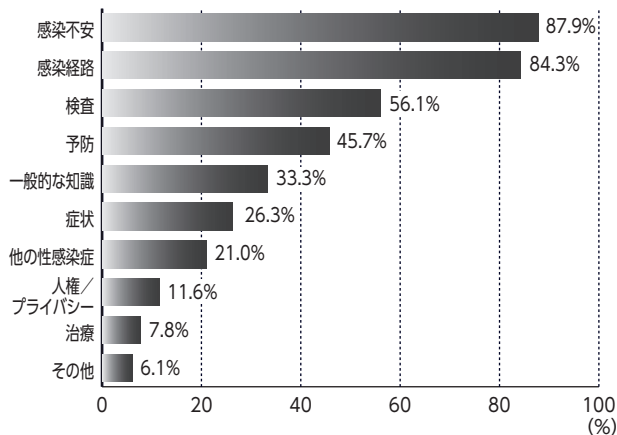


●相談内容（複数回答有）〈ぶれいす東京〉〔グラフ2〕

（％は、内容／相談件数）

相談内容の内訳は「感染不安」が中心で全体の87.9%（昨年度：86.8%）、次いで「感染経路」84.3%（同：80.6%）、「検査」56.1%（同：60.8%）、「予防」45.7%（同：41.5%）、「一般的な知識」33.3%（同：22.3%）、「症状」26.3%（同：25.5%）、「他の性感染症」21.0%（同：14.4%）、「人権・プライバシー」11.6%（同：8.2%）、「治療」7.8%（同：10.0%）、「その他」6.1%（同：4.8%）となった。「一般的な知識」⇔「症状」、「人権・プライバシー」⇔「治療」の順位がそれぞれ入れ替わった。

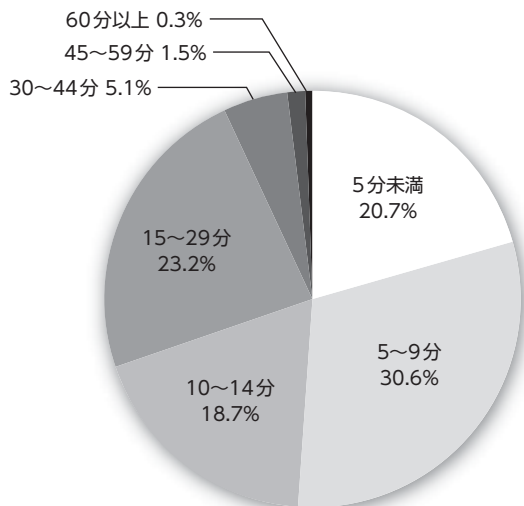
グラフ2 相談内容（ぶれいす東京）*複数回答あり
2017年4月～2018年3月



●相談時間〈ぶれいす東京〉〔グラフ3〕

全体的な傾向は、昨年度と同様だったが、30分以上の相談が少なくなった。「5分未満」20.7%（昨年度：20.5%）、「5分～9分」30.6%（同：29.8%）、「10分～14分」18.7%（同：17.1%）、「15分～29分」23.2%（同：22.5%）、「30分～44分」5.1%（同：7.1%）、「45分～59分」1.5%（同：2.1%）、「60分以上」0.3%（同：0.9%）と変動した。

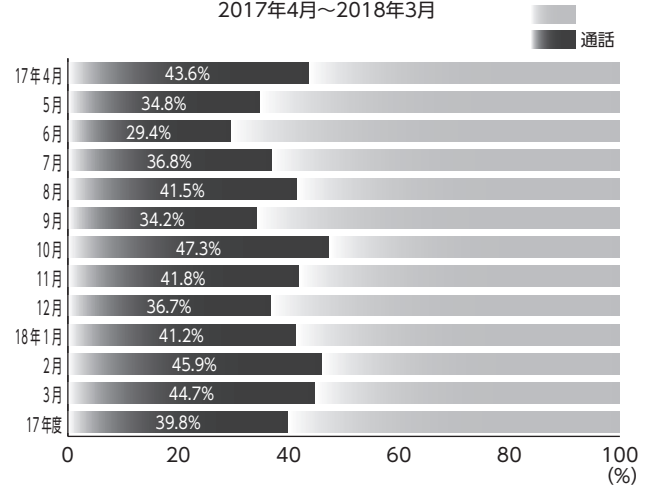
グラフ3 相談時間（ぶれいす東京）n=396
2017年4月～2018年3月



●回線占有率〈ぶれいす東京〉〔グラフ4〕 算出方法：総通話時間／総相談時間（超過は分母に加算）

回線占有率は、昨年度の5ヶ月あった50%以上の月が0となった。その結果、年度的回線占有率が39.8%（昨年度：46.5%）に減少した。

グラフ4 回線占有率（ぶれいす東京）
2017年4月～2018年3月

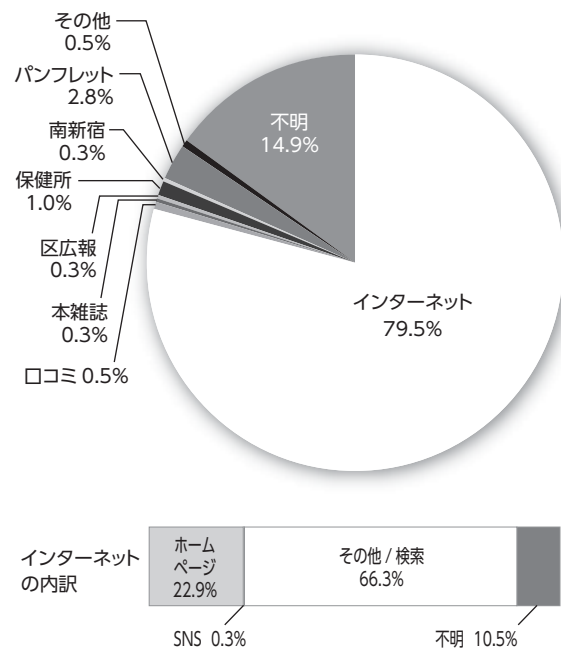


●情報源〈ぶれいす東京〉〔グラフ5〕

「情報源」は今年度から情報の収集の仕方を少し修正した。スマートフォンの普及で「インターネット」「モバイル」という分類の意味がなくなったので、「インターネット」に統一をした。

「インターネット」は全体の79.5%だった。続いて「パンフレット」2.8%、「保健所」1.0%だったが、それ以外は1%未満だった。「インターネット」の315件の内訳は、「ホームページ」72件（22.9%）、不明33件（10.5%）、「そ

グラフ5 情報源（ぶれいす東京）n=396
2017年4月～2018年3月



の他／検索」が209件(66.3%)、「SNS」が1件だった。その他の多くは、Googleなどの検索サイトからのアクセスだった。

●他県の割合〈ぶれいす東京〉

東京都外からの相談は238件(60.1%)と、昨年度の284件(64.7%)から4.6%減少したが、60%を超えており全国から相談があることを示している。

●陽性者及びその周囲への対応〈ぶれいす東京〉

HIV陽性者からの相談は10件(昨年度：8件)だった。確認検査待ち(スクリーニング検査が陽性/要確認/判定保留/擬陽性で、確認検査の結果が出ていない：以下、確認検査待ち)が2件(昨年度：6件)、陽性者周囲の相談が1件(昨年度：2件)だった。ぶれいす東京の相談における陽性者相談は、全体の2.5%(昨年度：1.8%)だった。

2)「東京都HIV/エイズ電話相談(夜間/休日)」

(東京都委託事業)

この相談は東京都から委託を受け、「HIVと人権・情報センター東京」と分担して行っている事業である。以下は「ぶれいす東京」が担当し、対応したものについて報告する。

■相談実績報告(2017年4月1日～2018年3月31日)

年間活動日数	154日間
総相談時間数	462時間(のべ924時間)
活動スタッフ数	のべ333名
年間相談数	2,230件
	男性 1,567件 女性 651件
	不明 12件
	うち 陽性者 22件
	確認検査待ち 10件
	陽性者周囲 9件
	確認検査待ち周囲 1件

■月別相談件数〈東京都〉

今年度の相談件数は2,230件(昨年度：1,951件)で279件の増加だった。月平均が185.8件(同：162.6件)で、1日の平均は14.5件(同：12.7件)だった。昨年度より1ヶ月あたり23.2件増加した。200件を超える月が昨年度は1ヶ月もなかったが、今年度は4ヶ月あった。11月、1月、2月、3月と後半に件数が伸びていた。

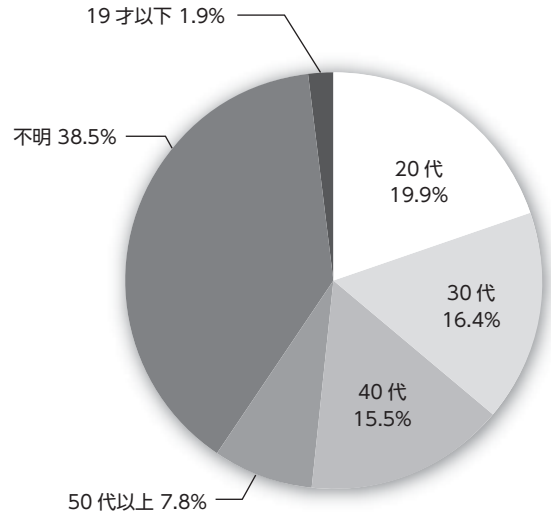
■相談者の内訳〈東京都〉[グラフ6]

性別は、「男性」70.3%(昨年度：82.6%)、「女性」29.2%(同：28.8%)、「不明」0.5%(同：0.5%)だった。今年度は「女性」の割合が若干増えた。

年代は、「20代」が19.9%(同：22.5%)、「30代」16.4%(同：27.5%)、「40代」15.5%(同：17.6%)、「50

代以上」7.8%(同：7.5%)、「19才以下」1.9%(同：1.7%)の順だった。「20代」⇔「30代」が入れ替わり、「不明」38.5%(同：23.2%)で増加した。

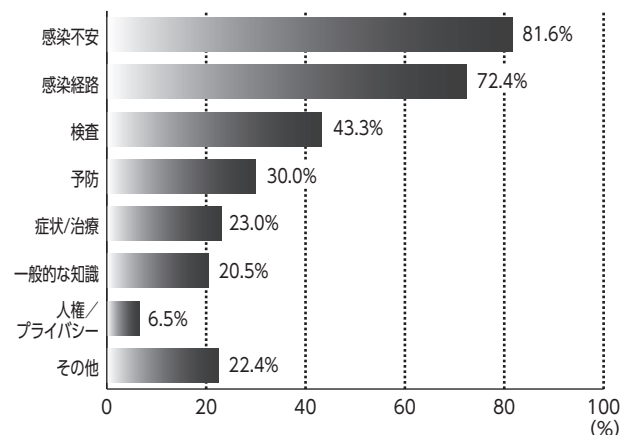
グラフ6 相談者の年代(東京都) n=2,230
2017年4月～2018年3月



■相談内容(複数回答有)〈東京都〉[グラフ7]

相談内容の内訳は、「感染不安」が81.6%(昨年度：80.9%)で一番多かった。続いて「感染経路」が72.4%(同：73.9%)、「検査」が43.3%(同：50.0%)と続いた。「予防」30.0%(同：37.3%)、「症状/治療」23.0%(同：23.2%)、「その他」22.4%(同：21.7%)、「一般的な知識」20.5%(同：15.4%)、「人権/プライバシー」6.5%(同：6.5%)で昨年との順位に変動はなかった。「一般的な知識」が少し増えた。

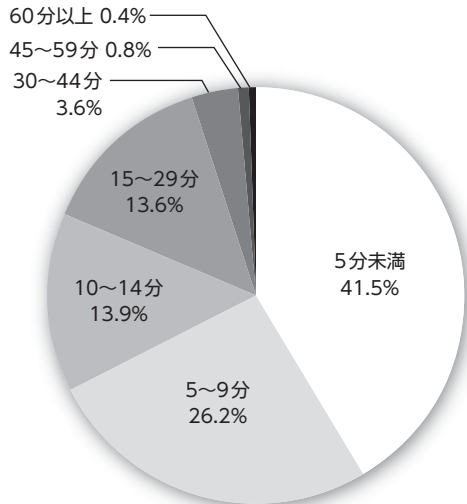
グラフ7 相談内容(東京都) *複数回答あり
2017年4月～2018年3月



■ 相談時間 (東京都) [グラフ8]

10分未満の相談は67.7% (昨年度: 60.2%) と半数以上を占めた。全体の95.2% (同: 95.2%) が30分以内に収まり、60分以上の相談は0.4% (同: 0.6%) と少なかった。

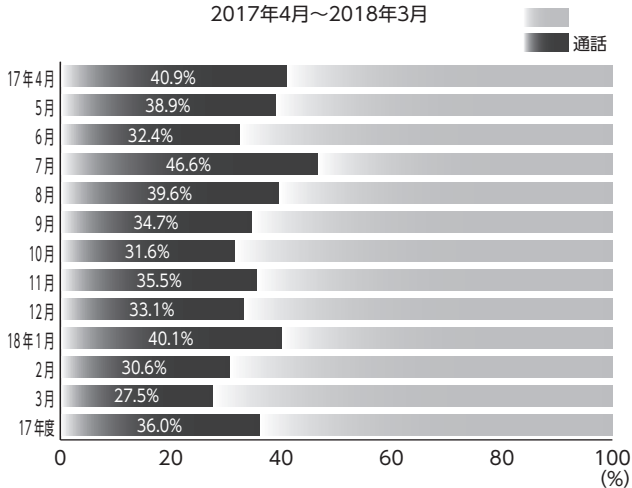
グラフ8 相談時間 (東京都) n=2,230
2017年4月~2018年3月



■ 回線占有率 (東京都) [グラフ9] 算出方法: 総通話時間 / 総相談時間 (超過は分母に加算)

今年度の回線占有率は、ほとんど30%台で推移した。昨年度と同様に50%以上の月が一度もなく、40%台が4月、7月、1月の3ヶ月だった。また3月は20%台で、年間平均は、36.0%だった。

グラフ9 回線占有率 (東京都)
2017年4月~2018年3月



■ 情報源 (東京都) [グラフ10]

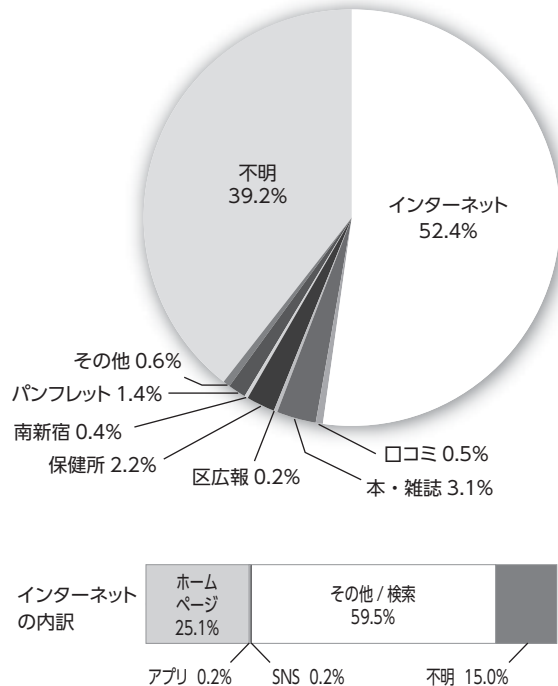
「情報源」は今年度から情報の収集の仕方を少し修正した。スマートフォンの普及で「インターネット」「モバイル」という分類の意味がなくなったので、「インターネット」に統一をした。

「インターネット」は全体の52.4% (昨年度: 69.2%) だった。続いて「本・雑誌」3.1%、「保健所」2.2%、「パンフレッ

ト」1.4%だったが、それ以外は1%未満だった。

「インターネット」の1,169件の内訳は、「ホームページ」293件 (25.1%)、「不明」175件 (15.0%)、「その他/検索」696件 (59.5%)、「アプリ」2件、「SNS」3件だった。その他の多くは、Googleなどの検索サイトからのアクセスだった。

グラフ10 情報源 (東京都) n=2,230
2017年4月~2018年3月



■ 他県割合 (東京都)

東京都外からの相談は870件 (昨年度: 960件) で、全体の39.0% (同: 50.2%) を占めた。昨年度より割合が減ったように見えるが、「不明」が増えたことが影響した。「東京都」の電話相談だが、全国のニーズに対応していることがわかる。

■ 陽性者及びその周囲への対応 (東京都)

HIV陽性者からの相談は22件 (昨年度: 30件) で、8件減だった。確認検査待ちは10件 (同: 11件)、陽性者周囲からは9件 (同: 14件) だった。東京都の相談における陽性者相談率は、1.0% (同: 1.5%) だった。

3) 相談全体のまとめ (ぶれいす東京/東京都)

① 相談件数の推移

東京都の5年間の数字は、2,062件、2,433件、2,244件、1,951件、2,230件と、昨年度まで減少傾向だったが、今年度は増加に転じた。

ぶれいす東京は、501件、479件、508件、439件、396件という推移を見せている。昨年度に続き数字が下がったので、改めて広報の強化の必要を感じる。

②ネット情報に振り回されているケース

インターネットが当たり前になり、多くの人がスマートフォンを持つようになった。また Google などの検索サイトが便利になり、簡単に様々な情報に触れられるようになった。その情報には正確なものもあるが、他人を貶めようとしているものや間違っただけの情報も流れている例も多い。性的な接触では、コンドームを着ければ、挿入行為での感染が防げることは浸透しているが、オーラルセックスでの感染の可能性や検査のウィンドウピリオドの表記はまちまちである。ネットを活字情報のように捉えて、信じきっている人もいて、電話で修正をするのが大変な相談もあった。

③リピーターの相談

今年度もリピーターが存在したが、特徴は大きく二分される。一つ目はもう何年も、人によっては10年単位でかけてきている長期的リピーターで、その多くは日常接触や接触すらしていないことで不安になり、細かく何度も確認をしてくる。もう一つは、一定の期間だけかけてくるリピーターで、多くは性的接触などの具体的な心配事があり、検査結果を受け取るまで続く。陰性の確認が取れると相談を卒業していくことが多かった。しかし中には、その後も陰性の結果が信じられず、相談が続く場合もあった。

④対応が難しい相談

今年度も対応が難しい相談が複数あった。全く感染の可能性がないことや仮定の話で何度も確認する相談があった。ご本人が辛いことは想像できるが、同じ回答を何度も求められることは、相談を受ける側には負担になる。また、いたずら電話や相談員に絡むようなケースもあり、毅然とした態度が必要である。

⑤陽性者関係の相談

ふれいす東京と東京都の HIV/ エイズ電話相談に寄せられた、HIV 陽性者・確認検査待ちとその周囲の人たちからの相談をまとめてみた。

□陽性者(32件)

1) 感染後6ヶ月以内の陽性者(6件/陽性者の18.8%)

※男性:6件/20代:1件、30代:2件、60代:2件、不明:1件/東京…4件、他県…2件

- ・1日1回の薬と食事の関連性について。
- ・HIVの判明と同時に記憶障害があり、今後への不安。
- ・明日、2回目の検査の数値が出るが、まだ障害者手帳の説明がないことについて。
- ・役所勤務で、手帳の取得で住民票を移したことでトラブルについて。
- ・主治医とのコミュニケーション(他の性感染症のこと)について。

- ・妻子と孫あり。家族には伝えていない。ゲイで、病気を知られることへの恐怖。

2) 感染後6ヶ月以上と長期療養中の陽性者(26件/陽性者の81.3%)

※男性:26件/30代:5件、40代:12件、50代以上:3件、不明:6件/東京…7件、他県…13件、不明…6件

[緊急や困難な事例]

- ・記憶障害等で生活が困難。外出に介護が必要。自立した生活ができるか不安。
- ・(感染6年)治療しているが、体に症状が出て、原因がわからないので不安。
- ・海外在住の陽性者。一時帰国中に薬がなくなった。明日帰国予定。
- ・体に発疹ができて拠点病院の救急に連絡したが、看護師に繋いでくれない。どうしたら良いか。
- ・(同10年)投薬中。風邪が長引いているのはHIVと何か関係があるか。

[専門的知識が必要な事例]

- ・(同10年)職場にHIVを報告したら、薬の資料の提出を求められた。
- ・住宅のローン会社から障害名を聞かれた。どう答えたら良いか。
- ・仕事をして3ヶ月、適応できず退職を考えている。仕事をどうしたら良いか。
- ・平成30年に自立支援の制度が変わると聞いたが、本当か。
- ・病院でHIVの薬をもらってきた。英米製なら飲むが、そうでなければ飲みたくない。(外国の方)
- ・HIV治療中。癌がわかった。すごく不安、お金がない。
- ・転勤予定。自立支援はどうなるか。どこに相談すれば良いか。
- ・服薬中。検出限界値以下なのだけれど、子供を作れるか。医師からはOKと言われている。

[プライバシー関連]

- ・整形手術の病院で、HIVを告げたら断られた。長年服薬して限界値以下。検査で陽性と出るか?
- ・交際1年。二人でHIV検査を受ける話がある。限界値以下でも陽性と出るか。通知はどうしたら良いか。
- ・(同12年)他科で手術の予定。HIVのことを伝えた方が良いか。
- ・近々目の手術で血液検査がある。HIVとわかると不利益がないか。言った方が良いか。

[その他]

- ・(同2年)精神科医と仲違い、その後服薬中断。明日受診予定。特に悩みはないが、話したかった。

- ・前のパートナーからHIVをうつされたことで、恋愛に対してトラウマがある。(2回)
- ・ハッテン場やSEXのことなど近況報告など。(5回)
- ・歯科医の器具の使い回しのニュースを見て、どう思うか。

□確認検査待ちの相談(12件)

※男性:8件、女性:4件／10代:1件、20代:3件、30代:5件、40代:2件、不明:1件
 ／東京…3件、他県…6件、海外…1件、不明…2件

[術前検査・妊婦検診]

- ・皮膚科の手術時、血液検査を受けた。緊急の電話でHIVの疑いを告げられた。(女性)
- ・術前検査で偽陽性。手術は終了。性行為は今までに一度もない。(女性)
- ・検査で判定保留をもらった。今後さらに検査に行く必要があるか。(女性)
- ・妊産婦健診で、判定保留と出た。結果が出るまで不安。(女性)
- ・術前検査で、スクリーニング検査陽性。確認検査中。
- ・痔の検査で陽性。妻子持ち。子作りしようと思っていた。どう伝えたら良いか。
- ・不妊治療中。結婚3年。結婚前は予防のない行為があった。妻とは話し合っている。

[自主検査]

- ・東南アジアに赴任中。スクリーニング検査で偽陽性。仕事や生活が続けられるか。

- ・即日検査で判定保留。男性と予防なし性行為あり。既婚。単身赴任中。ショック。
- ・パートナーと即日検査を受けて、自分だけ偽陽性と言われた。予防をしていた。
- ・クリニックの検査で判定保留。感染するような行為は思い当たらない。
- ・即日検査で確認検査に行くように言われた。行きたくない。自傷行為。死にたくない。(10代)

□陽性者周囲の相談(10件)

※男性:7件、女性:3件／20代:5件、30代:2件、50代以上:2件、不明:1件
 ／東京…3件、他県…5件、不明…2件

- ・(夫)妻がエイズ発症と言われているが、詳しいことを話しながらない。どうしたら良いか。
- ・(セクフレ)服薬中の陽性者と予防のない肛門性交をした。感染確率はどのくらいか。
- ・(セクフレ)喘息の薬と言っていたものがHIVの薬だった。予防なし行為あり。
- ・(元パートナー)2年前の元パートナーから陽性だったと連絡があった。検査に怖くて行けない。
- ・(元パートナー:女性)2年前までの元パートナーが陽性。その時複数の男性との接触があったらしい。
- ・(友人)以前予防のない行為が一度あった。検査を受けた方が良いか。気をつけることはあるか。

* [ホットライン活動状況]

ミーティング等稼働状況	回数	のべ人数	
電話相談シフト	154回	387	
スタッフミーティング	9回	77	5/21, 6/18, 8/20, 9/17, 11/19, 12/17, 1/21, 2/18, 3/18
東京都電話相談全体会	1回	18	7/23
懇親会	2回	26	4/16, 7/23
個別ミーティング	3回	7	9/2, 10/7, 12/1
シフト引き継ぎ	2回	6	9/10, 3/4
世話人会	5回	24	5/21, 8/20, 9/17, 11/19, 1/21
ホットラインオリエンテーション	2回	7	10/8, 10/9
ホットライン部門研修	3回	13	10/15, 10/22, 10/25
モニタリング	3回	6	
実地研修	8回	21	
新人修了ミーティング	3回	6	1/5, 1/13, 1/20
東京都電話相談連絡会	11回	31	4/21, 5/12, 6/9, 8/18, 9/8, 10/13, 11/10, 12/8, 1/12, 2/9, 3/9

- ・(友人)2人の友人が陽性になってから、付き合いを避けている。
- ・(知り合い：女性)3～4ヶ月前に陽性になったが、紹介状を失くしてしまったらしい。どうしたら良いか。
- ・(経営者)雇用している従業員がHIV陽性らしい。部下からのアウティング。どうすれば良いか。
- ・(同僚：女性)同僚の男性が、HIV陽性らしい。障害部門の人事にHIVのことを伝えたが、プライバシーをバラされないかパニックになっている。

□確認検査待ち周囲の相談(1件)

※男性/20代/他県

- ・付き合い始めた彼女が判定保留になった。前の彼氏とのことなので、自分が責任を取らなくても良いと思っている。陽性なら別れるつもり。

□陽性者相談などのまとめ

数年前、陽性者などの相談が難しいとの声が相談員から上がった時、ケースカンファレンスでの最終的な落とし所は、「不安な感情や気持ちを受け止めること」と「専門家が対応した方が良いこと」をわけて、「不安な感情や気持ちを受け止めること」に専念して、専門的なことはふれいす東京ポジティブラインに繋ぐことで、相談員の心理的な負担を和らげようと考えた。ところが今年度の陽性者などの相談内容を見ると、専門家でも対応が難し

いものが多く含まれていて、個別対応が必要な相談であった。特に地方では、プライバシーの問題があり、陽性者の暮らしにくさが見えてきた。

相談員は、気持ちを受け止めるよう努力をしているが、専門家のサポートや専門的な知識が必要な相談が多く、対応が難しかった。陽性者相談の相談員とも連携した学習会や、ケースカンファレンスを通じて、スキルアップする必要があると思うと同時に、どのような言葉をかけて、ふれいす東京ポジティブラインにかけ直してもらうかも課題である。

5. 活動報告詳細(2017年4月1日～2018年3月31日)

1) 活動実績

[シフト稼働状況] *(16ページ参照)

2) 新人スタッフ研修

他部門と共同の募集を実施。合同でのオリエンテーション・基礎学習を行なった後、ホットライン部門の専門研修を実施した。

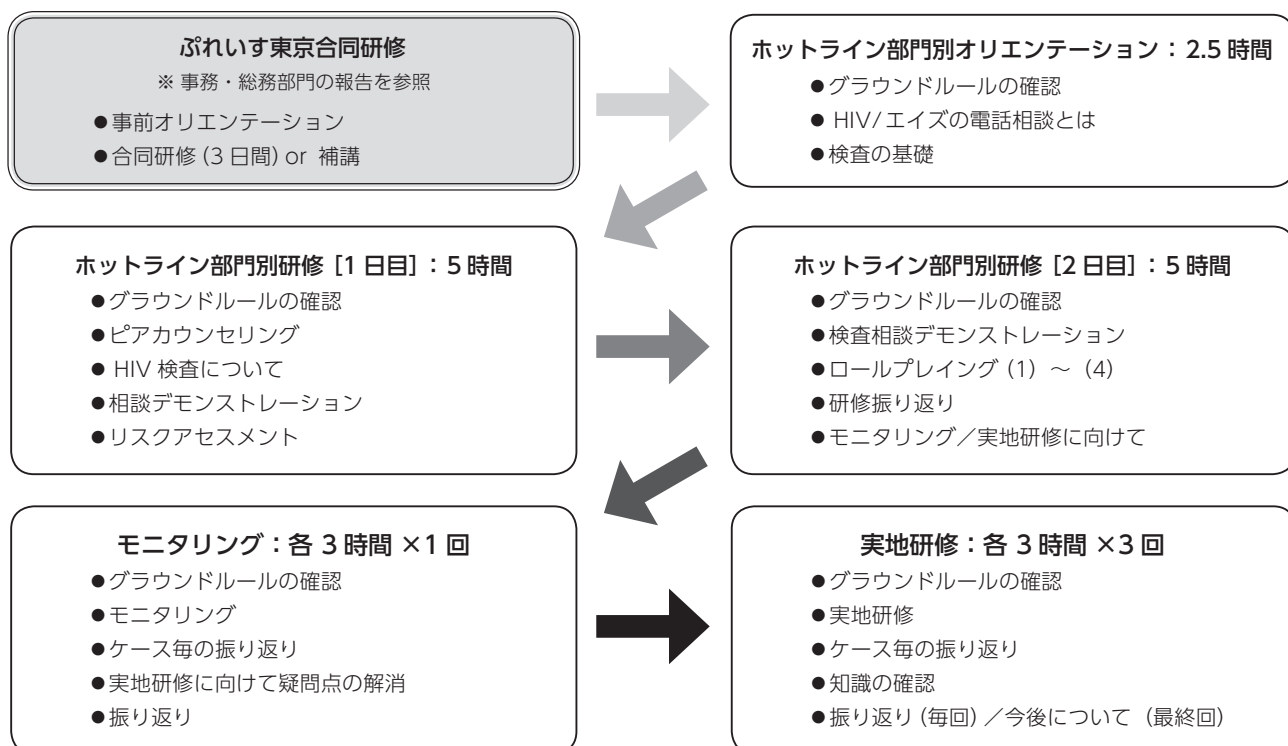
(1) 合同研修事前オリエンテーション

(2) ふれいす東京スタッフ合同研修

(1)(2)の詳細については、事務・総務部門の報告を参照

(3) ホットライン部門研修

電話相談員に必要な基礎講義を学習後、各研修生とも相談電話事例を用いてロールプレイング、電話相談のモニタリング、実地研修の個別指導へ。全課程終了後、再



[講師] 生島 嗣 (ピア・カウンセリング)・折茂 淳 (HIV 検査について)

[担当スタッフ] 阿曾 義文/足立 惟子/佐藤 郁夫/白幡 素子/染谷 太恵/高木 伸浩

度本人の意志を確認し、ホットラインスタッフに迎えた。研修の実施・指導はホットライン部門の世話人を中心に、現役スタッフが担当した。

6. スタッフの声

「長く続けられた理由」

阿曾 義文

2004年秋の合同研修に参加し、その年の暮れから本格的に電話相談を始めて、もう13年がたち、こんなにもよく続いたなとつくづく思います。

始めの一本は全く覚えていません。男性かも女性かも、何を話したのかも全く。それぐらい緊張していました。ただその時期はまだ電話相談の件数が、毎回のよう20件を超えていて、悩んでいる前に次から次へと電話がかかり、緊張している場合ではなかったのが良かったのかもしれない。バラエティにとんだ相談をたくさん受けられたことも、とても勉強になったのだと思います。

その後2007年からは新人研修にも携わるようになり、人に教えることが苦手な自分が、まさか人に教える立場になるとは、入ったときには想像できませんでした。これもホットラインにはいろいろな人がいるけれど、誰でも受け入れようとする雰囲気と、誰からも認められているという環境が、常に自分らしくいられる心地よさがあるので、こんなにも長く続けられてきたのだと思います。これからも、誰が来ても受け入れるホットラインの良さを守っていけたら良いなと思います。

「これまで活動を行なって来て得たこと」

宮澤 祐二

活動7年目になります。始める当初は、ぶれいすで何をしたいか希望的なものは特段無く、佐藤さんの大きな声に釣られてHLに入ったという感じでした。しかしその結果、良い経験と勉強をさせて頂きました。私、本職は技術系の仕事でしたので、人と話す必要の殆んどない状況でした。仕事上の問題点の解決は、事実を基に客観的に分析・推論し、解決するパターンでした。

しかし、このHLの仕事は客観的な情報提供だけではなく、生の声で相手の状況・主観を慮りながらお話をしなければならず、自分の最も苦手な事でした。しかし、給料を貰うための義務的な仕事としてではなく、あくまでも自分の自由意思に基づく積極的な時間の中で出来た事が私にとって非常に有意義で勉強になるものでした。そして、相手の主観によって問題の回答が違ふという事を勉強させて頂けたのも価値のあることでした。

あっそうだ！

今この原稿を書きながら気づきました。私、話し方が結構うまくなりました。そして、性格が丸くなりました。これは、意地悪なクライアントさん始め皆さんのお陰です。特に、あれ程話すのが下手くそだった私に対し辛抱強くご指導して頂いた佐藤さん他のスタッフの皆様がたのお陰です。ありがとうございます。

「一年を振り返って」

ナカネ

去年の冬で、電話相談を初めて1年が経ちました。月並みですが、あっという間に感じています。一方で、1回ごとに得るものや感じることもあるので、もう3年くらいは電話の前に座っているような感覚もあります。

参加のきっかけは「人手が足りないので、是非来てほしい」という呼びかけで、せっかくボランティアをやるのだから、それならば力にならなくてはと意気込んで研修を受けました。初めの頃は、元々の性格があがり症であることも手伝い、毎度なにかしらにつまずいては胸をヒヤヒヤさせ、先輩方のサポートに常に助けられていました。毎月シフトに入り続け、ようやく相談者の方とのお話を慣れてきたものの、医療の情報は日進月歩なので勉強不足を痛感することもあります。また、スタッフ同士でのコミュニケーションも徐々にできるようになってきました。

毎回、受話器を取る前にふと大きく息を吐かないと落ち着かない私にとって、この活動で何を得たかを考えると、頭がいっぱいで難しいです。しかし、電話の向こうの方々や、同じボランティアの人々となつなげられることが、この活動をして得られた財産だと思っています。今後も、いま自分と話している人に真摯な態度でいつづけたいです。

7. まとめ

今年度を振り返ると、一年中スタッフの人員が足りなかったことが、シフトを守るという意味で苦しかった。新人の補強はできたものの、シフトの運営はギリギリの状態が続いた。シフト担当やスタッフ全員が協力して乗り切れたが、来年度はまたしっかりと補強をして、安定したシフト運営をしたい。

また相談内容は年を追うごとに難しくなっている気がする。学習会やケースカンファレンスを重ねることで、スタッフのサポートにも力を入れたいと思う。

[データ作成] 阿曾 義文 [報告] 佐藤 郁夫

部門報告 (Sexual Health Project)

SHPミーティング

2017年10月6日(金) ミーティング 出席：5人
2018年1月26日(金) ミーティング 出席：6人

SHPスタッフが参加したイベント

- ・ TOKYO AIDS WEEKS 2017
(11月23日～26日)のボランティア
- ・ 第31回日本エイズ学会・学術集会
(11月24日～26日)のボランティア

SHPスタッフが企画・運営したイベント

- ・ ボランティア交流会
2月21日(水) 午後7時
参加者：18人

まとめ

今回のボランティア交流会も、前年に続き大好評でした。今後も、ぜひ継続していきたい。



ボランティア交流会感想

◆「皆で参加した交流会」

部門：バディ クレヨン しんじ(男性/ゲイ/40代)

第3回ボランティアスタッフ交流会は、グランドルールの確認から始まりました。皆で参加した二回のゲームタイムと中休憩のカフェタイムを満喫。コップにマジックで各自の名前を書いて、コールドドリンクとチョコレートクッキー、抹茶クッキーや昔懐かしい麩菓子など、そして代表の生島さんの沖縄土産のごまのクッキーの味が濃厚で食べ応えがあり自分としては当日の一番の至福でした。

集まったメンバーは、お互いストレート(square ノン気)かLGBTか、または、健常者が障害者か、いろいろなスタンスで交流会に参加でした。仕事や家事手伝いの合間に、充実した時間を過ごせて、自分としては大満足のボランティアスタッフ交流会でした。

帰りの電車でグランドルールの事を思い出し、静観でした。

当日、自分は風邪を引いていたのですが、インフルエンザ検査は、陰性でした。日本でも”Flu but A.I.D.S.”って言うフレーズが有名でしたが、Fluって風邪(cold)でなくインフルエンザの事。自分は、人生でインフルエンザに感染した事がないのですが、友達に誘われて南新宿の検査所で自分だけH.I.V.陽性の告知と病院の紹介状を渡された時の事を思い出しました。あれから24年の歳月が過ぎました。個人各自は、一人ではないのだとボランティアを通して感じられました。その事を思うと

ぶれいす東京の活動は、社会的に意義のある事だと感銘です。

◆「スタッフの皆さんとのつながりをこれからも」

部門：バディ

ちのぱんにいさん(40代/男)

私はぶれいす東京でバディとしてボランティア活動を続けています。もう6～7年この活動を続けています。私の場合は利用者さんの所へ定期的に訪問して、話し相手や介助を行います。ご本人宅という場合もあれば病室ということもあります。このような活動であるため、基本一人で動いています。よって他のボランティアさんと関わるのは毎月のミーティングやイベントの時ぐらいです。なので、今回のボランティアスタッフ交流会は他のボランティアさんやスタッフさんと関わる貴重な機会でした。普段あまり会うことのない方々との交流なので緊張しがちですが、皆さんがゲームやおしゃべりを通じて交流することで、楽しい2時間はあっという間に過ぎてしまいました。

ぶれいす東京のボランティア活動は様々なものがあるので、それぞれで活動するボランティアさんのことを知ることができる数少ない機会として、このボランティアスタッフ交流会はぜひ続けていただき、一人でも多く参加してもらえたらと思います。



ぶれいすトーク

ぶれいすトークは、テーマごとに講師を招いてトーク&交流をセットにしたイベントです。セクシュアル・ヘルス(性の健康)や、HIV/エイズについて情報を増やし、話せる場を作り出します。2017年度のぶれいすトークは、ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会の後援で2回開催しました。この場をお借りして改めてお礼を申し上げます。

■「第31回 日本エイズ学会学術集会～アンコール発表会」報告

第31回日本エイズ学会・学術集会(11/24～26開催)

では、ぶれいす東京スタッフや研究班メンバーによる発表がありました。学会に参加できなかった方々にも聞いていただきたいとアンコール発表会を企画しました。

日時：2018年1月8日(月・祝) 15:00～17:00

会場：CASE Shinjuku

参加者・演者・スタッフ：48名

座長：生島 嗣 樽井 正義 池上 千寿子

演題・演者：

- ・ HIV 陽性者と周囲の人への相談における、判定保留者の背景について (牧原 信也)
- ・ HIV 陽性の相談員による、陽性等者向け電話相談サービスに関する考察 (佐藤 郁夫)
- ・ HIV 陽性等の HIV に関する相談・支援事業 (ピア・カウンセリング等による支援事業) における在日外国人のサポートの現状と課題 (山本 裕子 NPO 法人シェア＝国際保健協力市民の会)
- ・ 感染がわかって6ヶ月以内のピア・グループ・ミーティングの参加者に関する考察 (加藤 力也)
- ・ 刑事事件等による身柄拘束者および受刑者に対するソーシャルサポートの一考察 (村崎 美和)
- ・ 薬物使用と性行動と精神的健康度の関連性 -- MSM 向け出会い系アプリ利用者の意識や行動に関する調査から -- (三輪 岳史)
- ・ わが国の MSM における PrEP および nPEP の認知度、利用経験、利用意向に関する分析 -- ゲイ向け GPS アプリ利用者の意識や行動に関する LASH 調査から -- (山口 正純 武南病院)
- ・ GPS 機能付き出会い系アプリを利用する MSM における Sexual Compulsivity スケール日本語版 Ver.1 の信頼性、妥当性の検討 (井上 洋士 放送大学)
- ・ ゲイ向け GPS アプリを利用するトランスジェンダー等の調査 (大槻 知子 代理発表：生島 嗣)

当日の参加者5名の方から感想文をいただきました。

◆「これからも、自分に出来ることを！」

タカヒロ(男性、ボランティアスタッフ)

今年の学会は東京で開催されるので、久しぶりに参加できるかなと思っていましたが、今年は TOKYO AIDS WEEKS の運営スタッフとして参加していたので、学会

の方まで時間をつくることができませんでした。

自分にとってこの学会は、「当事者として自分も何か出来ることはないか？」と考えるきっかけを作ってくれました。一昨年、東京で開催された学会に初めて参加し、たくさんの様々な立場の人がこの病気に関わっているのを見て、受身でしかいられなかった当事者としての自分に、新しい方向性を示してもらえました。

その後、ボランティアスタッフ研修を受けて Gフレに参加。一昨年も TOKYO AIDS WEEKS のイベントに参加しましたが、今年は運営側として参加しました。同じイベントに違う立場で参加できたことは自分にとっても嬉しかったです。

来年の学会には参加できるかな…とっていたところに、このアンコール発表会。学会のパンフレットに気になる演題がいくつかありましたが、その一部でも聞くことができて良かったです。

◆「LGBTとメンタルヘルス、そしてHIV－多面的な問題の解決のために－」

武士(LGBTメンタルヘルスサポートカラフル@はーとファシリテータ、作業療法士)

「カラフル@はーと」の武士と申します。LGBTでメンタルヘルスに問題を抱えるダブルマイノリティのピアサポートに取り組んでいます。

HIV・AIDSはLGBTとメンタルヘルスの両方に関連が深く、今回のぶれいすトークは大変興味深いものでした。LASH調査では精神的健康度とリスクな性行動・HIV感染の関連調査がありました。私自身、臨床やサポート活動の中で、感染症に限らず様々な身体疾患が精神的不調と相互に影響し合うことを実感しており、こういった分析はコミュニティにおける公衆衛生の視点から非常に重要であると再認識しました。

精神・身体的な問題は仕事や人間関係にも影響し、結果として経済的、社会的な問題へと重積化・複雑化する場合があります。多面的な問題を抱える人の支援においては、自分の専門とは異なる領域を学んだり、支援者の横の繋がりを作ることが非常に重要です。アメリカの社会学者 Mark Granovetter の “Strength of weak ties” という説があります。普段の自分の仕事や生活では関わらない個人や組織と接触すると、新しい情報やアイデアがもたらされる「弱い繋がり」を指します。今回の企画を通じて新しい学術的知識や支援の実際を学び、私の中に新しい視点が生まれたように思います。今後も情報発信や交流会に多くの方が参加され、良い力が生まれていくことを期待しております。

◆「年女・年男」

高田 良実(古いボランティア)

しばらくご無沙汰していた様々な活動にまた参加できたらと思い、その手始めにぶれいすトークに出席しました。ちょっと変ですが、一番印象に残ったのは、司会の

池上さんの、ご自身も生島さんも「二人とも年女と年男です」という発言でした。え～そうなんだ。それじゃあ24年前、1994年に横浜で国際エイズ学会があった年がぶれいす設立の年だから、その時もお二人とも年女と年男だったんだなあと思って、その頃のお二人の顔を思い出してたら（そんなに変わってないですが）、昔の活動の思い出が頭の中を駆け巡っちゃいました。

今回の研究発表の中にも「HIV陽性の相談員による電話相談」とか「ピアグループミーティング」とかあって、今はHIV陽性者の方々が活動の中に確実な地歩を占めていることがわかりました。24年前もHIV陽性者の活動家仲間はいたけれど、HAART治療のない頃だったから、「来週」の活動の相談はできても、まだ「来年」の相談や約束を一緒にすることはできませんでした。今は干支一回り先のことにだって一緒に思いを馳せることができますよね。陽性者も非陽性者も一緒に歳を取れるこの時代、どんな活動が求められているのかなあと、改めて私に考えるきっかけをくれた会でした。

◆「素晴らしい活動」

Yuji(ゆうじ) (ゲイ/パートナー、ぶれいす東京)

ボランティアスタッフで参加した為に見えませんでしたのでアンコール発表会に参加しました。発表者の方々の話を聞いて頑張っている事を素晴らしいと思いました。耳の不自由の僕で手話通訳を付いて頂き、感謝しています。ありがとうございました。

◆「ゲイの性行動と薬物使用の関連性に対する感想」

成島 光之助(ナルシマコウノスケ)

(学生: ドイツ, Alice Salomon Hochschule Berlin)

様々な専門家の調査結果を聞くことができ、とても貴重な時間を得ることができた。

その中でもLASH調査を元にした「薬物使用とHIV感染リスクの高い性行動の関連性」、「薬物使用と精神的健康度の関連性」等の発表(三輪岳史氏)が興味深かった。欧米の調査だと、例えば人気ゲイ出会い系サイトSquirt.org(カナダを中心とする主にアングロ・サクソン諸国に利用者が多い)が22,000人以上のサイト利用者に対して行ったアンケート調査等が既に存在したが、日本でゲイの出会い系SNSを利用した調査は初めてなのではないか。

上述のSquirt.orgのアンケート調査では、全体の30%がSexの際に薬物を利用したことがあるという結果を得ており、その薬物使用者に対する「何が最もお気に入りの薬物か一つ選択する」質問で得られた回答は、クリスタルメス36.32%、大麻18.97%、コカイン12.59%と続く(ドイツのゲイ情報サイトQueer.deを参照した: http://www.queer.de/detail.php?article_id=28002)。ベルリンにおいても2012年以来クリスタルメスにかかわる犯罪件数が6倍も増加しており

(2016年3月のベルリン警察麻薬・薬事犯罪部部長インタビュー時点: <https://www.welt.de/vermisches/article153717732/Manche-sagen-Crystal-ueberschwemmt-die-Homo-Szene.html>)、とりわけゲイコミュニティのセックスパーティーにおいて流通していることが、麻薬等の依存者に対する相談支援施設の報告から明らかになっている。

LASH調査を見る限り、日本のゲイコミュニティにおいてクリスタルメスが流通しているとは言い難い。ただ、日本では流通していないからこそ、当該薬物あるいは薬物全体に対する知識に乏しいということも考えられる。欧米の現状およびクリスタルメスの毒性や強烈な依存性を考えると、薬物の危険性自体からアプローチする啓蒙活動もまた重要だと改めて思った。

■『感情の「みかた」 ～つらい感情も、あなたの「味方」になります。～』報告

日時: 2018年1月27日(土) 18:30 ~ 20:30

会場: 新宿区戸塚地域センター7階 多目的ホール

講師: 堀越 勝さん

(国立精神・神経医療研究センター 認知行動療法センター センター長)

参加者: 84名



堀越勝さん(右)

1月27日に、認知行動療法の専門家である堀越勝氏を招き、学習会を開催しました。

「つらい感情も、あなたの「味方」になります」という言葉は、多くの人たちの心を動かししました。「ぶれいすトーク」という誰にでも開いた場でもあり、いつもより広がりのある顔ぶれでした。遠方から初めてこの会のために来た方、家族や友人を誘っての参加、以前ぶれいす東京で活動していて久しぶりにいらした方などが参加してくださった。また、陽性者やその周囲の人たちだけでなく、普段あまりHIV/エイズへの関わりがない方まで、幅広い層の参加があり、84名を数えました。また開催して欲しいという声も聞こえてくるくらい、貴重な講演でした。

堀越勝さんに、この場を借りて、お礼を申し上げます。

以下、参加者5名の感想文です。

◆「感情が発するアラーム」

とんすけ

私は HIV 陽性、双極性障害、脳血管障害、糖尿病…決してポジティブ感情になれない環境下で更に、誰にも助けて！とも言えず貝のような毎日を送っています。唯一の救いは通院先のカウンセラーと主治医と話す時間のみ。助けて！と言える友人もいないので今回のような講演会に自ら参加しようと行動に移したのは初めてのことでした。

堀越先生のお話にもありましたが、行動は自分の考え、やがて感情を変えていくというお話はとてもわかりやすく、私でも実践できそうだと思います。

感情が発するアラームから逃げるよりも気づいている方がいいというお話はアラームから逃げている私にとって胸の痛い話ではありません。

毎日生活していて不安のアラームが鳴りっぱなし。まともにも聞いていたら「いやー！」と叫んでしまいます。すぐにはできないかもしれませんが、不安の感情のアラームを一つ一つ聞き、医師やカウンセラー、親友などに話せるようになったらいいと今日の講演を聞き、少しずつ行動に移せたらと思いました。

とてもわかりやすく感情、人間関係、自分自身の内面について教えていただいてとても勉強になりました。また機会がありましたらもっと詳しくお話を伺いたいと思います。

私のような精神科に通い、カウンセリングを受けている者でもココロの中がモヤモヤしている毎日が今日のお話で少しスッキリしました。やはり行動は大切です。

今日は本当に貴重なお話、ありがとうございました。今後の参考にさせていただきます。

◆「わたしのすべては感情と関係からできていた」

江間 繁博(出版社勤務)

生物としての「わたし」は何十兆個もの細胞からできている。でも、人としての「わたし」はそんな無機質なものじゃない。ひと時も感情と関係から無縁ではなかった。

いま、心のなかにどんな感情があるのか、なぜそういう感情が出てきたのか、その感情によってどういう考え方や行動につながったのか。その仕組みに気づいて、もう少し自分のことを離れて観ることができたら、ずいぶんと気を楽に過ごせたんじゃないかと思う。

きょうの堀越勝先生のお話はそのことを教えてくれた。

「喜び」という感情はいいのだが、厄介なのがネガティブ感情の「怒り」「悲しみ」「不安」。いつもふとしたことで現れ、しだいに大きくなり自分を苦しめてくる。堀越先生はそれを、自分のなかに何が起きているのかを知らせてくれるアラームなんだという。アラームとして受け止め、心のなかに及ぼしている感情の動きに気づくことで、その感情を小さくしていくことができる。その時に大切なのが人と信頼や安心できる関係を持てているかが重要。そういう人が三人いればいいそうです。

人は一人で生きていけないし、もし周りに心の苦しみを抱えている人がいれば、そういう関係を築いてあげたいと思うし、わたしがそうなった時はそういう関係を持っていたい。関係性が築けていれば「頑張ってみよう」という言葉も禁句ではないという。

「ラサへの歩き方 祈りの 2400 km」という映画を見た。チベットの聖地ラサへ五体投地で巡礼をする旅を描いたドキュメンタリー。そこに登場する人たちが、穏やかな時間とともに、物事を受け入れ、人を認め合う姿のなかに、感情と関係の豊かな世界がありました。

◆「傷付いた人は、愛され、支えられる必要がある」という言葉がずっと聞きたかったんだ

しんしん

日々生まれ変わりたいと願っている自分自身のため、支援職としての認知行動療法への関心から参加。誉め言葉も否定的に受けとめがちな、セクマイの親友を連れて。

「ネガティブな感情こそ自分の味方になり得る」という冒頭の言葉に、ノックアウトされた。感情とそんなに自覚的、意識的につきあったことはなかった気がする。怒りは、危険を知らせてくれるアラームだという。

何かとても重要なことを伝えようとしてくれていることは、わかった。でも、最初は図式を多用した抽象的な内容についていくのもやっと。それが質疑応答の時間になって、心をわしづかみにされた。

「『他人は変えられないから、自分をまず変える』という考え方をどう思われますか?」というような質問だったと思う。「それを聞くと、裁かれた気分になります。まず、傷付いた人は、愛され、支えられる必要があります。寄り添うことから始めないと」という返事に、ずっと、気が楽になった。

この言葉が、私はずっと聞きたかったんだと気づいた。自分を変えようと思いつつ、心の痛みを一時的に忘れようと、つい悪循環に陥っていたから。

堀越さんにも人に言えないような秘密があるとうかがって、ご自身の回復の過程も、できれば、お聞きしたかったなと思った。会場でご著書を購入。以来、少しずつ読んでいる。自分にかかる言葉の大切さなど、深く深く心に浸透してきている手応えがある。堀越さん、ぶれいすの皆さん、ありがとうございました！

◆「話し方ではなく聞き方の大切さ」

白幡 晶(大学教員)

妻が“ぶれいす東京”でボランティアをしている関係で、今回の講演を知り、参加させて頂きました。ご著書『感情の「みかた」』は、すでに共感を持って拝読していましたが、感情の扱い方に対する考え方や相談事例のお話を通して、非常に誠実な堀越先生の臨床家としての姿勢や適格なアドバイスにあらためて感銘を受けました。教育機関に従事する身としても、「関係をよりよくしてくれるのは、話し方で

はなく聞き方である」など、多様な悩みを抱える学生たちに対応を迫られる大学教職員にとって、重要な視点をご教示いただいたと思っています。

情報が氾濫するストレスフルな社会環境で悩みを抱える人々との対応では、相談業務に従事する方たちが、クライアントの負のエネルギーに自らが巻き込まれることを回避する必要があるように思います。その意味で、悩みの本質をわかりやすく解説頂いたご講演は、クライアントの怒りや喪失感の源とともに、相談を受ける側の明確な立ち位置も示してくださっているのだろうと思います。質疑応答を通して、そのことも強く感じた次第です。

◆「人生は春夏秋冬の絵画のようなもの」

森田 和弥(マリア・ボーゲン) (役者、歌手、心抽象画家)

黒は色々な違う色からできている
絵描きをしてる友人に昔聞いた言葉を思い出した
真っ暗闇のような僕の感情…
いつの頃からだったんだろうか
僕は自分の感情を抑えるようになったのは…
幼稚園の頃は、無邪気に好きな女性アイドルを真似して歌って踊ってた…

あの楽しかった気持ちを素直に出せなくなったのは…

長年言葉にもならなかった
僕の「…」。

男なのに女みたい…
オカマ…

心がガラスみたいに粉々になったような
怖くて悲しくて苦しかったこの気持ち
ゴミ箱に捨ててしまおうとしてたら、本当の自分がわからなくなって僕は離人症になった

ゲイをカミングアウトして
悲しいことも辛いことも嬉しいこともし
絵にしたり、歌にしたり、芝居をしていきたい
それがエネルギーになるから

僕は僕の「みかた」になる
味方
見方
診方
人生は舞台のように幕が開くことと、閉じることに似てる
沢山の感情を知ることは、愛の広さや深さを表現できる人になるためと思う

舞台に立って役を演じる時

どこからか大きなエネルギーが湧いてくる

自分では誰か他の人を演じながら
喜怒哀楽の感情の引き出しが
こんな自分にあったのか
不思議に思うほど
人生に起きる良いことだけでなく、悪いことも糧になっていると思う瞬間だ

「心は人に与えられた土地のようなものである」

僕は「人生は、舞台のよう」に思う
幕の向こうにいるもう一人の自分の心がより広く深く豊かになるための舞台
感情はガソリンのようなエネルギー
操作できる自分の心を育てるのは、今の自分の役なんだ

みんなでヨガ

ぶれいす東京のボランティア・スタッフとネスト・プログラム利用登録者を対象とした「みんなでヨガ」を、6月と10月の2回開催しました。講師は海外生活の中でヨガと出会いトレーニングを積んできた方で、初心者にも親切に指導をしてくださいました。利用者さんやスタッフの「ココロとカラダ」の関係を整えることと、ファンド・レイジングの目的も合わせ持ったプログラムです。

初回の6月2日(金)には17名、2回目となる10月19日(木)には12名の参加があり、とても好評でした。以下、参加者3名の感想文です。

◆「みんなと深呼吸した時間にありがとう」

陽平

ヨガは以前通っていたフィットネスジムフィットネスクラブで初めて体験し、その体幹強化効果、ストレッチ効果、リラックス効果に惹かれて度々レッスンに参加していました。HIVに感染してからは免疫力アップにいいと聞いてヨガマットを買って自宅でもヨガをやっていました。

フィットネスクラブを退会してヨガクラスは久しぶり、本場仕込みのレッスンを楽しみに参加しました。会場に着くと平日ということもあり1番乗り。イケメンの先生が気さくに話しかけてくれて緊張を解きほぐしてくれました。平日だしそれ程参加者が集まらないのかなと思っていましたが、時間が近づくにつれ会場はいっぱいになりヨガ人気は高まっているんだなと改めて感じました。

レッスン内容は初心者や自分のような体の硬い人には難しいポーズもありましたが、ポイントをおさえて指導してくれる本格的な内容で面白く、心と体がリラックスできました。また機会があればまた参加してみたい！最

近忙しくて時間が取れないことが多かったのですが瞑想をして心を落ち着かせたり自分自身と見つめ合う時間を少しでも持ちたいなと思いました。

◆「身体も心もスッキリしました」

ともゆき(感染告知年 2002年/服薬歴約2年/40代)

ヨガのプログラムをニュースレターで発見したとき、どんな内容なんだろう?と気になり、すぐに申込みました。当日、遅刻ギリギリで会場に着くと、満員に近いぐらいの人が既について、関心を持っている人の多さに早速驚きました。それと、インストラクターさんが参加者一人一人に話しかけて、参加者のヨガ経験レベルを把握していたところに、期待感も高まりました。

プログラムがスタートすると、ゆるーいポーズから、負荷のかかかってくるポーズまでいくつも行いました。初心者から経験している人まで、みんなが楽しめるように、バランスの良いメニューだったと思いました。いちばん難しいと思われる逆立ちのようなポーズのときに、苦戦しながらも挑戦している人、挑戦している人を見ている人、休んでいる人、と参加者みんなが、無理せず自分のできる範囲内で行っていたのも印象的でした。

インストラクターさんも、ポーズを教えながら、どんどん参加者の方に行き、矯正や添え手を行ってくれたのも良かったです。ヨガに集中しているうちに、心地良い疲れと、身体も柔らかくなった気がしてきました。

1時間以上のレッスンもあっという間に終わり、終わったときには、仕事後の疲れも消えているくらい気分も良くなりました。今後も、このような体を動かすイベントが開催されてほしいと思いました。

◆「ヨガの出会いと感動」

とし

シーンとした静けさの中、思わず「ウフフッ ウッウフフッ」と吹き出す。静かな中にも明るい雰囲気集いでした。

途中僕も何度も運動不足を感じたり、吹き出しそうになりながらもヨガに集中出来ました。悩みや色々な重い心を忘れられる時間になりました。生活で悩んだり色々考え過ぎてても仕方なく、普段明るく想ってしようとしても無意識のうちに、心の片隅にでも、暗い想いも存在するのが本当の所だと思います。ヨガはそんな部分も忘れさせてくれる所作のひとつだと知りました。想像以上でした。感動です。

ゆっくり呼吸を整え、心身ともに集中し、瞑想しポーズをしていく、実践してみると、不思議とリラックスして落ちつく事が出来ました。ヨガの後も、心身ともにスッキリしてびっくりしました。先生の指導もとても良かったです。常に悩み、不安、心配を抱えている人達には、精神的にも、心身ともに、とても良いものだと感じ知りました。

今後もこのヨガの集いは、これからの心身ともに問題を抱えた人達にはとても良い体験で、それからの人生に前向きになれる所作のひとつだと思います。これからも続けて頂きたいと希望します。ありがとうございます。感謝合掌!!

部門報告 (Gay Friends for AIDS)

1. Gay Friends for AIDS 電話相談

● 2017年度活動記録

(1) 実施日

毎週土曜日 19時～21時

(2) 年間相談活動日数

51日 (2016年度：51日)

(3) 電話相談活動時間数

102時間 (2016年度：102時間)

(4) 相談体制

相談員 5名 + シフト担当 1名

(5) 年間相談件数

135件 (うち陽性者等の相談：9件)

(2016年度：相談件数 103件、うち陽性者等 10件)

(6) ろう者ゲイ (聴覚障がい者) のメール相談

0件

● 2017年度相談件数

(1) 全般

表1は月別の相談件数および1日あたりの平均件数を表している。

2017年度の年間相談件数は前年度と比べ32件の増加で、6月、8月、9月、11月、12月、1月、2月、3月は前年度より増加した。1日あたり0.68件の増加だった。

表1 月別の相談件数及び一日当たりの平均件数

年	月	2017年度			(参考) 2016年度			
		相談 件数 (件)	実施 日数 (日)	平均 件数 (件)	相談 件数 (件)	実施 日数 (日)	平均 件数 (件)	
2017年	4月	9	4	2.25	16	5	3.20	
	5月	7	4	1.75	8	4	2.00	
	6月	13	4	3.25	7	4	1.75	
	7月	8	5	1.60	10	5	2.00	
	8月	12	4	3.00	8	4	2.00	
	9月	15	5	3.00	4	4	1.00	
	10月	11	4	2.75	13	5	2.60	
	11月	11	4	2.75	7	4	1.75	
	12月	8	4	2.00	5	4	1.25	
	2018年	1月	15	4	3.75	8	4	2.00
		2月	13	4	3.25	7	4	1.75
		3月	13	5	2.60	10	4	2.50
合計		135	51	2.66	103	51	1.98	

(2) 相談時間

表2は相談時間を10分単位にまとめたものである。

2017年度は、10分以内で終わる相談が73件で54.1%であった。なお、1件あたりの平均相談時間は13.1分で、前年度の16.6分より減少した。

表2 相談時間

相談時間 (分)	2017年度		2016年度	
	件数	割合	件数	割合
～9	73	54.1%	39	37.9%
10～19	37	27.4%	27	26.2%
20～29	13	9.6%	21	20.4%
30～39	6	4.4%	9	8.7%
40～49	2	1.5%	4	3.9%
50～59	4	3.0%	3	2.9%
60～	0	0.0%	0	0.0%
合計	135	100.0%	103	100.0%

(3) 相談者の年代

表3は相談者の年代別の相談件数を表している。

前年度は、20代、30代で70%以上を占めていたが、2017年度は30代が減り、40代が増加した結果、20代、40代で約70%を占めた。不明が前年度のほぼ倍に増えたが、特定のリピーターの影響である。他の項目での不明の増加は同様の理由である。

表3 年代別の相談件数

年代	2017年度		2016年度	
	件数	(割合)	件数	(割合)
10代	4	4.4%	5	6.3%
20代	36	40.0%	35	44.3%
30代	15	16.7%	24	30.4%
40代	28	31.1%	11	13.9%
50代	1	1.1%	2	2.5%
60代以上	6	6.7%	2	2.5%
不明	45		24	
合計	135	100.0%	103	100.0%
有効データ	90		79	
有効 = (合計 - 不明)				

(4) 相談電話の発信地域

表4は相談電話の発信地域を示している。

2017年度は、「関東以外」からの発信が5割以上を占め、前年度と大きくは変わらなかったが、「東京」からの相談が7.7%減り、「東京以外の関東」からの相談が9.1%増加した。

表4 相談電話の発信地域

地域	2017年度		2016年度	
	件数	(割合)	件数	(割合)
東京	12	13.6%	17	21.3%
東京以外の関東	30	34.1%	20	25.0%
関東以外	46	52.3%	43	53.8%
不明	47		23	
合計	135	100.0%	103	100.0%
有効データ	88		80	

有効 = (合計 - 不明)

(5) 相談電話の情報源

表5は相談電話を知った情報源を表している。
2017年度は、「インターネット」と「携帯電話・モバイル」の合計が86.1%と若干減り、代わりに「ゲイ雑誌」が8件に増えた。年代の内訳は60代以上6件、40代1件、20代が1件なので、「サムソン(中高年向け)」に毎月コラムが掲載されている影響と思われる。

表5 相談電話を知った情報源

情報源	2017年度		2016年度	
	件数	(割合)	件数	(割合)
ゲイ雑誌	8	10.1%	1	1.3%
検査機関・パンフレット	1	1.3%	0	0.0%
他の相談電話	1	1.3%	0	0.0%
インターネット	57	72.2%	59	76.6%
携帯電話・モバイル	11	13.9%	14	18.2%
口コミ	0	0.0%	1	1.3%
その他	1	1.3%	2	2.6%
不明	56		26	
合計	135	100.0%	103	100.0%
有効データ	79		77	

有効 = (合計 - 不明)

(6) 相談者のセクシュアリティ

表6は相談者のセクシュアリティを表している。
例年通り「ゲイ」からの相談が84.3%を占めている。
Gay Friends for AIDS 電話相談(以下、Gフレ電話相談)の対象外のセクシュアリティからの相談が11.0%あった。既婚者・バイセクシュアルからの相談が14件→1件と激減した。またトランスセクシュアルからの相談が4件あった。

表6 相談者のセクシュアリティ

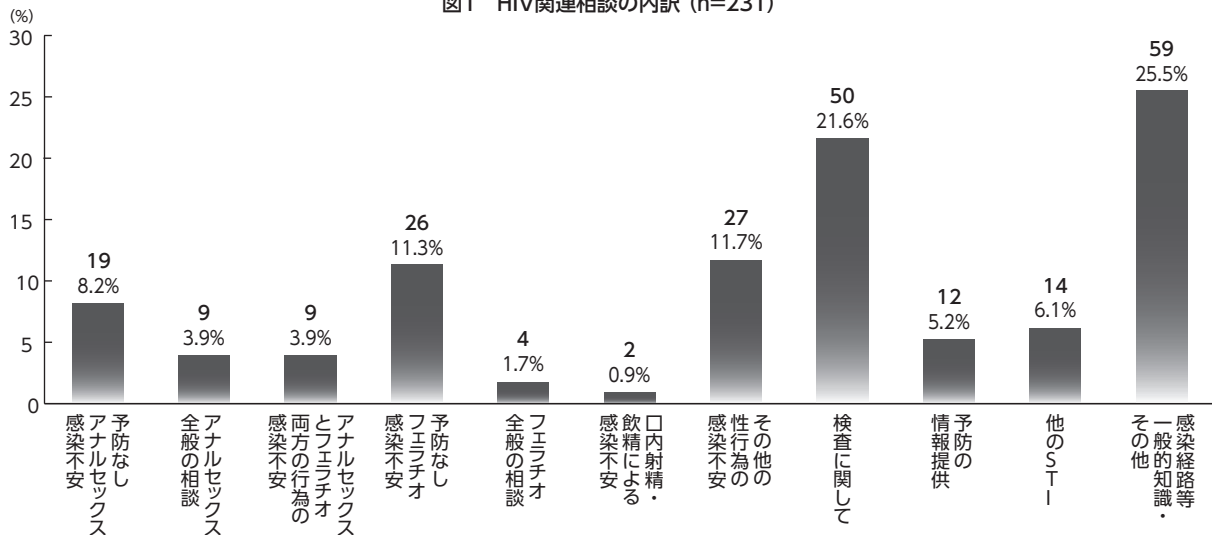
区分	2017年度		2016年度	
	件数	割合	件数	割合
ゲイ	107	84.3%	63	67.0%
ゲイ周囲	0	0.0%	0	0.0%
既婚者・バイセクシュアル	1	0.8%	14	14.9%
男性に性的興味を持った	5	3.9%	7	7.4%
レズビアン	0	0.0%	0	0.0%
トランスセクシュアル等	4	3.1%	0	0.0%
異性愛者(男)	8	6.3%	7	7.4%
異性愛者(女)	2	1.6%	3	3.2%
不明	11		9	
合計	138	100.0%	103	100.0%
有効データ	127		94	

有効 = (合計 - 不明)

●相談内容について(複数回答あり)

2017年度は、135件の相談のうち陽性者対応12件(後述)と異性間性行為(男・女)10件とを除いた113件について検討し、HIV関連相談とHIV以外の相談に分類した。前年度と同様に1回の相談で複数の内容の相談が寄せられているケースも見受けられた。複数の相談を独立させて計上した結果、HIVに関連した相談が231

図1 HIV関連相談の内訳(n=231)



ケース、HIV以外の相談(非HIV関連)が54ケース、合計285ケースとなった。

また、ろう者ゲイ(聴覚障がい者)のメール相談は0件であった。

(7) HIVに関連した相談…231ケース

図1はHIV感染不安や検査あるいはHIV以外の性感染症(STI)などに関する相談(以下:「HIV関連相談」)の内訳である。

2017年度の相談特徴を前年度と比較してみると、増加しているのが、「予防なしフェラチオ感染不安」が7.8%→11.3%、「フェラチオ全般の相談」0.4%→1.7%、「その他の性行為の感染不安」9.1%→11.7%、「検査に関して」が16.4%→21.6%、「他のSTI」2.6%→6.1%、「感染経路等一般的知識・その他」22.4%→25.5%だった。「他のSTI」は梅毒やクラミジアの相談も見られたが、一般的なことやSTIの検査についての相談が多かった。

逆に減少した相談は、「予防なしアナルセックス感染不安」が11.6%→8.2%、「アナルセックスとフェラチオ両方の行為の感染不安」が8.2%→3.9%、「口内射精・飲精による感染不安」5.2%→0.9%、「予防の情報提供」12.5%→5.2%と減少した。

相談の内容を見ると、ゲイによるゲイのための電話相談で特徴的な「複数の人とセックス」「ハッテン場」「ウリ専」などの言葉が散見された。また「性感マッサージ」などのキーワードも見られた。

リスクのある行為をして相談してくるケースは、前年度同様にリスクが有る事を分かっていながら、行為を止められないといったケースが複数あった。中にはSEX依存的な傾向が見られる相談も複数あった。

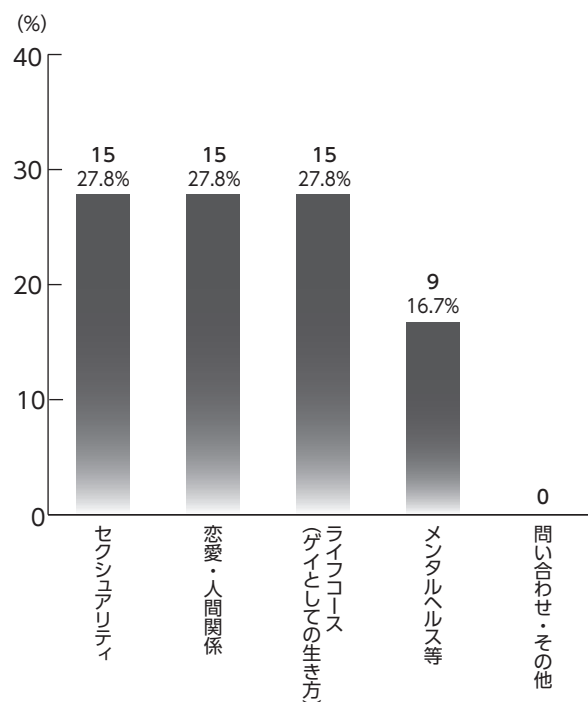
また10代の相談では、デビューの時点で、コンドームをしないアナルセックスをされている例があった。スマートフォンの普及とアプリで気軽に相手を探せる時代になり、予防や啓発の課題が見えてきた。

フェラチオは、する側・される側でHIVの感染リスクは違うが、そのことを理解している人は意外と少なかった。2017年度は飲精をした人の相談は少なくなったが、フェラチオの相談の中には、口内射精を受けた人が複数見られた。アナルセックスでは適切な予防をしながらもフェラチオをする事による感染リスクを知らず行為の後に不安になり相談してきたケースもあった。

在日外国人からの相談やPEP(暴露後予防服薬)の相談が見られた。

地方からの相談では、「HIVに感染したら、死のうと思っている」という内容が複数見られた。セクシュアリティを周囲へカミングアウトしにくい環境に加え、さらにHIV陽性のことも抱えるとなると、言えないことで、孤立して、生きづらくなる傾向が見えてきた。

図2 非HIV関連相談の内訳 (n=54)



(8) HIV以外の相談(非HIV関連相談)…54ケース

図2は、セクシュアリティ(性的指向)、ライフコース(ゲイとしての生き方)、そして人間関係などゲイとしてのアイデンティティに関わる「非HIV関連相談」の内訳である。

前年度と比較すると、増加しているのが、「セクシュアリティ」が20.5%→27.8%、「ライフコース(ゲイとしての生き方)」が17.9%→27.8%、「メンタルヘルス等」が7.7%→16.7%、「問い合わせ・その他」が15.4%→16.7%で、逆に減少したのは、「恋愛・人間関係」38.5%→27.8%のみだった。

これらの相談の特徴は、既婚者で、何かのきっかけで男性との性行為があり、感情が揺さぶられている相談や、セクシュアリティのカミングアウトについて悩んでいる相談などであった。10代で性行動後の相談もあれば、60代になって初めて男性との性行為で悩んでいるものもあった。セクシュアリティのことに気づいてから、10年以上も誰にも話せていないという相談もあった。また「男性に興味を持った」人たちからの相談も多かった。

(9) 陽性者等の対応について…12件

2017年度の陽性者等の対応は、HIV陽性者からの相談が6件、パートナーや友人など陽性者本人以外からの相談が4件、検査での確認検査待ちの相談が2件で、全相談件数に対する陽性者等の割合は、直近の5年間では、10.8%→19.5%→11.6%→9.7%→8.9%と推移している。

陽性等の相談内容は、周囲への通知や黙っている事の悩み、発症による感染発覚後、どれくらい生きられるかといった相談や、日々の生活の中で襲ってくる漠然とした不安、他の陽性者と話がしたい、関係を持った相手への通知をどうしたらよいか、という相談などがあった。

●今後の課題

A. 相談員の増員、学習等

2017年度も仕事の関係などでシフトを変更する事が非常に多かった。その際にはシフト調整係が活躍した。今後、仕事などの関係でシフトに入れなくなるスタッフが出る事も考えられるため、引き続き人員の育成を検討していく必要があるだろう。

B. 相談日数・時間枠の検討と広報の必要性

2017年度の相談件数は、前年度と比較すると増加したが、それ以前と比較すると平均的な件数だった。今後、大幅に増加する様なら回線数や日数、時間枠の拡充も検討する必要があるかもしれないが、現状では現在の曜日、時間枠で行うことが妥当であると考えている。

広報では、今年度はインターネット及び携帯電話モバイルの合計で、Gフレ電話相談を知った相談者が86.1%に達した。引き続き、ネットを中心とした広報に力を入れていきたい。またゲイ雑誌からの相談が増加したので、他の媒体での広報も考える必要があると思う。年度の途中から10代向けのサイト「Mex」にHIVのコラムが掲載された。今後は10代からの相談も入る可能性がある。

C. 陽性等の対応に関して

今年度は9%近くしかなく、過去5年間で一番少なかった。これは、ポジティブラインが土曜日もやっていることや、過去に頻繁にかかっていた陽性者のリピーターが、かかってこなくなったからかもしれない。相談員それぞれにHIVとの関わり方に違いはあるがHIVを身近に感じているゲイとして、これからは陽性等が孤立しないよう対応していきたい。

専門性の必要とされる情報に関しては、適切な相談機関を案内しているが、Gフレ電話相談実施時間に他の相談電話が実施されていない事を考えると、現在よりも陽性者の必要とする情報等について更に知識を深めて行く努力をしていきたい。

D. 非HIV関連相談に関して

2017年度も様々な相談が寄せられた。非HIV関連の相談では、相談員ごとの価値観の違いにより、回答の違いが生じると思われるが、人それぞれ置かれた環境の違いから相談者自身でしか答えを出せない事、他の相談員の場合違う回答になる可能性を伝えた上で、自身の経験など参考になりそうな話をしている。

専門外ではあるが、セクシャリティーやゲイとして生きる事など、相談機関が少ない事などを考えると今後も可能な限り対応していきたい。相談者の今後の人生の選択に大きく影響する事も考えられるので、「Mex」に掲載されたこともあり、ミーティングやケースカンファレンスで情報を共有し、相談できるように情報を増やしていきたい。

(電話相談報告：いく&よし)

2. 各種イベントでの活動

●「Rainbow Health Talk HIVの最新事情 ～よくある誤解、よくある偏見～」

5月5日(金・祝)、新宿区大久保地域センターにて、「Rainbow Health Talk HIVの最新事情 ～よくある誤解、よくある偏見～」と題したイベントを開催した。

このイベントはHIV/エイズに関する知識やイメージをアップデートしてもらうことを狙いとしたもので、ゲストには聖路加国際病院医師の森信好さんと、HIV陽性者のパートナーのよしゑさんをお招きし、医学的なレクチャーとパートナーへのインタビューの後、質問紙形式の質疑応答を行った。

また、後述する東京レインボープライドパレードに関連し、ゴールデンウィーク中にセクシュアルマイノリティー関連のさまざまなイベントを実施する「TOKYO RAINBOW WEEK」の参加イベントとした。会場は地域センターの会議室であったが、来場者は30名となり、スタッフを含めると空席がほぼ無いという状況であった。

来場者のHIVに対する知識やイメージもまちまちであったが、質疑応答では海外のワクチン開発状況や性教育関係者へのアドバイス、さらにカップルが長続きする秘訣についてなど、多くの質問があがり、和やかな中にも来場者それぞれに気づきのあるイベントになったのではないかと感じている。

●東京レインボープライドパレード&フェスタ

5月6日(土)及び7日(日)の二日間にわたって、「東京レインボープライドパレード&フェスタ」が開催された。会場となった代々木公園の野外ステージ前広場では、ぶれいす東京とakta、SHIP、JaNP+のスタッフが協力して「TOKYO AIDS WEEKS」のブースを出展し、資材などの配布を行った。

イベント当日は2日とも初夏を通り越した感のある暑い日となり、初日からかなり日焼けするような陽射しであったが、好天に誘われてか来場者も例年以上に多く、大盛況のイベントとなった。そんな中で初リリースとなったTOKYO AIDS WEEKSのフライヤーは、キース・ヘリングの作品を使ったキャッチーなデザインで、多くの方に受け取っていただくことができた。



前述したRainbow Health Talkを含めると、現在のGフレメンバーにとってはほぼ初めてとなる3日連続のイベントとなったが、当日は他団体のスタッフに加えぶれいす東京内の他部門のスタッフの方も多数お手伝いいただき、無事に乗り切ることができた。

●TOKYO AIDS WEEKS 2017

3ページでもご紹介しているとおり、今年のTOKYO AIDS WEEKSは過去最大の規模で、中野区産業振興センターとなかのZEROを舞台に開催された。

会期は11月23日(木・祝)から11月26日(日)の4日間であったが、初日は映画「BPM」のプレミア上映ということで、Gフレメンバーの稼働は24日からの3日間となった。

Gフレのイベントチームはコーディネーターも含め現状5名体制であるが、複数のイベントが同時並行に行われるため、スタッフ募集に応じてくださった方を5グループに分けてGフレメンバーがリーダーとなり、ある程度それぞれの裁量でイベントを動かしていく形式にした。

この体制でほとんどのプログラムは無事に進行することができた。最終日の最後のプログラムであった映画「売買ボーイズ」において、会場定員をはるかに超える250名規模の行列ができて入りきれない方には入場をお断りする

という事態が発生したが、地下の会場から階段を經由して外に行列を作るというプランは事前にシミュレーションしていたため、混乱が無かったわけではないが比較的小さく抑えることができたのではないかと考えている。



中野駅のホームから見る区役所のレッドリボン。駅の反対側にある会場に向かうスタッフのモチベーションになる風景でした。

●最後に

イベント関連では2017年度はGフレ単独主催のイベントを久々に開催することができ、また年初より予定されていた大規模イベントにも対応し、充実感のある一年だったと感じている。

特に大規模イベントについては、ここ数年取り組んでいる「Gフレメンバーによる事前シミュレーションのもとでGフレ以外の方にもお手伝いいただく」形式で安定的に運用できるようになってきたと考えている。今後もこうした機会をいただいた際に期待にこたえられるよう、振り返りなどを通してノウハウを蓄積していきたい。また、さまざまな団体とのコラボレーションを通して、メンバー個々の視野を広げていければと思う。

(イベント関連報告：桜井 啓介)

2017年度も、多くの個人・団体よりご協力、ご支援をいただきました。また、繰り返しになりますが、イベントにおいてはGフレ以外の方にお手伝いをいただくことも本当に多くありました。

改めまして、メンバー一同より感謝申し上げます。ありがとうございました。

2018年度もGay Friends for AIDSをどうぞよろしく願い申し上げます。

部門報告 (ネスト)

I. 活動概要

主な活動は、ネスト・プログラムの企画・運営、プログラムのための人材育成・研修である。

(A)ネスト・プログラム

HIV 陽性者やそのパートナー、家族が、安心して話し合ったり、学習や情報交換をしたり、交流したりすることを目的としている。多くのプログラムは HIV 陽性者を対象としているが、陽性者のパートナーや家族を対象としたものも開催している。プログラムに参加するには事前の利用登録が必要であるが、事務所に専任相談員が当事者確認をし、守秘義務などのルールに同意を得た上で行っている。プログラムでは、相談員や司会進行役のスタッフのもと、毎回、最初にグラウンドルールを確認している。

ネスト・プログラムに関わるスタッフ、相談員などで会議を設け、企画運営をしている。また、毎月ネスト・ニュースレターを発行して、ネスト・プログラムの案内などを掲載している。メール版(PC版・携帯版)も配信し、Web上にPDF版を公開している。

(B)人材育成・研修

2012年度より積極的に人材育成を行っている。ぶれいす東京のボランティア合同研修修了者を対象に、ネストスタッフ研修を行っている。また、プログラムのセクレタリー(受付業務)やファシリテーター(司会進行役)として活動するスタッフには、別途、オリエンテーションと実地研修を行っている。プログラム参加者の中から、スタッフとしても活動に参加する HIV 陽性者やパートナーも増加している。従来新陽性者 PGM にほぼ限定されていたピア・ファシリテーターによるミーティングの運用を、他のプログラムへと拡充していくことも促進している。

II. 2017年度活動実績

(A)ネスト・プログラム

(2017年4月1日～2018年3月31日)

○スタッフ数(2018年3月31日現在)	6名
○ネストスタッフ数(2018年3月31日現在)	54名
○実利用者数	305名
	(うち新規利用者数 102名)
○のべ利用者数	1,039名
	(うちピア・ファシリテーターなど積極的参加 103名)
○プログラム開催数	122回
	プログラム内容は表1を参照
○ネスト・ニュースレター	月1回 年12回発行

その他に、ネスト・プログラム・スタッフ会議や、新陽性者 PGM ファシリテーターによる各回・各期の振り返りミーティング、各プログラム担当ファシリテーターやセクレタリーの振り返り、多目的室の整備など、ネスト・プログラムを運営していくために、陽性者が積極的に関わって多くの会議や活動が行われている。

表1 ネスト・プログラムと参加状況

プログラム名	実施回数	のべ参加者	ピア・ファシリテーターなど	スタッフ・ファシリテーターなど	セクレタリー	講師・ゲストなど
(イ) グループ・ミーティング	75回	562名	79名	57名	72名	—
(ロ) 学習会/ワークショップ/セミナー	15回	129名	4名	21名	10名	23名
(ハ) 交流会/ピアトーク/パーティ	32回	245名	20名	35名	16名	0名
プログラム参加者総数	122回	936名	103名	113名	98名	23名

(B)人材育成・研修

○2017年度 ネストスタッフ研修修了者数 11名



Ⅲ. 2017年度活動報告

(A) ネスト・プログラム

ぶれいす東京 Web サイトの「ネスト・プログラム」には、ネスト・プログラムの報告や参加感想文が多数掲載されているので、あわせてお読みください。

(A)-(イ) グループ・ミーティング

グループ・ミーティング・プログラムと参加状況

プログラム名	実施回数	のべ参加者	ピア・ファシリテーターなど	スタッフ・ファシリテーターなど	セクレタリー	講師・ゲストなど
グループ・ミーティング	75回	562名	79名	57名	72名	—
1 新陽性者ピア・グループ・ミーティング(PGM)	19回	115名	19名	27名	19名	—
2 新陽性者PGM同窓会	—	—	—	—	—	—
3 ミドル・ミーティング(40才以上の男性陽性者)	11回	183名	8名	11名	13名	—
4 U40ミーティング(10代,20代,30代男性陽性者)	11回	76名	22名	—	13名	—
5 異性愛者ミーティング	12回	81名	15名	—	13名	—
6 Women's Salon(女性陽性者のためのプログラム)	—	—	—	—	—	—
7 大人女子会	6回	22名	—	6名	1名	—
8 ミックス・トーク10(MT10)	4回	29名	8名	2名	4名	—
9 陰性パートナー・サポートミーティング	5回	26名	1名	6名	7名	—
10 もめんの会(HIV/エイズを支える親の会)	4回	12名	—	4名	0名	—
11 群馬サテライト・ミーティング	3回	18名	6名	1名	2名	—

グループ・ミーティングは、11プログラムを実施している(うち2プログラムは休止中)。

■ 新陽性者ピア・グループ・ミーティング(PGM)【HIV感染がわかってから6ヶ月以内の陽性者】

HIV感染がわかってから6ヶ月以内の陽性者が対象。少人数(5~7名)で、2時間のミーティングを2週間毎に計4回実施。2001年4月に第1期をスタートし、2018年3月までに通算で86期(343回)開催、参加者数はのべ1,876名(実人数:514名)。

感染告知を受けて心身共に不安定になりがちな最初の数ヶ月間を同じ立場の仲間と過ごすことで、問題の解決のヒントや、先の見通しを得てもらうことがこのプログラムの大きな目的である。また、このプログラムをきっかけとして今後も連絡を取り合う仲間を得たり、ぶれいす東京が提供する他のサービスに繋がるきっかけとなる場合もある。このプログラムへの参加を経験した「卒業生」がピア・ファシリテーターになるケースも増え、循環型のプログラムとして順調に機能している。

進行はHIV陽性当事者であるピア・ファシリテーターと、進行を担当するスタッフ・ファシリテーターの2名で行うのが原則だが、2017年度は試験的にピア・ファシリテーター2名での開催も実施した。

■ 新陽性者PGM同窓会

感染がわかって6ヶ月以内のPGMへの参加経験がある陽性者に向けたプログラム。

リニューアル開催のため現在準備中。

■ ミドル・ミーティング【40才以上の男性陽性者】

毎月第2土曜日に開催。基本的には40代以上の男性HIV陽性者が対象。他のプログラムと比較して各回の参加者人数が多く、自己紹介のタイムキープや2グループに分けるなどの進行上の工夫、会場のレイアウト変更などを行っている。

初参加の方がいる回も多く、長く参加している方と相互

にエンパワーし合う場面も見られる。それぞれが定期的に挨拶を交わすサポート・ミーティングとなっている。

■ U40ミーティング【10代～30代の男性陽性者】

原則毎月1回開催。曜日や日にちを取って固定せず、さまざまな人が参加しやすいように開催している。進行は、参加者としての経験もあり研修を修了した3名のピア・ファシリテーターがチーム体制で担当。

年に数回、質問を紙に書いて投函し、くじ形式で回答するという進行も行っている。参加者が多い時には、ミドル・ミーティングと同様に2グループに分かれて進行することもある。

■ 異性愛者ミーティング【異性愛の男女の陽性者】

2011年9月立ち上げ。原則奇数月第4土曜日と偶数月第3金曜日に開催。2013年5月より、研修を修了したピア・ファシリテーターが進行を担当。

異性愛の陽性者が交流する場は限られており、この場を通じて難しさを共有できる仲間づくりが広がり、活発なミーティングとなっている。

■ Women's Salon【女性陽性者】

女性同士ならではの情報交換や悩みを分かち合うプログラム。

現在休止中。今後参加者やスタッフで話し合い、リニューアルして開催の予定。

■ 大人女子会【女性陽性者】

2017年3月より開催。子どもが成長して親元から旅立とうとしていたり、夫やパートナーとの関係性、身体の変化に戸惑ったりなど、この年代ならではの悩みを話す場となっている。現在、隔月開催。

■ ミックス・トーク10(MT10)【10人までの陽性者】

性別・年代・セクシュアリティなどの枠を超えて、さまざまな人と少人数でじっくり話したいという要望を受けて立ち上げたプログラム。参加は先着10名とし、定員となった場合はキャンセル待ちとなる。

進行は3名のピア・ファシリテーターがチーム体制で担当。

■ 陰性パートナー・サポートミーティング【HIV陽性者の陰性パートナー】

偶数月第1土曜日の開催。

セクシュアリティ・婚姻状況などは不問で、男性だけではなく女性のパートナーの参加もあり、多様な参加者が集まっている。陽性者の周囲で生活する人たちにとっては、他でなかなか話せないことを話せる場となっている。

■ もめんの会【母親を中心とした陽性者の親】

年に4回ほどのペースで開催。陽性者の子どもとの関係性が様々な母親を中心とした参加者が集まっている。家族が他の場所で、HIV陽性者と生活を共にすることに起因するさまざまな思いを吐き出す場はなかなか得られない。安心してお互いの悩みや思いを打ち明け合うことができる貴重な場となっている。

■ 群馬サテライト・ミーティング

現地在住のボランティア・スタッフからの申し出がきっかけとなり、北関東や東北などからアクセスしやすい地域の陽性者に向けて2017年1月に立ち上げたプログラム。年に3～4回の開催を目指している。

各地域での陽性者ピア・グループ・ミーティングのサポートの一環として、今後も継続する予定。他の地域への拡大も検討中。

(A)-(ロ)学習会／ワークショップ／セミナー

HIVと長く付き合いながら、自分らしく生きていくために必要なスキルを身につけるためのワークショップや、専門家からの情報、社会制度の基礎など、陽性者に役立つ情報を提供する学習会、企業の人事担当などを招いて行う「就職支援セミナー」などを開催している。

学習会／ワークショップ／セミナー・プログラムと参加状況

プログラム名	実施回数	のべ参加者	ピア・ファシリテーターなど	スタッフ・ファシリテーターなど	セクレタリー	講師・ゲストなど
学習会／ワークショップ／セミナー	15回	129名	4名	21名	10名	23名
1 ストレス・マネジメント講座	6回	30名	—	6名	1名	6名
2 アサーティブ・コミュニケーション自己表現のABC	2回	11名	—	1名	2名	2名
3 専門家と話そう	1回	11名	—	4名	1名	3名
4 ベーシック講座「知ってこ！社会福祉制度」	2回	4名	—	2名	2名	—
5 ベーシック講座「HIVってどんな病気？」(うち1回はSpecial)	2回	7名	—	3名	2名	—
6 就職支援セミナー	2回	66名	4名	5名	2名	12名

■ ストレス・マネジメント講座～ストレスとうまくつきあうためのワーク～

各期は全3回のプログラムからなり、ストレスに関するワークをしながらマネジメントスキルを身につけることを目指している。2017年度は28期と29期を開催した。

- 第1回「ストレスによるこころとからだの変化」
- 第2回「ストレスと思考パターン」
- 第3回「ストレスへの対処行動あれこれ」

ストレスに伴う心身の状態に自覚的になることや、否定的で極端になりやすい思考や認知について学習することで、ストレスに対する自分の構えや傾向を知ることができる。また、より健康的な対処法を考えることで、ストレスに直面したときに、悪循環に陥らないように積極的な対処をすることができる。

参加者のストレス状態や生活状況は様々であるが、参加者同士で話し合うことで、自分の状態や傾向について新たな気づきを得ることができる。HIVにまつわる不安や恋愛や性に関する話題も出ることが多く、他の参加者と話し合うことで、安心感が得られたり、新たな対処法に気づいたりするようであった。

■ アサーティブ・コミュニケーション～自己表現のABC～
相手も自分も大切にする自己表現＝アサーティブなコミュニケーションを身につける、ワークショップ形式の講座。2017年は第10期を開催した。

今後より効果的なプログラム提供を行うべく、現在準備中。

■ 専門家と話そう

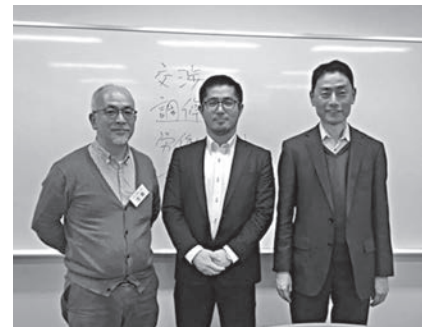
HIV陽性者が関心を持つさまざまな分野の専門家をゲストにお迎えするプログラム。

2017年度は「弁護士と話そうⅣ」を開催した。

2名の弁護士を迎え、想定される「仮想Q&A」に答えていただく形でお話しいただいた。会場からの質問にも答えていただくなど、法的な問題解決のヒントが得られる会となった。

第19回「弁護士と話そうⅣ」

- ・ 日時 2018年3月14日(水)
- ・ ゲスト 永野 靖さん
(永野・山下法律事務所／LGBT支援法律家ネットワーク)
山下 敏雅さん
(永野・山下法律事務所／LGBT支援法律家ネットワーク)



永野 靖さん(右)
山下 敏雅さん(中央)

■ ベーシック講座「知ってこ！社会福祉制度」

年2回開催。「基本のキ」をつかんで、より良い制度利用ができるように、相談員が講師となって解説している。参加者が疑問に感じたり興味を持っていることなどを中心に進行している。

■ ベーシック講座「HIVってどんな病気？」

年2回開催。そのうち1回は、HIV陽性者の家族・パートナーが参加可能なSpecialとして開催。

新陽性者PGMの中で行っている「医療情報セッション」の出前講座として、基本的なHIV／エイズについてのレクチャーを行う。講師は相談員が務めている。

■ 就職支援セミナー

企業の人事担当者などを招き、企業がどのような視点で応募者を見ているのか、求人情報、社内の情報管理や配慮についてなどを話していただき、陽性者の就職・転職活動に役立ててもらおうセミナー。

2017年度は2回開催。プログラムの後半には質疑応答の時間を設け、それぞれ活発なやり取りが行われ、中には就職が決まる人もいます。



(A)-(ハ)交流会/ピア+トーク/パーティ

2011年1月に「トークサロン」としてスタートしたプログラムは、「交流会」と名称を変更した。境遇や立場がより近い陽性者同士で集まって、日ごろ疑問に思っていることや経験を可能な範囲で共有して、おしゃべりしながら考える場である。また、様々な経験を持つHIV陽性者を迎えて話を聞くというプログラム「ピア+トーク」も開催している。その他、カップル交流会、パーティなどのイベント

交流会/ピア+トーク/パーティ・プログラムと参加状況

プログラム名	実施回数	のべ参加者	ピア・ファシリテーターなど	スタッフ・ファシリテーターなど	セクレタリー	講師・ゲストなど
交流会/ピア+トーク/パーティ	32回	245名	20名	35名	16名	0名
1 就職活動サポートミーティング	6回	18名	—	6名	3名	—
2 介護職として働く陽性者のための交流会	6回	23名	—	6名	1名	—
3 看護師として働く陽性者のための交流会	6回	48名	—	6名	2名	—
4 障害者枠で働く陽性者の交流会	4回	35名	1名	3名	2名	—
5 教師として働く陽性者のための交流会	4回	16名	—	4名	3名	—
6 ピア+トーク	1回	25名	4名	2名	1名	—
7 カップル交流会(+/+or+/-カップル)	3回	20名	3名	2名	2名	—
8 パーティ(サマー・年末)	2回	60名	12名	6名	2名	—

的なプログラムも行っている。

■ 就職活動サポートミーティング

2017年度より隔月土曜日開催。さまざまな立ち位置や希望を持つ参加者の、就職・転職に関する情報交換の場。お互いの状況を聞き合いながら、自分の方向性を考えるきっかけをつかんでもらう場である。

■ 介護職として働く陽性者の交流会

偶数月開催。介護に従事している陽性者同士で、仕事の悩み・将来のことなどを話し合おう場。このミーティングでは、働き方を変えることを検討中の人達からの参加も受け入れている。

■ 看護師として働く陽性者の交流会

奇数月開催。介護職と同様、同じ立場の陽性者と話してみたいという要望から生まれたプログラム。日頃HIVを持ちながら看護師として働く中で、疑問に思ったり不安に感じるなどについて話し合う場。看護師だけではなく、医療現場で働く有資格者の参加も受け入れている。

■ 障害者枠で働く陽性者の交流会

年4回開催。障害者枠ならではのメリット・デメリット、働き方に対する考え方などを共有することで、お互いの悩みの解決や今後の方向性を考えるきっかけとなる場となっている。

■ 教師として働く陽性者の交流会

年4回開催。学校という環境の中で働くことの悩みや困難などを分かち合い、同じ立場で考えたいという要望を受けて生まれたプログラムである。

■ ピア+トーク

ピア+トークは、様々な経験を持つHIV陽性者をゲストに迎えてお話を伺うプログラムである。

2017年度は下記テーマで開催した。

第10回ピア+トーク「あきらめない／Don't give Up～どん底を味わった2人のHIV陽性者の経験に学ぼう」

今回は『あきらめない』がキーワード。性の気づきや家族とのすれ違い、いじめや性暴力などのつらい経験。薬物、買物やアルコールなどへの依存。何かにはまってしまった2人のスピーカーをお招きし、彼らの経験から生きるチカラを学んだ。

■ カップル交流会(+/+or+/-カップル)

陰性パートナー・サポートミーティング参加者からの「カップルで参加できる場が欲しい」との声で開始。陽性者と陰性者、陽性者同士のカップルで参加可能なイベントであり、カップルが持ち回りで世話人として企画・運営に主体的に関わっている。参加するカップルも、同性愛、異性愛、

陽性者と陰性のパートナー、陽性者同士、英語で会話するカップルと、多様である。2017年度は3月に開催。

また、イベントだけではなくもっと気軽に参加できる場が欲しいという要望で生まれた「カップル交流会カジュアル」も実施。過去のカップル交流会の参加者、陰性パートナー・ミーティング参加者はひとりでも参加が可能で、予約不要の情報交換の場となっている。

- ・第26回カップル交流会「楽しく美味しくイタリアン！」
2017年3月11日(日)
世話人1組と4組のカップル 計10名

- ・カップル交流会カジュアル
2回 計のべ13名

■ パーティ

2012年以降毎年開催している年末パーティに加え、2017年度より「サマー・ティー・パーティ」を新たに開催した。また、陽性者限定のプログラムから、パートナー家族も対象としたプログラムに変更した。

いずれもボランティアによる積極的な協力により、賑やかな会となった。ゲームやビンゴ大会で盛り上がり、様々なプログラムについてそれぞれの参加者がその様子について紹介するなど、盛りだくさんな内容であった。



(B)人材育成・研修

(I)ネストスタッフ育成

ネスト部門の人材育成・研修は、2012年度に初めて行った。2011年1月より利用登録制がスタートし、利用者の安全性が大幅に向上した。これまでの利用登録者は1,036人(2018年3月末現在)となった。多目的室の入場時のチェックなど、ゲートキーパー的な役割を担うボランティアベースの人材(セクレタリー)の必要性が増大している。また、グループ・プログラムのファシリテーターなど、HIV陽性者を含む多様な人材がプログラム運営のなかでますます重要となってきている。

現在、「ボランティア合同研修」→「ネストスタッフ研修」から、プログラムのファシリテーターやセクレタリーへとつながる流れを継続しており、23のプログラムの運営や参

加者への対応のなかで大きな役割を担っている。プログラムにも参加経験のある陽性者などの当事者が、研修を通じてスタッフとして活躍することも増えている。

現在、U40ミーティング、異性愛者ミーティング、MT10において、複数名のファシリテーターによるチーム担当制を行なっている。ローテーションを組むことで担当スタッフの調整がしやすくなり、運営上大きなメリットがある。この体制は新たなスタッフを迎え入れながら今後も継続していく予定である。

2017年度も新人ボランティア合同研修修了者を対象に、ネスト部門のボランティア募集を行い、11月3日(金・祝)に、ネスト部門を希望した12名(男性:6、女性:6)のうち9名と、過去に合同研修を修了して既に他部門で活動中の2名、ピア・プログラムの担当スタッフ2名が参加して、「ネストスタッフ研修」を行った。プログラムでは、ファシリテーションのスキルに関するもの、自己の参加動機を振り返るような参加型のワークショップを行った。

今後、セクレタリーやグループ・プログラムのファシリテーター候補者に、個別、またはグループでオリエンテーションを行う予定である。

(II)地域における当事者支援のための支援プログラムの効果

2013年度にスタートした「地域における当事者支援のための支援プログラム」は、ぶれいす東京が20年に渡り積み上げてきたプログラム運営のノウハウを共有し、各地のHIV陽性者や周囲の人たちへの支援の実践に役立ててもらうことを目的としたプログラムであるが、今年度も昨年度同様に残念ながら中止となった。

地方の当事者を支援するプログラムとして、群馬サテライト・ミーティングを開催している。プログラムの詳細は先述の通りだが、東京のみに止まらず、可能な範囲で必要な所に支援の幅を広げて行きたいと考えている。

IV. 最後に

ネスト・プログラムでは、利用者である当事者の声からその要望に応える形で新規プログラムの企画を行ってきた。今年度は「サマー・ティー・パーティ」が新たにスタートした。

これまでのネスト・プログラムは、陽性者のプライバシーを守るという観点から、陰性パートナーや家族が参加できるプログラムを限定してきた。そのためプログラムの多くは陽性者のみ参加可能なものであった。しかし利用登録制度を導入したことで利用者の安全を守る仕組みが整備され、陽性者と周囲の人たちがオープンに交流できる場の提供が検討できるようになった。

そうしたことから、サマー・ティー・パーティでは陽性者の陰性のパートナーや家族も一緒に参加できるようにし

た。この流れから、既存の年末パーティも2017年度からは陽性者・陰性パートナー・家族を対象としたプログラムに変更した。

引き続き利用者のさまざまなニーズに応えるべく、プログラムの内容や進行の改善などを順次行っており、その中でますますボランティア・スタッフの力が必要となってきた。プログラム参加者や相談サービスの利用者が「陽性者として何かに貢献したい」「自分自身がお世話になったので恩返しをしたい」という気持ちで、ボランティアを志望するケースも増えている。こうした循環がネスト・プログラムを運営する上で大変重要な原動力の一つとなっている。

また、Webサイト内の「陽性者と家族の日記」では、これまでの7名に加えて新たに4名の新人ライターを迎え、日常のできごとなどを積極的につづっていただいている。ボランティアで参加していただいているみなさまに、この場を借りてお礼申しあげる。

謝辞

今年度も多くの個人のみなさまと団体からご寄付をお寄せいただきました。社会情勢が厳しくなっているなかでご支援いただいたことを深く感謝いたします。助成していただいた東京都福祉保健財団、ご寄付をお寄せいただいたヴィーブヘルスケア株式会社、MSD株式会社、オフィスTwo I、約束の虹ミニストリー（五十音順、敬称略）、そして多くの個人のみなさまに改めて御礼申し上げます。

ゲイ雑誌「サムソン」に、支援者の語りが毎月掲載されており、その執筆者の原稿料を活動収益金とさせていただきます。

（文責：加藤 力也、佐藤 郁夫、原田 玲子、生島 嗣）

V. 感想文

新陽性者PGM参加者の感想文（「ぶれいす東京Webサイト」2017年8月掲載より）

■「ともに向き合える仲間と変わらない自分」

ススム（感染告知：2017年2月/未服薬/30代）

私はPGMに参加して「ともにHIVにきちんと向き合える仲間がいる」「HIVに感染しても私は私のまま」ということに気づきました。

感染前からHIVは薬でコントロールできることを知っていました。それがかえって「長期間独りで向き合えないといけない」というイメージを膨らませてしまい、不安が募る一方でした。そんな中で、それぞれの悩みを持ち合って安全に会話できる環境はとても心強く、私は独りではないことを実感できました。

また、感染した後も私という人間は変わっていないとい

うことにも同時に気づきました。感染発覚当初はまるで自分自身が別人になってしまったかのような感覚を抱いていましたが、自分の経験や考えを整理して語るうちに、今も昔も同じ人間であることを認識できました。

感染を機に人生は変わるかもしれない。治療に対する不安や恋愛の悩みに押しつぶされそうになることがあるかもしれない。けれども私には支えてくれる人たちがいる。そして、HIVに人格まで奪われることはなく、私は私のままでいられる——今はそのように感じています。

■「Share my feelings」

チョコレートディスコ（感染告知：2016年8月/服薬歴：10ヶ月/40代）

私は、告知された時も、その場で入院を余儀なくされた時も、病床で死と直面する状態だった時ですら、親・兄弟・友人・誰にも一切、本当の病名を話しませんでしたし、この先も話すつもりはありません。

病床でその日の身体の状態に一喜一憂し、生き延びることが出来ると分かったその時もこれからの未来の自分を想像出来ず、孤独や絶望と独りで闘っていました。薬にもすがりたいで病気を経験され、病気と寄り添って生きて行く方々のブログと出会い少しずつ前を向けた気がしています。

そんな時にPGMの存在を知りメールしました。

面談の後、プログラムが始まり、同じ病気と向き合い、不安を同じように抱えながらも今日を生きているメンバーと出会いました。今まで持った友達ともまた違う絆で結ばれているような気がしています。

症状や経験の共有、服薬や医療福祉制度について情報を交換出来たことは本当に今の自分の回復を支えている貴重な時間となりました。勇気を出して参加して良かった。

今も数ヶ月に1度集まり食事しながら体調や経験をshareし、またそれぞれの日常に戻って行きます。

特別な仲間を得ることが出来たと思っています。感謝しています。

サマー・ティー・パーティ参加者の感想文（「ぶれいす東京Webサイト」2018年4月掲載より）

■「もう独りではない」

ケイ（2015年感染告知/30代）

陽性者の集まりに参加するのは2回目、どんな人がいるのか、上手くコミュニケーションが取れるか、とても不安でした。

他の参加者との距離が縮まったのは、鼻歌メロディ当てクイズ。チームを組み、様々な世代の方と一緒に『この曲なんだろう？』とワイワイ話せて、一体感が生まれて距離が近くなったと思います。

パーティでは、様々な年代、セクシャリティの方と趣味の話、病気のこと、パートナーシップについて話ができ、さらにパーティ後には、同年代の方々とお茶もできて、参加してとても有意義でした。

当初は病気に対してはネガティブなイメージしかありませんでしたが、同じ病気を患う仲間との交流を通じて、独りではない、とポジティブ思考になることができました。

このような機会がまたあれば、積極的に参加していきたいと思います。

■「初めの一步」

トワ

私は2015年に告知を受け、服薬歴は1年の30代男性です。

私はこれまで同じ立場の方と話をした事が無く、またSNSやネットでやり取りをした事も無く、交流は今回が初めてでした。なので、このティー・パーティーに参加する事は私にとっては一大決心で、不安と期待が入り混じった気持ちで一杯でした。

会場ではボランティアスタッフの方が気さくに話しかけてくれたので、初参加で1人の私でも話の輪に入ることができて、ホッとしました。パーティーはレクレーションありミニライブありの、明るく和やかな雰囲気だったので、自然に他の参加者と話すことが出来ました。

話の中でも1番印象に残っているのは服薬歴8年の方が、明るく笑顔で、当時から今に至るまでの話をしていた事です。そのあっけらかんとした笑みが、私の今まで悩んで不安だった迷いを打ち消してくれたように思います。また様々な年代の方や、異性愛陽性者の方、陰性パートナーの方の話を聞いた事も、とても為になりました。

今回の参加で、今の自分の立ち位置が臍げながらも分かったような気がします。

今回はこのような素敵なパーティーを催して頂き、ありがとうございます。次がありましたら是非参加したいと思います。

専門家と話そう 第19回「弁護士と話そうⅣ」参加者の感想文(「ぶれいす東京Webサイト」2018年4月掲載より)

■「もしものときは」

ノブ(感染告知:2006年/参加:2回目/40代)

「弁護士と話そう」は2回目の参加でした。私はボランティアスタッフとしてネストプログラムに関わらせてもらっており、参加者から「裁判で感染させられた事を証明できるのか」「職場で病名を伝えたら酷い対応をされた、何かできるのか」等、法律問題と関わる話題が出るため、正しい情報が欲しくて参加しました。

ウィットに富み、ポイントを素早く答えてくれる山下弁護士、正確に言葉を選びながら気持ちを込めて答えてくれる永野弁護士、お二人の説明が上手で“仮想質問”“会場からの質問”とも十分に理解でき、持ち帰れる情報の多いとても満足な内容でした。(生島さんと山下さんの悪印象な初対面のエピソード聞きたかったですw)また、他の参加者からの質問のバリエーションや深さに、社会や自身、病気への関心の高さや問題意識を感じ、刺激をもらいました。

今後の人生で、弁護士へ相談する場面があるのか分からないですが(ない方が幸せかも)、もしものときは、お二人のおっしゃった「悩み事の中に法律問題が含まれているかはこちらで仕分けするので、病気と一緒に早期相談してほしい、その方がずっと解決が早くて負荷も軽くて済む」という熱いメッセージを思い出そうと思います。

第9回就職支援セミナー参加者の感想文(「ぶれいす東京Webサイト」2018年4月掲載より)

■「初めての就職支援セミナー参加」

ぴこ(感染告知:2007年3月/服薬歴:13年/セミナー初参加/ネスト・プログラム参加2回目/40代)

当日のセミナーの内容としては、陽性者を積極的に採用する姿勢のある会社さん3社のプレゼンと就職エージェントからの企業採用動向の解説でした。

3社のプレゼンを聞いて感じたことは、平日に通院している陽性者は有休消化をしなければならないという点は、一般の疾患と何ら変わらないと感じました。その点を踏まえると、「陽性者は本当に障がい者なのか?」「陽性者が就職するときに企業へ配慮を求めなければならないのか」という点でした。通院が有休取得の理由にしやすい点という点では理解されるとありがたいです。しかし、通院休暇が障がい者雇用制度により有休枠外になればいいのになと感じました。

厚生労働省からの通達で、2018年度より障がい者(手帳保有者)を2.2%雇用しなければならないと企業の努力目標が改正されたため、陽性者としては売り手市場となっているとの雇用事情のアナウンスがありました。しかし、私を感じたことは、あえて陽性者に理解のある会社を無理に選んで就職先を探すのではなく、あくまで自分自身の適正能力と企業とのマッチングの上で、企業側からすると採用したい人がたまたま障がい者(陽性者)だった、という状況になるのが理想です。雇用される側も陽性であることや障がい者手帳を持っていることを遠慮なく雇用先に告知できるような日本社会になってゆけばいいのになと感じました。

海外の陽性者が就職するときに自分が陽性であることを告知しているのか、雇用面での社会福祉の恩恵を受けているのか、知りたくなりました。



第26回カップル交流会「楽しく美味しくイタリアン！」参加者の感想文(「ぶれいす東京Webサイト2018年4月掲載より」)

■「また参加します」

よね(パートナー/ー)和(+)

初めての、交流会に参加しました。色々な話を聞いて、よかったです。もっと、いろんな人と話しがしたかったのですが初参加という事で、あまり話しが出来ずに終わってしまったので、ちょっと後悔してます。食事は、イタリアンでとてもおいしかったです。地元なので、また、お店にも行ってみたいと思います。また、参加したいと思います！

(よね)

ある程度、ピザやイタリアンを食べてますが全く別ものでおいしかったです。初参加だったので、あまり話しが出来なかったのが次回はいろんな人と話しができればと思います。(和)



陰性パートナー・サポートミーティング(「ぶれいす東京Webサイト」2018年4月掲載より)

■「光の差し込む方へ」

波照間ブルー(女性/ヘテロセクシュアル/参加2回目)

2017年7月 告知。拠点病院に行く前から、私の精神がおかしくなり、彼は自分の病気の心配をしている余裕は無かったと思います。どうもがいても、現代の医学で治らない病気は、受け入れるしかない。でも、問題は感染経路でした。それからの私は、藁をも掴む気持ちで、ぶれいす東京の電話相談に、毎日のように電話をかけていました。精神状態がおかしい私に、根気よく対応してくださった、ぶれいす東京の方々に、感謝してもしきれません。

パートナーミーティングは、告知から7カ月後に、初めて参加しました。皆さんの体験を聞かせていただいて、少しずつ考え方が、変わった自分に気がきました。彼が、ゲイでもバイでも、彼は彼。私と過ごした日々は、嘘じゃない。「もう、自分を誤魔化さないで自由に生きていいんだよ？」私から彼との別れを切り出しましたが、彼には「感染までして、何も言える身分じゃないけど、出来るなら、あなたと一緒に歩いて生きたい」と言われています。

告知直後は、気持ちも動転して、私のように、精神がおかしくなる場合も、あると思いますが、情報を入れて、一

人で悩まない事が、大切だと思いました。私も多くの方に支えられました。必ずいつか明るい光は差し込むと、信じています。

第10回ピア+トーク「あきらめない／Don't give Up～どんだ底を味わった2人の陽性者の経験に学ぼう」(「ぶれいす東京Webサイト」2018年4月掲載より)

■「タガタメ、今の自分の在り方」

じゅん

今回依存症という、ディープな話題の経験談を聞いて種類はあるものの自分を振り返るきっかけにもなりました。

私は、30代で去年(2016.11) HIVである事が発覚。現在はCD4が700以上ある為に内服は開始していません。発覚の原因はコンジローマという疣の病気から…「やっぱりか…」という、客観的な受け取りが病気を知らされた時の率直な感想。周りにも居ましたし、自分の遊んできた事からも「いつかは、なるんだろーな」という気持ちからでした。

依存症の種類から考えると、10年前に恋人に裏切られた事で5年間その人だけに費やしてきた時間の糸がプチンと切れて、SEX依存に走ったんだと思います。(今はいい経験になったと思っていますが)

発展場の初体験、複数への参加など。最初は怖かった事も、「他の人もやっている事だ」みたいな安易な考えへの思考のシフト。そこから、合法と言われるラッシュなどの使用も経験し、SEXに対して「すぐ出来る手軽な気持ちいい手段」的な考えにいつの間にか変わっていました。(アプリの普及も更にそれを、加速させる原因だと思っています)

ゲストの方の話を聞き、自分では「依存症」というワードすら頭にありませんでしたが、振り返るとそうだったのかな？と思います。何か目標を見つけたり、自分の事を引き留める事が有れば…(人の為に役に立ちたい、困っている人の支援など)依存症を繰り返すストッパーの様な役割にもなるのかと思いました。俺は病気が分かってからも、出来る相手を探してしまった時もありました。もちろんセーフは前提ですが…でも、今は好きな人が見つかり俺自身を受け入れてくれている事がストッパーになっている様な気がします。

自分の身体は自分のモノ、人生どう生きようが関係ないと思っていました。誰かの為に、自分の人生の時間を使えたら、一緒に時間を共に共有出来たら、素敵なお事なのかなと今は思います。このストッパーがいつまで続くのかは自分にも分かりません。もしかしたら、渴望的な現象が出るのかもしれませんが…。

自分が依存症と思っていなかった事も、実はそーだったと思えたいい機会に自分自身に向き合える事が出来ました。今は、面白可笑しく話してくれた、ゲストの方の様に話せないですが自分の1部として受け入れられたらと今は感じています。

年末パーティ参加者の感想文(「ぶれいす東京Webサイト」
2018年4月掲載より)

■「ホッとするあたたかいパーティでした」

トトちゃん(感染告知:2015年/3回目参加(パーティ初参加/40代/女性)

前回ぶれいす東京のイベントに参加してからすでに2年以上が経っていました。そのとき参加したきっかけは、服薬を開始するかどうかギリギリまで気持ちが決まらず迷っていたからでした。当時集まったミーティング参加メンバーのみなさまの姿や実際の声に勇気をもらい、迷いがなくなり服薬をしようと心を決めることができました。早い段階での服薬がいいという治療方針を聞いていましたが、それでもとても迷いがあっただけに、気持ちよく薬を開始するきっかけを頂くことができとても感謝していました。

服薬を開始してからは、副作用や薬疹などの症状に悩まされましたが、それも今ではほぼ落ち着いてきていました。と同時に体力も信じられないくらい回復しました。年末パーティは男性が多いと聞いていたので、女性である私はそんな場に行ったら場違いなのかな?と一瞬心配しましたが、多分そういうのはあまりみなさん気にしないのだろうなと思い、むしろ同じ共通項を持つ仲間同士ということで、見知らぬ者同士でも、なにかこう居心地の良さを感じることができるのではないかなと期待し参加を決めました。自分の中にこれまでの流れに一区切りつけて新たな気持ちで新年を迎えたいという気持ちもあったからだと思います。

パーティの会場に着くと、落ち着いた雰囲気の中でスタッフの方たちが忙しそうに動き回っていて、ほんわかした柔らかい冬の日差しも相まり、たどり着けてホッとした気持ちになりました。さりげなく声をかけてくれる方とかもいらして勝手はわからないながらもそれほど緊張することはありませんでした。人数が集まってくると、2年以上も前に1~2度だけ会った方たちが私のことを覚えてくれて声をかけてくれたりもし、再会するというのはやはりとても嬉しいもので、来てよかったな!と思いました。少数派の女子は8~9つほどあったテーブルの島の1つに集まり、居合わせた他の男性の方々と一緒に、旅の話だったり雑談をしながらおやつを食べ、各島対抗のジェスチャーゲームなどで盛り上がり楽しかったです。様々な思いを持ちながら皆さんいるのだろうと思いますが、こういう場があることにとても感謝しています。企画して下さったぶれいす東京の皆さま、スタッフの皆さまに感謝しています。ありがとうございました。



部門報告 (バディ)

1. スタッフ研修

バディ・スタッフとして活動するには、基礎研修を受けた上で部門の研修を修了することを条件としている。基礎研修は、HIV/AIDSに関する知識を身につけるとともに、自己のHIV/AIDSのイメージを認識すること、そして部門研修はバディとしての関わり方をどのようにもつか、自分自身でイメージしてもらうことを目的としている。基礎研修は、年に1度の各部門合同での「合同研修」にて、部門研修は「バディ・ワークショップ」にて行っている。

(1) 基礎トレーニング

● 合同研修

今年度は2017年9月10日、17日、23日の3日間で行なわれた。この研修は各部門合同であり、研修項目も共通したものとなっているが、バディ部門のみならず、ぶれいす東京の全体の活動とHIV感染症の関連領域も学び、幅広い視点と知識を得てもらうことを目的としている。(詳細は6ページを参照)

(実 績)

2017年度の研修の終了時点での活動希望者は7名となった。

(2) 一日ワークショップ (8時間)

バディとして活動を始めようとする自分自身を見つめ直すこと、またクライアントがどのような状態にあるのか理解を深め、その上でバディの役割とは何か、クライアントとの関係性について、自分がバディとして何ができるか、等を考えてもらうことがこのワークショップの目的となっている。また、ワークショップの中では、実際の利用者に協力いただき、利用者の生活についてお話していただくなどしている。

(内 容)

- ・アイスブレイキング
- ・自分の最初の喪失について
- ・自分がバディだったら(仮想体験)
- ・HIV陽性者と語る
- ・喪失を体験するワークショップ
- ・分かち合いの時

(実 績)

2017年11月5日(日)に開催。6名が参加、修了してバディの登録を行なった。

2. スタッフ・ミーティング/交流会

● バディ活動スタッフのためのミーティング

活動中のスタッフを対象として、バディ・ミーティングを行っている。午前ミーティングは、奇数月/第1土曜日/11:00～、偶数月/第1木曜日/11:00～に開催、夜間ミーティングは第3木曜日の19:00～で開催した。なお木曜日の午前ミーティングについては参加者が少ないため、参加がある場合にのみ開催とした。

参加者は2～8名程度で、それぞれが担当しているクライアントとの関わりについて、担当者同士やコーディネーターと相談できたり、お互いにアドバイスしあえる場となっている。また、必要に応じて、個別にクライアントに関わる個別ミーティングやスーパーバイズも実施している。

また、不定期ではあるが、バディ同士の交流を目的とした交流会も開催している。

(実 績)

バディ・ミーティング 2017年度は21回(中止3回)開催し、のべ71名が参加
個別ミーティング 2017年度は21回実施

3. 登録バディのフォローアップ・トレーニング

● フォローアップ研修

基礎トレーニングを終了したスタッフを対象とした研修となっており、待機中のバディに陽性者との関わりについてイメージする機会や、関係の深い問題について知識を得て、考える機会を提供している。

また、既にバディ活動を行っているスタッフが、自分とクライアントとの関係について、バディの役割について、客観的にとらえる機会になることを目的としている。

(実 績)

「バディとクライアントの関わり方の変化 ～15年の関わりから～」
2018年3月4日(日)に開催、参加者14名。

4. スタッフの構成(2018年4月末現在)

(1) 年齢

20歳代	7名
30歳代	5名
40歳代	21名
50歳代	13名
60歳代	3名
70歳代	2名

(2) 性別

男 性	29人
女 性	22人
合 計	51人

5. 2017年度バディ活動実績

(1) 派遣依頼

・前年度より活動を継続	15名
・活動休止中	6名
・新規依頼	3名
・再依頼	1名
合 計	25名

・バディ派遣終了	3名
派遣終了理由 死亡	2名
ニーズの消失	1名

※2018年3月末現在の派遣状況

・活動休止中	6名
・派遣継続中	16名
合 計	22名

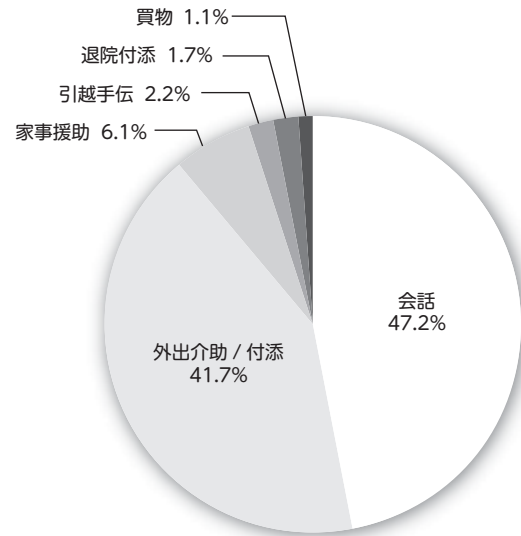
(2) 活動バディ・スタッフ

派遣依頼 19名(休止中6名を除く)に対し 44名のスタッフを派遣した。(利用者1名に対する実人数でカウント)

(3) 活動内容

今年度のバディ派遣件数は、スタッフの報告をまとめたところ 180件であった。そのうち、在宅訪問は 116件(64.4%)、病院への訪問は 18件(10.0%)、電話によるコミュニケーション(訪問連絡等の電話は件数に含まず)は 46件(25.6%)であり、今年度の総活動時間は約 395時間となった。

全体の内容別活動のまとめ (n=180)

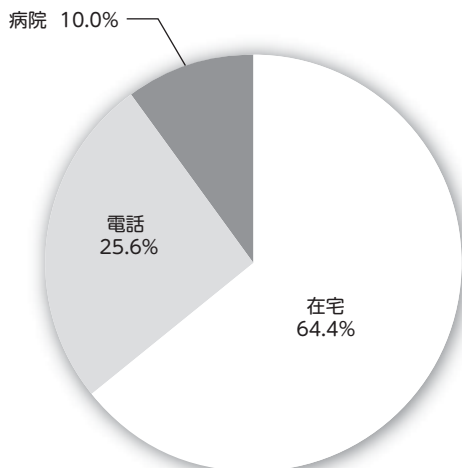


(4) 訪問先とサービス内容

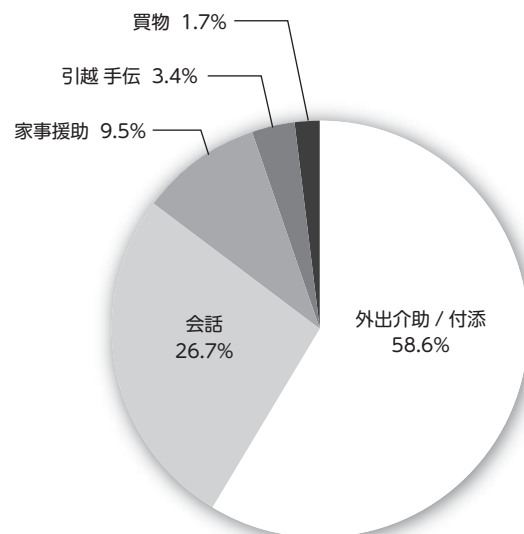
●在宅訪問

在宅訪問での主な活動について、今年度は合計で 116件の活動があった。内容別では、外出介助 / 付添が一番多く 68件(58.6%)であった。次いで会話が 31件(26.7%)、家事援助が 11件(9.5%)、引越しの手伝いが 4件(3.4%)、買い物が 2件(1.7%)となった。外出介助は、車椅子利用者や視覚に障害がある方の通院や趣味等での外出時の同行であった。会話は、在宅療養している人と、コミュニケーションや気分転換を目的とした会話となっていた。なお、外出介助やその他の活動においても、会話をしながら活動しているケースがほとんどであり、利用者は定期的なバディとの会話を楽しみながら、時には愚痴もこぼしながら、利用されているようだった。その他、洗濯での家事援助、買物の手伝い等があった。

主な活動先 (n=180)



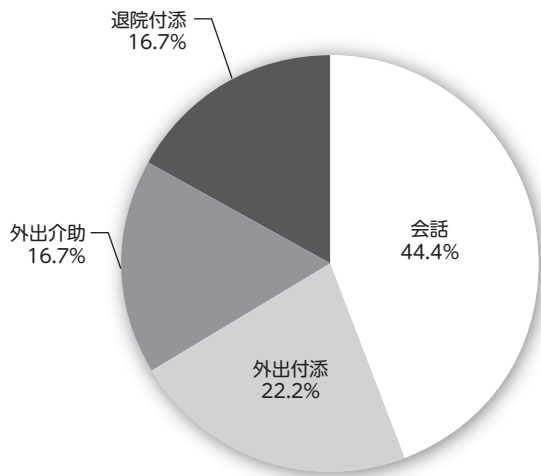
在宅での活動内容 (n=116)



●入院先訪問

入院先訪問は、合計で18件の活動となった。活動内容は、会話が8件(44.4%)、外出付添4件(22.2%)、外出介助3件(16.7%)、退院付添3件(16.7%)となっていた。元々在宅に訪問している利用者が、他の疾患や怪我等により入院になったため、場所を変えて訪問するケースがあった。また、新規でターミナル期になってから、医療従者の紹介で話し相手や外出の付添等で活動するケースもあった。

病院での活動内容 (n=18)



6. まとめ

●新規依頼と終了したケースの内容と傾向

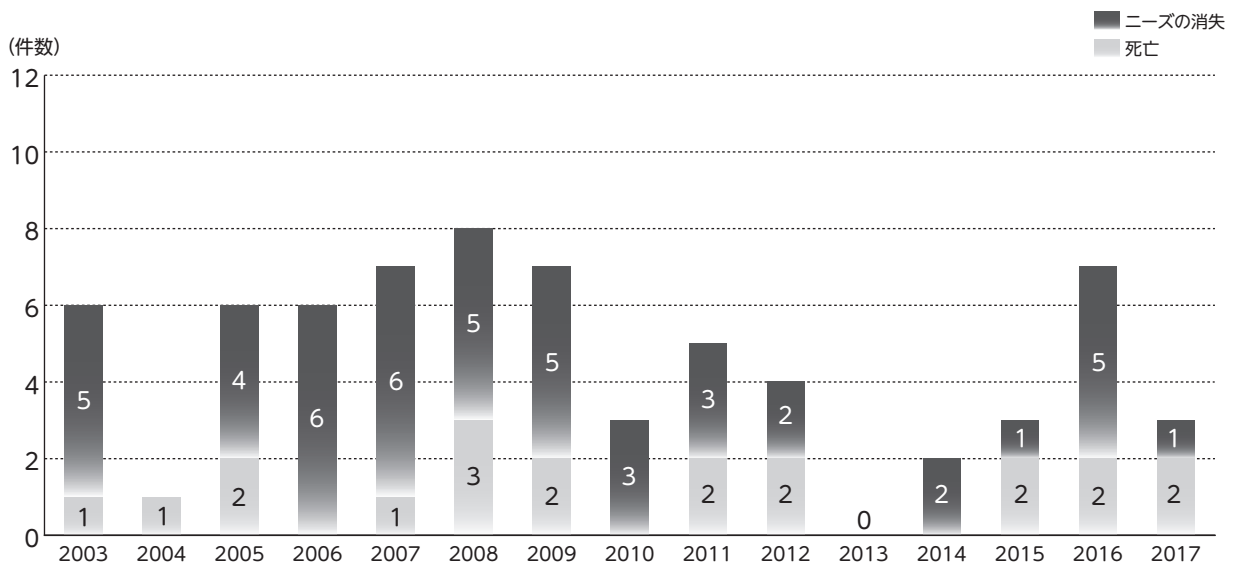
新規に依頼を受けた方は3件、以前利用のあった方の再依頼が1件であった。新規の派遣は、3件とも入院中の外出付添、退院の支援、話し相手、買物代行など、すべて入院中の支援での依頼であった。また、再依頼も、過去に入院時に利用した方から、入院時の買物や話し相手等での支援であった。利用のきっかけは、1件は外来看護師の紹介、2件は前からのぶれいす東京のサービス利用者であった。なお、継続派遣は再依頼も含めて3件となっている。

今年度は活動が終了となったケースは3件で、2件はクライアントの死亡による終了、1件はニーズの消失による終了であった。死亡されたケースについて、1件は、2000年より17年以上にわたり在宅での支援に関わったケースで、発症判明で半身に麻痺が残り、在宅で家族の支援を受けながら生活をしていただいていた方だった。もう1件は、癌のターミナル期に医療従者から紹介を受けた新規のケースで、残念ながら1回目の訪問直後に亡くなられてしまい、活動が終了した。なお、ニーズの消失した1件は1年以上連絡が取れなくなったため、ニーズが終了したものとした。

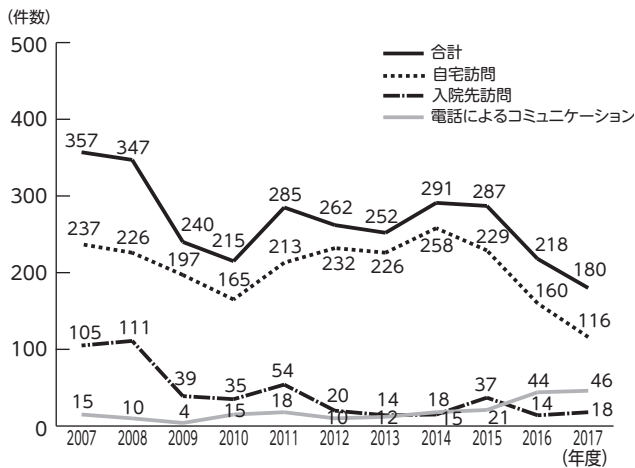
●派遣件数は減少、内容は変わらず

派遣件数は、昨年度より減少していた。ここ数年続く減少の要因としては、身体に障害あり在宅生活している方で、利用頻度の高い方の定期訪問が減少していることが挙げられる。今年度は、電話によるサポートが昨年と同様にあるが、これは発症により脳の機能に障害が残った方や、精神的に不安定になった方に定期的な会話によるサポートを行ったことと、訪問が休止している方に電話で様子を伺うなどのサポートを行ったためである。

活動の終了理由



年次活動件数の推移



●クライアントの傾向と関わり

クライアントの傾向は、身体に何らかの障害をもちつつ在宅で生活をしている方で、単身の中老年の男性が占める割合が変わらず高い。ちなみに、継続派遣の16名中14名が男性の単身世帯、なんらかの障害がある方は、半身麻痺等による車椅子使用や杖歩行などの歩行困難が7名、視覚障害が1名、精神障害が3名であった。

クライアントとの関わりは、長期的な派遣が多く、7年以上の関わりを持っているケースは13名であった。うち8名は10年以上の関わりを続けている。ちなみに、現在最長で訪問している方は20年になっている。

クライアントとの関わり期間

関わった期間	件数	うち継続
7年以上	14	12
5年以上7年未満	2	2
1年以上5年未満	9	7
1年未満	4	3
合計	29	25

7. 今後の活動に向けて

●活動の継続性と体制づくり

活動の継続にあたって、現在の利用者のほとんどが、身体や精神になんらかの障害を持っており、活動において介護技術が求められるケースが多い。今後も利用者の高齢化等、様々な理由での機能低下も考えられるため、介護技術に関しては、勉強会をするなどのフォローをしていきたい。また、今年度は、HIV以外の疾患、例えば癌で入院し支援が必要になったケースが複数あり、その後のターミナルの支援、亡くなる可能性も考えながら活動していく必要を感じた。特に単身者においては、入院になった場合に利用できる社会資源は少ないため、バディに依頼要請がくることが考えられる。今後も、公的サービスでは補えない部分を補足しつつ、利用者の生活支援、生活の質の向上につながる活動を、できる範囲で柔軟に対応し、継続することができればと考える。

継続する難しさとして、バディはあくまでもボランティアとしての関わりであるため、介護技術が必要な活動をどこまで行うか、利用者の生活にどこまで関わるか、判断が難しいことがある。今後も、利用者や相談しながら、利用者や活動するバディの関係性を確認しながら、できることを活動していきたいと思う。また、周囲の公的機関や関連機関とも、本人の許可を得た上で連携し、お互いの役割分担を意識しつつ、相互の補完ができるような活動ができればと考える。また、精神疾患を持つ方については、専門家にも助言をもらいながら、活動をしていきたいと考える。

スタッフの状況について、潤沢な状態ではないため、曜日や時間によっては利用者のニーズに十分に対応できない場合もある。特に平日の日中の活動はなかなか難しい状況だが、多くのバディの協力を得ながら対応している状況である。様々なニーズに対応できるよう、今後もスタッフの確保に励んでいきたい。

最後に、日頃から活動を続けていただいているバディ・スタッフの皆様、今年度も活動にご協力いただき、本当にありがとうございました。

バディ活動は、協力いただけるボランティアのみさんがあっての活動です。コーディネーターとして、いつまでもたっても力不足で申し訳ないのですが、今後もみなさんの力を借りながら、バディ派遣の運営に努めていきたいと思っております。今後ともご協力いただけますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

(文責 バディ・コーディネーター 牧原/九岡)

部門報告 (HIV 陽性者と周囲の人 / 確認検査待ちの人への相談サービス)

(1) ぶれいす東京 相談サービス報告

ぶれいす東京では、HIV 陽性者とその周囲の人へ、電話や対面、メール/fax などによる相談サービスを提供している。電話・対面による相談については、2009年4月以降、厚生労働省の委託事業として、HIV 陽性者とそのパートナー、家族のための専用の相談電話「ポジティブライン」0120-02-8341 (月～土: 13:00～19:00) と、プライバシーに配慮した個室で行う「対面相談サービス」(月～土: 12:00～19:00) を提供している。なお相談は原則匿名で行っている。対応は、HIV に関する電話相談や直接的なケアを担当してきた相談員 (社会福祉士 / 医師)、3人が担当した。

また、2016年度からポジティブラインでは、HIV 陽性の相談員による相談時間を毎週木曜日 15:00～18:00 に設けており、2名の相談員でシフトを組んで対応している。相談員の2名は、既にぶれいす東京において、他の電話相談の経験がある者で、さらに研修を行った上で業務にあたっている。なお、相談員の情報交換、業務確認を目的とした相談員ミーティングも定期的に行っている。(今年度は5回開催)

即日検査や郵送検査の普及に伴う「判定保留 / 確認検査待ち」の結果を受けとる人の増加を想定し、ぶれいす東京のwebサイトに「判定保留 / 確認検査待ちの人へ」向けのページを作成し情報発信している。「誰にも話せない、どうしよう」「これからどうなるの」「結果が出るまでの過ごし方のコツ」といった不安に対するメッセージから、検査の情報、相談窓口の紹介などを行っている。ぜひ一度ご覧いただきたい。

「判定保留 / 確認検査待ちの人へ」

http://ptokyo.org/consult/pending_results

■ 相談 / 連絡期間

2017年4月1日～2018年3月31日

■ 相談 / 連絡件数

	陽性者相談員対応
電話による相談	1242件 (うち107件)
対面による相談	575件
書簡による相談	13件
合計	1830件

■ 相談者の背景

▼ 電話相談、対面相談 (メール/fax/書簡は除く)

のべ合計 1817件 (男: 1672、女: 145)

HIV 陽性者	1537件 (1515:22)
パートナー / 配偶者	75件 (37:38)

家族	38件 (16:22)
専門家	65件 (32:33)
その他 / 不明	35件 (23:12)
確認検査待ち / 判定保留	67件 (49:18)

「家族」の内訳 (38)

きょうだい (19)、母親 (16)、父親 (2)、家族 (1)

「専門家」の内訳 (65)

医療機関 (24)、就労関連 (12)、HIV 関連地域団体 (7)、保健所 (6)、福祉関連 (6)、その他 (10: 弁護士 <2>、ダルク職員 <2>、動物保護団体 <2>、海外団体 <2>、保護司 <1>、日本語学校 <1>)

「その他 / 不明の内訳」の内訳 (35)

感染不安とおぼしき方 (14)、友人 / 知人 (7)、判定保留者のパートナー / 配偶者 / 家族 (6)、元パートナー (3)、パートナーの家族が陽性 (1)、養護教員 (1)、不明 (3)

▼ 相談者の年代 (n=1817)

10代	8件
20代	51件
30代	332件
40代	612件
50代	374件
60代	117件
70代以上	1件
不明	322件

■ 新規相談 (電話・対面) のまとめ (n=332)

属性		[男:266 女:66]
HIV 陽性者	187	(179 : 8)
パートナー / 配偶者	37	(28 : 9)
家族	12	(4 : 8)
その他 / 不明	19	(9 : 10)
専門家	25	(9 : 16)
確認検査待ち / 判定保留	52	(37 : 15)

総数は昨年度 (339件) とほぼ変わらなかった。HIV 陽性者からの相談が多く、全体の6割弱を占めていたが、件数としては昨年度 (214件) よりやや減少した。パートナー / 配偶者では、同性のパートナーからの相談が多かった。家族は、母親 (6)、父親 (2)、きょうだい (3) 等から相談があった。その他は、友人 / 知人 (6)、確認検査待ちの人のきょうだい / パートナー (5)、元パートナー / 配偶者 (3)、性的関係があった人 (1) 等であった。

専門家の背景は、医療機関（10）、就労関連（5）、保健所等（3）、福祉関連（2）、地域団体（1）、その他（4）となった。具体的には、医療機関はMSWからの相談や連絡が多く、就労では企業の人事担当者から、福祉関連では福祉事務所、障害者施設、その他では、保護司、日本語学校の教師、動物保護団体からの相談／連絡があった。

確認検査待ち／判定保留に関して、昨年度（30）より増加があった。相談者のセクシュアリティは、ゲイ／バイセクシュアル男性、ヘテロ男性、ヘテロ女性がほぼ同じ割合でみられた。ヘテロ男女においては、陽性の可能性を予測しておらず、結果を知らされたものの、結果の解釈に対する情報が不足し、混乱している方が多かった。ゲイ／バイセクシュアル男性では、気になる症状や体調不良がきっかけで検査を受ける方が多くみられた。両者ともに、インターネットで情報を調べすぎ、余計に混乱している事例も多かった印象である。

居住地／発信地	
関東	231
近畿	27
九州／沖縄	21
東海	16
北海道／東北	16
中国／四国	11
甲信越／北陸	8
海外	1
不明	1

相談者の居住地／発信地は、関東地方が多く全体の7割ほどを占めているが、その他の地域からも相談がよせられていた。

情報提供者	
情報・ネットワーク（ネット・冊子等）	203
医療や行政などの専門家	44
人的ネットワーク（他陽性者・家族等）	28
地域のネットワーク（電話相談・団体）	15
その他	21
不明	15

相談をするきっかけとなった情報源としては、インターネットや冊子などをもとに、相談者が自ら情報を集め、連絡を取った方が6割を占めており、増加傾向がみられた。一方、医療や行政の専門家から紹介を受けた者は1割で、他の陽性者や家族などの個人的なネットワークから勧められてきた方が続いた。

新規に相談があったHIV陽性者において、どのような経緯でHIV感染を知ったか、どこで検査を受けたかをまとめた。ただし、相談の中で聞き取れた範囲内でのことで、対

象となるHIV陽性者187人中119人の傾向である。

検査を受けた機関（n=119）	
病院（外来）	43
保健所／検査所	35
病院（入院）	26
献血	3
郵送検査	1
イベント検査	1
その他	5
不明	5

検査のきっかけ（n=119）	
自発的（症状なし）	32
自発的（症状あり）	28
HIV関連の症状（医師の勧め）	26
その他の症状（医師の勧め）	18
献血	3
術前検査	3
健康診断のオプション	1
性的接触があった人からの通知	1
妊婦健診	1
その他	5
不明	1

HIV検査が導入された状況は、医療機関の外来／入院など、医療機関での判明が69件でほぼ6割を占めていた。保健所／検査所での判明は3割弱、その他に献血、郵送検査、イベント検査での判明もあった。

検査を受けたきっかけは、自発的な検査（症状のあり／なしを含む）によるものが60件、医師の勧めが44件あり、前者は少なくとも自らHIV感染を考えた可能性があり、後者はいわゆる「いきなりエイズ」が含まれていることになる。また、献血、術前検査、健康診断のオプション、性的接触があった人からの通知、妊婦健診などもみられた。

■電話／対面相談によせられた内容項目

HIV陽性者からの相談について、相談記録をもとに内容を1～9の項目に分類し、詳細をまとめた。複数の項目に該当する相談内容であった場合は、それぞれの項目に含めて集計している。

周囲の人の相談、専門家からの相談や連携については、それぞれの属性で内容をまとめた。

カッコ内は2016年度数字

1	検査や告知に関する相談	115(92)
2	告知直後の漠然とした不安	122(136)
3	対人関係に関する相談	417(386)
4-1	生活に関する相談	701(787)
4-2	制度に関する相談	228(324)
5	心理や精神に関する相談	872(1079)
6	病気や病態の変化や服薬	302(226)

7	医療体制や受診に関する相談.....	174(179)
8	医療機関以外の支援体制・リソースへのアクセス	14(34)
9	連絡等のコミュニケーション.....	739(817)
▼ 周囲の人からの相談..... 259(175)		
▼ 専門家(外部)からの相談や連携..... 93(133)		

1 検査や告知に関する相談：115

1 検査や告知に関する相談	
判定保留時の不安や対応	68
告知の状況	25
検査機関の対応	12
検査の信憑性	8
その他	2

判定保留時の不安や対応に関する相談者の多くは、保健所、病院やクリニックなどで迅速検査を実施され、スクリーニング陽性の結果を受け取った人たちだ。医療機関では、内視鏡や手術前などにおこなわれる術前検査、妊娠判明初期に実施される血液検査、というきっかけもあった。さらに、体調不良やなんらかの症状があるなか、自発的に保健所、医療機関で HIV 検査を受けた人もいた。さらに、気になる行為からしばらくして、感染直後と思われる高熱、発疹などの急性症状をきっかけに検査を受けている人が、保健所でも、医療機関でも存在していた。そこに新たな検査ニーズがあるのかもしれないが、難しい対応をせまられる課題だ。

結果を聞いた人からは(加工/合成あり)多様な声がよせられていた。

「昨日、スクリーニング陽性と言われた。ゲイではないのですが、本当に陽性の確率はどのくらいですか？」

「1年前の検査では陰性だったのです。なんかもう今日は頭が真っ白になってしまって、とりあえず電話しました。」

「あの、自分は初めての妊娠で、それで妊婦健診のなかに HIV の検査もあって、何気に受けたら、それが陽性だっていわれて、確認検査になりました。医師からは、『よくあるからねー、結果がくるまでは心配しなくていいよ』という感じだったので、逆に不安に思ってネットで色々調べたら、不安になってしまい、それで電話しました。」

自発的に検査を受けた人たちの、HIV 検査を受ける動機やきっかけは以下の様なものがあった。

「去年の暮れに危ないと思う行為があって、数週間で熱がでたりして、もしかしてと不安になって、それで HIV 検査を受けました。」

「彼女がいて将来結婚を考えているので、ブライダルチェック的な意味合いで保健所の HIV 検査を受けました。」

「仲のいい友達に話して、検査を勧められていたが、現実

を見るのが怖くて、2年間ずっと逃げまわっていました。」

「皮膚科の看護師さんから『带状疱疹になるのは免疫が落ちているのでは』と言われ、心配になり保健所で検査を受けました。特に体調が悪いとかいうことではありません。」

「先週、肛門にヘルペスができて、大きな病院で検査をする際に HIV 検査しましょうかと言われた。」

「白内障の手術を受けることになって、その術前検査をしたら、陽性ってでていますって言われた。」

全国から検査に関する相談がよせられ、ゲイ男性だけでなく、女性、異性愛の男性からも相談があった。スクリーニング陽性の結果を受け取った人は、予想外の結果に戸惑う人も多く、つついネットで情報検索をして、さらに混乱を招く場合も多いため、相談のなかで、ネットリテラシーについて話すことも多い。

「結果が出るまではあまりネットで深く調べたりせず、こういった電話相談を利用しながら過ごしてください。ネットだと特殊な事例に行き着きやすかったりします。あえて HIV のことを忘れるようなことに集中してみるのも手です。」

2 告知直後の漠然とした不安：122

2 告知直後の漠然とした不安	
漠然とした不安や混乱	56
身体状況に関する不安	37
生活のイメージ	11
他陽性者との交流	11
プライバシー不安	5
その他	2

当項目は、原則告知後3ヶ月以内の方を対象としている。相談のタイミングとしては、告知を受けた当日など直後の相談から、しばらく経ち落ち着いた状態での相談など様々であった。直後の相談では、通院前の医療機関の選択について、健康保険を使って会社に病名が伝わらないか、もやもやとした不安が続いて落ち着かず眠れない、予防していたのに信じられない、といった相談から、予想はしていたが思っていた以上にショックが大きくつらい、といった相談があった。しばらく経った方では、CD4やウイルス量など身体状況に関する相談、1人でがんばって見たが気持ちの波が大きくて限界になって連絡した、手帳をとってもプライバシーは大丈夫か、といった相談などがあつた。

今年度も昨年度と同様に、海外から仕事や留学で来日し、日本で感染が判明した外国人の相談も増えていた印象である。

3 対人関係に関する相談：417

3 対人関係に関する相談	
相手との関係性	248
HIV の通知	47
性に関する相談 (sex やセクシュアリティ、セイファーセックス)	30
恋愛	28
トラブル	26
結婚や離婚、子づくりなど	24
検査 (受検勧奨等)	3
プライバシー	1
その他	10

相談の対象者	
パートナー / 配偶者	126
周囲	53
元パートナー	31
性的関係のあった人	31
家族	29
他陽性者	18
会社	15
友人 / 知人	9
行政	3
NGO スタッフ	2
その他	9

対人関係に関する相談では、パートナー / 配偶者に HIV 感染を伝えるかどうかの事前の相談、伝えた後の関係性の变化や継続に関する相談などが多くよせられた。相談の9割以上は男性からのものであった。

性的なコミュニケーションを含んだ相手に伝えるのは難しく、パートナー / 配偶者に対する相談では、以下のような場面での相談があった。(加工 / 合成あり)

「付き合ってから数ヶ月の彼女に伝えていない。セックスもしていない。今後、どうしたらいいだろう。」

「数ヶ月前から付き合っている彼氏がいます。本気で真面目にお付き合いをしたいという気持ちがあって、それで HIV 検査を受けたら陽性だった…。自分は、別れた方がいいと思っている。だって、彼を幸せにできないと思うし。」

「あの、自分はこれまでかなり気をつけていました。ただ、1人だけゴム無しでセックスをした人がいます。おそらくその人からの感染だと自分では思っています。しばらく会わないでいたのですが、最近やりとりが復活していて。どうしたらいいのか迷っています。」

「相手が自分でゴムをはずすというときにも、陽性者が責任をとるべきなのだろうか。フェラチオをされたら、伝えないといけないのだろうか。恋愛になりそうな場合には、どう伝えればいいのだろうか。」

カミングアウトした人たちからは、以下の相談があった。

「彼女がいます。結婚したいと思っていたので、病院に一緒に行ってもらい、主治医から病気について教えてもらいました。病気がわかった後の子作りって、なにができるのだろうか。不妊治療はどういうものですか?」

「付き合いたい相手に自分が陽性であることを伝えた。すると、それから相手の態度が変わってしまった。」

さらには、パートナーの介護やケアにあたる陽性者からの相談もあった。

「パートナーが介護状態になろうとしている。どうしたらいいですか?」

「パートナーが逮捕されてしまい、勾留中に警察を訪問しました。」

「陽性のパートナーが自殺してしまいました。」

「エイズで亡くなった彼について、なかなか気持ちが整理できない。」

元パートナー、性的関係があった人などからの相談も多くよせられた。距離感、関係性によっては、それが逆に難しさにつながる場合もあった。

4-1 生活に関する相談：701

4-1 生活に関する相談	
就労 / 就学	402
経済的な問題	82
外国人	64
住宅問題 / ホームレス (野宿生活)	63
法律問題	42
生命保険	19
海外渡航 (留学) / 海外からの帰国	11
医療費	5
健康診断	5
その他	8

< 就労について >

就労についての相談が最も多くよせられていた。HIV 感染が判明した直後に、就労を継続するのか、あるいは離職職を考えるのかといった相談もある。多くの場合は、就労を継続しながら様子を見ろという対処を本人は選ぶ。しかし、病名を告げずに就労を継続するなかで感じるストレスや不安、不満を話す場が、周囲には存在しない。電話相談を利用する際には、そこも含めて隠さずに話せるという相談者は多い。特に HIV と就労という難しさに加えて、心理的な不安定さ、発達障害、依存症などがある場合には、より難しさを感じる相談者も多く、どのように対処していくのかについて相談員と一緒に考えていくことになる。

地方在住の陽性者から、就職活動の困難さについての相談がよせられた。体調の安定のためには定期的通院が必須だが、就労とのバランスをとる上で、通院をどのように説明するのか、難しい場面がある。

病名を隠しながら働くのが大変だという人たちの一部は、転職をし、障害者枠で就労している。プライバシー通知は人事、上司のみというのが最も多い。ぶれいす東京では、年に2度、企業を招いた就職支援セミナーを開催している。他の導入可能な地域の就労支援サービスとして、ハローワーク（障害者）、障害者職業センター、東京しごとセンター、就労移行支援事業所、就労継続支援事業所、障害者向けの訓練校、民間の障害者向けの人材紹介事業者などが活用されている。これまでの経歴を見直して、働き方を事務職から、福祉職などに転換する人もいる。しかし、医療、福祉、教育職などは、職場で病名を隠しつつ働くストレスが特に多い職業だ。そうした人たちからの相談もよせられている。

発症で就労に影響がでた人たちの復職や、メンタル面のバランスを崩した人々には、ワーク&ライフバランスを意識してもらうように投げ掛けている。PML（進行性多巣性白質脳症）と診断されたが、落ち着いたので復職したいという相談者も複数来所している。

< 経済的な問題 >

生活が困窮するには様々な背景があるが、メンタル状況が悪化し、収入の確保が難しくなるという相談も多くよせられる。体調は医学的に問題ないが、働くのがむずかしく、経済状態が悪化しているという人である。そういった場合には、生活保護の申請や、弁護士と相談しつつ債務の整理などをしながら、その後の相談者の人生と一緒にイメージしていく。また、生活保護受給者からの就労に関する相談もよせられている。

< 住宅問題 / ホームレス（野宿生活者） >

お金がない、引っ越しが必要、体調不良があるけども犬がいるから入院ができない、大家から出て行くように言われている等の相談もよせられている。また、刑務所からの出所後に、実家に帰る人、更生施設に入所する人、チャレンジネットの訓練プログラムに参加する人もいる。

< 生命保険について >

将来の、もし入院したらという不安に備えて生命保険への加入を考える陽性者もいる。さらには、不動産を購入する際に団体信用保険などの加入をどうするのかで悩むという相談も多数よせられている。

< 外国人からの相談 >

インターネットを介して、海外ですでに陽性が判明しており、服薬中の外国人からの相談があった。また、国内で感染が判明し、母国の情報収集、日本でのエイズ拠点病院やクリニックへの通院、身体障害者の手帳の申請などをサポートした例もある。

4-2 制度に関する相談：228

4-2 制度に関する相談	
障害者の制度利用 (手帳取得、自立支援、重度医療、障害者控除、施設入所)	89
生活保護	57
障害者雇用	31
健康保険（高額療養、傷病手当、付加給付、後期高齢者医療）	26
障害年金	7
失業給付	5
プライバシー	4
その他	9

制度に関する相談は、昨年度（324）より減少していたが、相談内容としては同様の傾向を示していた。制度利用においては、障害者手帳の取得時のプライバシー不安から具体的な手続きの方法、手帳利用のメリット・デメリット、転居時に必要な手続き、転職時のプライバシー不安についての相談などがあつた。手帳取得のプライバシー不安は、首都圏以外の方で多くよせられていた。また、在日の外国人からの相談も増えていた。生活保護については、受給の手続きや、受給下での生活や転居、経済的な問題などの相談があつた。障害者雇用では、転職時の選択肢としての検討、探し方の相談から、実際に障害者枠で就労しての不満やトラブルの相談があつた。健康保険でも、使用時のプライバシーに関する不安、付加給付と自立支援に関する相談などがあつた。障害年金では、支給停止になった方から今後の生活、不服申し立てなどでの相談があつた。

5 心理や精神に関する相談：872

5 心理や精神に関する相談	
精神疾患（抑うつ障害、適応障害、統合失調症、その他）に関する相談	567
薬物依存	148
人間関係の閉塞感	37
精神的な不安定さ	35
その他の依存傾向 (アルコール、セックス、ギャンブル、対人、その他)	24
HIVの受容	18
自殺念慮	13
精神科の受療に関する状況	13
ストレス	10
セクシュアリティの受容	2
その他	5

相談内容の項目のうち、今年度も最多の相談件数となったが、昨年度より減少していた。

本項目の「精神疾患」に関しては本人から病名や通院歴等の申告があつた場合に集計しており、直接的に精神疾患に関する相談がなかつた場合でも、その時の相談内容に影響していると相談員が判断した場合には、選択することとしている。

今年度も抑うつ障害、適応障害、統合失調症などを持つ方から、精神疾患の治療を継続する中での疾患との付き合い方、疾患のしんどさ、バランスをとるための定期的な相談などがあった。薬物依存を持つ方の相談が今年も多く、定期的に対面相談を利用し生活のバランスをとる方、逮捕/再逮捕で弁護士等を通じて連絡をもらう方が複数あった。その他の依存傾向を持つ方でも、同じような傾向があり、精神状態が悪くなると相談頻度が高くなるようであった。

感染がわかって数年たっている方からは、人間関係の閉塞感に関する相談、HIVの受容に関する相談が多く、病気の受容が進まない状態においては、人間関係も閉じがちになり、余計に精神的にきつくなっている印象があった。

6 病気や病態の変化や服薬：302

6 病気や病態の変化や服薬	
その他の疾患	128
服薬の継続	39
入院中の病態	38
CD4の変化	23
HIVの関連症状	23
副作用	15
投薬前の不安	10
その他	26

昨年度よりも相談が増加しており、特に「その他の疾患」に関する相談が多く見られた。具体的な疾患としては、本人の申告に基づくが以下のようなものがあげられた。

その他の疾患(順不同)～

骨折、B型/C型肝炎、梅毒、尖圭コンジローマ、アトピー性皮膚炎、蜂窩織炎、皮膚疾患、白内障、食道がん、肺がん、肺炎、咽頭炎、花粉症などのアレルギー症状、脂漏性皮膚炎、市中細菌の炎症、痔瘻、肛門周囲膿瘍、下痢、便秘、不整脈、糖尿病、中耳炎、水虫、椎間板狭窄/ヘルニア、原因不明の体調不良、その他

また、長期的な服薬での飲み疲れ、ストレス等による服薬の自己中断、薬剤耐性に関する相談があり、精神疾患や依存症を持つ方からの相談が多い印象だった。

入院中の病態では、発症による後遺症で長期入院中の相談、ガンの治療中の変り、在宅生活に戻れるか、社会復帰が可能ななどの深刻な相談もあった。CD4の変化では、発症して判明した方からCD4回復への焦りや焦燥感に関する相談があった。

HIVの関連症状としては、以下のものがみられた。

HIVの関連症状(順不同)～

進行性多巣性白質脳症の後遺症、HAND(HIV関連神経認知障害)、悪性リンパ腫、ニューモシスチス肺炎、免疫再構築等

7 医療体制や受診に関する相談：174

7 医療体制や受診に関する相談	
医療・検査機関の選択	52
医療従事者とのコミュニケーション	50
他科受診	24
歯科受診	17
通院や服薬の中断・拒否	10
セカンドオピニオン	3
精神科受診	2
その他	16

医療・検査機関の選択では、医療従事者との関係性の悪化が原因での転院の相談、他の疾患の兼ね合いで通院先をまとめたい、といった相談があった。医療従事者とのコミュニケーションでは、医療従事者との相性の問題や対応への不満、他科の医師とHIV担当医との見立てや対応の違いによる混乱や不満などがあった。他科受診と歯科受診では、かかりつけの医療機関以外に通院する時の病名通知の難しさ、薬の飲み合わせや診療拒否への不安の相談があった。今年、歯科の治療途中、医療費助成制度の使用により病名を把握した医療機関から診療拒否を受けた例、かかりつけの医療機関に対応科がなく、近隣の医療機関でも対応できないと言われたがどうしたらいいか、といった、ともに地方からの相談もあった。通院や服薬の中断・拒否では、医療従事者との関係性が悪くなったの通院の自己中断、精神状態の悪化が原因での通院や服薬の中断、医師と相談しての中断に対する不安など、様々な状況からの相談があった。

8 医療機関以外の支援体制・リソースへのアクセス：14

8 医療機関以外の支援体制・リソースへのアクセス	
その他の機関・リソースの利用	4
ぶれいす東京のサービスの問い合わせ	3
他陽性者との交流	3
外国の情報(ビザ、医療機関、医療状況)	2
地域の支援団体	2

インターネットの普及に伴ってか、相談件数は少なくなっているが、他では得られなかった情報の問い合わせ、ネット情報はどうか、正しいかなどの問い合わせがあった。具体的には、HIV陽性者専用のSNSについて、ぶれいす東京のパディに関する問い合わせ、地方での陽性者の交流会やミーティング、海外の治療や最新情報、地方の相談窓口や支援団体について、問い合わせや相談があった。

9 連絡等のコミュニケーション：739

9 連絡等のコミュニケーション	
近況報告	457
ネストプログラムの利用	103
利用登録	80
面談の調整	34
積極的な協力・参加	15
その他	50

今年度も他の項目に比べ、件数の多い項目になったが、昨年度よりは減少していた。その要因のひとつとして、精神疾患等を持ち、頻回な相談になる方が今年は昨年度より少なかったことがあげられる。

近況報告では、周囲に病名やセクシュアリティを話せていない方から、定期的な通院報告、状況報告として連絡をもらうことが多い。通院報告では、相談員と話をしながら通院で増えた情報の更新や整理をしたり、自分の状態を客観的に把握するために、この相談を利用しているようである。

ネストプログラムの利用や利用登録に関する問い合わせが今年度もあり、多くの方がネストプログラムに参加いただいた。また、時にはネストプログラムの問い合わせで連絡をいただくが、実際にはそれ以外の課題や問題の相談があり、電話をかけるきっかけとして問い合わせをされる方も存在した。

▼ 周囲の人からの相談：259

(3) 対人関係に関する相談	94
(9) 連絡等のコミュニケーション	31
(2) 通知を受けた直後の漠然とした相談	28
(1) 検査や告知に関する相談	26
(5) 心理や精神に関する相談	24
(6) 病気や病態の変化や服薬	18
(4) -1 生活に関する相談	13
(7) 医療体制や受診に関する相談	10
(4) -2 制度に関する相談	5
(8) 支援機関・リソースへのアクセス	2
その他	8

※ 相談者の背景は、P.44 の内訳を参照

パートナー女性、妻からの相談では、感染が判明し、夫の隠されたこれまでの性生活が明らかになることで、病気だけでなく、その事実が明らかになったことでの戸惑いが語られることが多くあった。信頼が裏切られたと感じるところもあり、HIV 感染を知り、戸惑う相手を支えたいという思いとの間で揺れ動く感情を聞くことがあった。日常生活のなかでは、どこにも話す場がない感情を聞くのが、電話相談の役割であった。HIV や合併症のことを知ってから、混乱から、日常を取り戻すまでの不安や情報収集にも対応した。また、セクシュアリティのこと、海外での遠距離

生活のなかで感じること、子作りに関する情報が欲しいなど、様々な相談がよせられた。

パートナー女性の事例(加工/合成あり)

「昨日まで関係ないと思っていた、HIV とか同性愛というテーマが、自分の身近でもあるなんて、ほんと信じられない。だから、ちょっと今混乱しています。確認したいのは、これから彼はどうなるのですか。」

異性愛男性からの事例

「彼女が陽性者です。感染がわかってから1年は経過しています。服薬も開始していて順調で、免疫もそれなりにあがってきています。ウイルス検出限界以下だそうです。彼女と将来は結婚して子供も作りたと思っていますが、可能なのでしょうか。」

ゲイ男性のパートナーからの事例

「彼氏の感染がわかり、検査を受けてほしいといわれた。付き合う期間のなかで、自分の感染リスクはゼロではなかったもので、検査にいくことも緊張した。幸い陰性だったが相手の感染機会などをいろいろと考えて悩む時間があった。」

「カミングアウトされて、付き合おうと思った。それで初めてHもしてみた。でも、行為の後にすごい不安になってしまった。彼の先走り液、彼の唾液とか大丈夫だったのかなど…。ネット上で調べるだけではよくわからなくて、自分が不安のなかにいるままで、質問するのも相手を傷つけないか心配になって電話しました。」

他にトランスジェンダー、レズビアン女性からの相談もよせられた。

▼ 専門家(外部)からの相談や連携：93

(9) 連絡等のコミュニケーション	50
(4) -2 制度に関する相談	12
(4) -1 生活に関する相談	11
(8) 支援機関・リソースへのアクセス	9
(3) 対人関係に関する相談	7
(5) 心理や精神に関する相談	2
(7) 医療体制や受診に関する相談	1
(2) 通知を受けた直後の漠然とした相談	1

※ 相談者の背景は、P.44 の内訳を参照

今年度新規に連絡があった専門家は以下であった。MSW (8)、臨床心理士 (1)、障害者支援 (1)、司法：(保護司 / 刑務所内就労支援) (2)、訓練校など (障害者むけ / 日本語学校) (2)、障害者福祉 (1)、看護師 (1)、保健所 (2)、動物管理センター (1)、生活保護ケースワーカー (2)、ホスピス (1)、企業人事 (3)

エイズ治療拠点病院 MSW からの連絡が多くよせられた。退院時に利用可能な入所施設について、生命保険、外

国人への帰国支援、女性陽性者のグループ、経済的な支援、メンタル面の支援、障害者としての就労、海外赴任、職場で身体障害者手帳をもっている職員を探す投げかけ文章に応える義務、不動産購入時に加入を求められている団体信用保険、などの問い合わせがあった。

受刑者の社会復帰に関わる組織からも就労支援についての問い合わせがあった。専門学校、日本語学校の教師からも生徒の感染が判明し、どのように対応したらよいかという相談があった。

地域の生活保護のケースワーカーからは、担当する陽性者に関する相談がよせられた。ペットを飼育する HIV 陽性者が入院する際に、引き取り手を探すため、動物愛護団体や管理センターとの連携があった。

他には、外来看護師、弁護士、ダルク職員、自治体カウンセラー、貧困支援機関、外国人支援団体、ハローワーク、障害者職業センター、障害者むけ職業紹介企業、自治体エイズ担当者、海外 HIV 陽性者支援団体などからの相談があった。

■1年を振り返って

今年度は、昨年度より約 200 件、相談件数が減少した。対面相談、電話相談ともに減少がみられたが、電話相談の減少は、昨年度と比べて精神状態の悪化での頻回な相談者が少なくなったこと、対面相談の減少は、第 31 回日本エイズ学会学術集会の運営などで相談員の対応できる時間が限られたことなどが、要因としてあげられる。新規の相談は昨年度と変わらず、HIV 陽性の相談員による電話相談も件数は変わらなかったが、その相談時間を旨して地方在住の陽性者がかけてくるが増えた印象があった。刑事事件等による身柄拘束者および受刑者との書簡によるやりとりも継続しており、今年度も新たに関わりが始まる事例があった。

相談者の属性は、HIV 陽性者が今年度も 8 割強を占め、家族と専門家の相談は昨年と比べて減少、確認検査待ちの方からの相談は、即日検査や郵送検査の普及と、「判定保留/確認検査待ち」の方に向けたホームページ上の広報もあって増加がみられた。確認検査待ちの方は、相対的に異性愛男女が多く、陽性の可能性を想定せずに検査を受け、かなり混乱した様子で相談してくる例が多かった。混乱を増幅した可能性として、ネットの普及により、ネガティブな情報にも触れやすくなっていることなどが考えられた。今後も様々な検査機会が増えるなかで、自ら情報をネット上で探し、混乱し相談に至る方は存在し続けると予想されるため、課題のひとつと考える。ぶれいす東京としては、判定保留/確認検査待ちの結果を受け取った方が、最終結果を受け取るまでの不安の軽減、専門医療機関につながるまでの支援に貢献できればと考える。

HIV 陽性者の相談として、今年もさまざまな困難さを併

せ持つ方からの相談が多かったように思う。

HIV の数値は安定しているものの、精神疾患や薬物、アルコール等の依存症を持つ方から、経済的な問題、就労、法的な問題、人間関係に関する相談を受ける機会が多くあった。こうした相談者の中には、精神疾患等が影響した服薬の自己中断などもあり、対応は医療機関や行政機関など、地域の様々な支援者と連携しながら行った。HIV、精神疾患、薬物問題、セクシュアリティに共通する問題として、周囲への通知が躊躇され、一人で抱え込みやすくなるため、それが精神状態に影響を及ぼし得ることが考えられた。また、そうした周囲に話しにくい問題を複数踏まえた上で、相談対応ができる窓口のひとつとして、ぶれいす東京が認知されるよう、今後も努力したいと思う。

海外から就労や留学で来日する外国人の陽性者は、昨年度に続いて増加しており、来日前に転院や服薬の継続について、メールで事前に相談をもらう場合もあれば、来日後に突然来所されることもあった。その多くは、障害者手帳の取得の要件を満たせば、日本でも通院や服薬ができるようになるのだが、なかには日本語が話せない、書けない状況で来日する方もあり、時には役所や通院に同行することもあった。また、行政の対応で混乱が生じる事例もあった。加えて、日本での在留資格を得るために弁護士と協働して裁判に協力することもあった。なお、支援にあたっては、(認定) 特定非営利活動法人 シェア=国際保健協力市民の会、任意団体 CRIATIVOS-projeto Saude (保健プロジェクト)、CHARM などの支援団体とも連携しながら行っている。

地方からの相談で、歯科における治療途中での診療拒否や、かかりつけの医療機関に対応科がなく、近隣の医療機関でも対応できなかったため、他の都道府県で治療を受けざるを得なくなった方からの相談があり、地方での他科診療の困難さ、HIV の理解がなかなか進まない現状が感じられた。

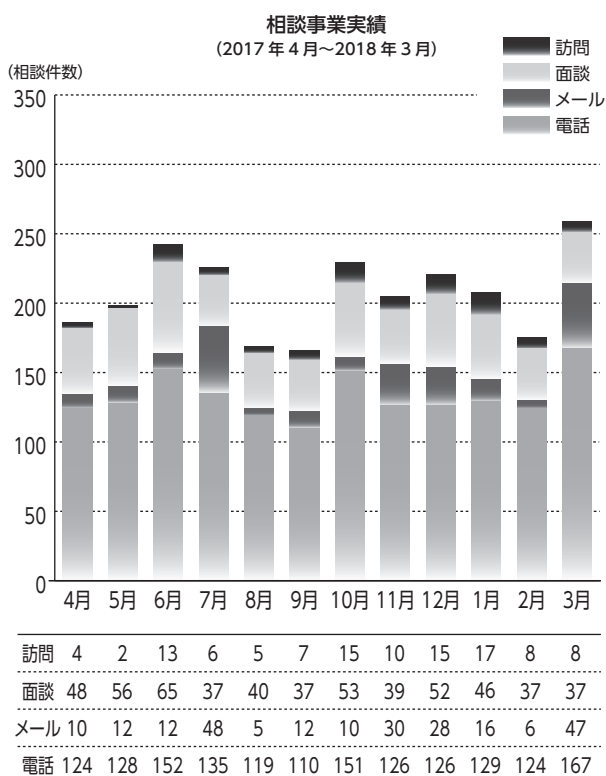
最後に、いつも同じ言葉になるが、ぶれいす東京の強みは相談者や相談内容の多様さに、柔軟に対応できるしなやかさではないかと考える。今後も、その特性を活かし、医療機関や病院、多様な地域の支援者達とともにゆるやかな連携を行いつつ、HIV 陽性者の生きやすい地域づくりにつながる活動を続けていければと考える。

(文責：牧原/生島/福原)

(2) HIV陽性者等のHIVに関する相談・支援事業

本事業は厚生労働省による事業受託として9年目に入った。今年度も（認定）特定非営利活動法人 シェア＝国際保健協力市民の会、任意団体 CRIATIVOS-projeto Saude（保健プロジェクト）とぶれいす東京の3団体にて運営を行った。「HIV陽性者等のHIVに関する相談・支援事業（ピア・カウンセリング等による支援事業）」は、HIV陽性者（エイズ患者を含む）やパートナー、家族を対象にピア・カウンセリングや電話・対面による相談サービスを提供することを通して、その社会生活を支援し、生活の質を高めることを目的としている。

●3団体合計の月別相談件数の実績



※メール相談には、ぶれいす東京のものは含まない。

I 事業の概略

本事業は、以下の7つの柱からなっている。

- ① HIV陽性者参加型のピア・カウンセリングの実践とグループ・プログラムの開発と運営
- ② HIV陽性者を含むスタッフの研修及び育成
- ③ HIV陽性者の社会参加のためのサポート
 - ※①～③に関しては、P.30 部門報告（ネスト）をご参照ください。
- ④フリーダイヤルによるHIV陽性者と確認検査待ちの人、そのパートナー、周囲の人のための電話相談
- ⑤ピア・カウンセリングを支える対面相談
 - ※④と⑤に関しては、P.44 部門報告（HIV陽性者と周囲の人/確認検査待ちの人への相談サービス）をご参照ください。

⑥地域における当事者支援とぶれいす東京での在日外国人のサポート

- ・群馬サテライト・ミーティングを継続開催
- ・中国語を話す陽性者の小グループミーティングの継続開催

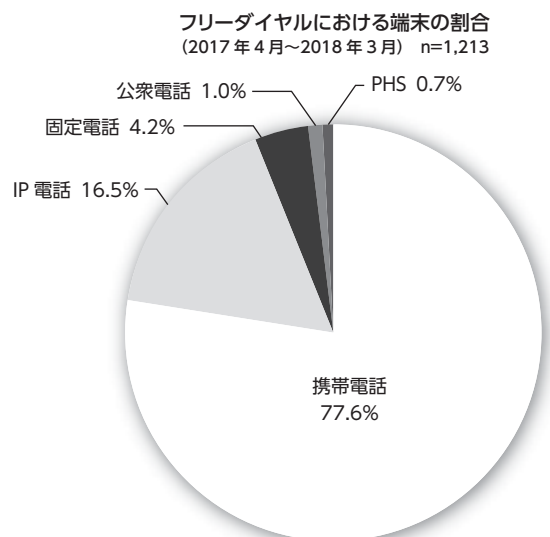
⑦在日外国人への相談サービスの提供

II 事業の実績

④フリーダイヤルによるHIV陽性者と周囲の人のための電話相談

ここではフリーダイヤル（ぶれいす東京の電話相談で導入）の効果について考察する。

NTTカスタマーセンターの集計のため、無言電話や間違い電話も含む。通話総数は1,213件（2017年4月～2018年3月：9月は欠損）で、それ以外（話中で途中で切った等）が、3,975件あった。合計5,188件で、通話率は23.4%（昨年度：22.8%）だった。通話中でタイミングによってはなかなか繋がらない場合もあったと想像する。



昨年と比較して、携帯電話からのアクセスが77.6%（昨年度：70.0%）、IP電話16.5%（13.4%）、固定電話4.2%（12.8%）、PHSが0.7%（2.8%）、公衆電話1.0%（1.0%）、だった。昨年度と比べると、固定電話とPHSが減少、携帯電話とIP電話が増加していた。公衆電話からのアクセスは昨年度と変わらなかったが、入院中に気持ちの整理や情報が少ない状況での相談ができる環境を確保していると思われた。HIVの専門でない医療機関で告知をされた場合、スマートフォンや携帯電話の検索でこの電話番号にたどりつき、相談に至ったケースもあった。

また地域別のデータで考察すると、東京都403件（33.2%）、東京都以外の関東甲信越287件（23.7%）、九州135件（11.1%）、中国・四国117件（9.7%）、近畿90件（7.4%）、北陸50件（4.1%）、東海38件（3.1%）であった。都道府県別では、神奈川123件、広島89件、福岡69件、大阪59件、富山50件など、全国から相談

が寄せられていた。相談がなかったのは、青森、石川、福井、鳥取、高知の5県のみだった。

⑦在日外国人への相談サービスの提供

●相談者と対象者の属性

相談全体では701件で、HIV陽性者がもっとも多く、514件となっており、次いで専門家165件、その他10件、家族8件、パートナー4件だった。確認検査の結果を待っている間の相談も2件あった。言語によるコミュニケーション課題をもつ方が多く存在し、そうした方の心理的なケアに貢献していると思われる。

○外国語相談(再委託)での相談者の属性(のべ件数):701件

HIV陽性者 : 514(男: 364、女: 145、その他 : 5)
パートナー : 4(男: 3、女: 1、その他 : 0)
家族 : 8(男: 2、女: 6、その他 : 0)
専門家 : 165(男: 47、女: 117、その他 : 1)
その他 : 10(男: 6、女: 3、その他 : 1)

○外国語相談(再委託)での対象者の属性(のべ件数):701件

HIV陽性者 : 657(男: 445、女: 205、その他 : 7)
確認検査待ち: 2(男: 1、女: 1、その他 : 0)
(陽性者の): 1(男: 0、女: 1、その他 : 0)
パートナー
その他 : 41(男: 10、女: 20、その他: 11)

●国籍と言語

国籍/対応言語について、相談事業全体では、ブラジルの方からの相談が最も多く、次いでペルーの人からの相談が続いた。またそれ以外のポルトガル/スペイン語圏の方からのアクセスもあった。ラテンアメリカ圏からの相談の多くはCRIATIVOSが対応している。

シェアには、タイ、フィリピン、中国などのアジア諸国からの移住労働者から相談があった。また、数は少ないがその他の多様な言語によるコミュニケーションが求められており、他言語の支援ニーズが存在していた。

～相談者の国籍/言語(のべ人数) n=701

ブラジル: 307、ペルー: 168、タイ: 41、
インドネシア: 29、日本: 27、メキシコ: 26、
スペイン: 17、アンゴラ: 12、ナイジェリア: 9、フィリピン: 7、ベトナム: 7、韓国: 6、アメリカ: 6、香港: 4、
ミャンマー: 3、中国: 2、イスラエル: 2、イギリス: 2、
カナダ: 2、ナイジェリア: 1、チリ: 1、不明: 22

●相談者の相談手段(のべ人数) n=701

相談や支援の手段は電話が最も多く、次いでメール、訪問/同行、来所面談と続く。各地の医療機関から対応の要望があるが、相談者の居住地は広域に及ぶため、電話やメールによる対応を中心にしている現状がある。

○電話による相談(n=354)

HIV陽性者 : 192(男: 139、女: 53、その他 : 0)
パートナー : 4(男: 3、女: 1、その他 : 0)
家族 : 3(男: 1、女: 2、その他 : 0)
専門家 : 148(男: 46、女: 101、その他 : 1)
その他 : 7(男: 4、女: 3、その他 : 0)

○メールによる相談(n=236)

HIV陽性者 : 219(男: 183、女: 32、その他 : 4)
家族 : 5(男: 1、女: 4、その他 : 0)
専門家 : 10(男: 1、女: 9、その他 : 0)
その他 : 2(男: 2、女: 0、その他 : 0)

○来所面談(n=1)

HIV陽性者 : 1(男: 0、女: 0、その他 : 1)

○訪問/同行(n=110)

HIV陽性者 : 102(男: 42、女: 60、その他 : 0)
専門家 : 7(男: 0、女: 7、その他 : 0)
その他 : 1(男: 0、女: 0、その他 : 1)

●外国語相談(再委託)のサービス対象者の年代(n=701)

対象者の年代は、40代: 278(39.7%)、30代: 156(22.3%)、50代: 73(10.4%)、20代: 68(9.7%)、60代: 21(3.0%)、70代: 4(0.6%)、10代: 1(0.1%)、不明: 100(14.3%)であった。

●外国語相談(再委託)のサービス対象者の居住地域(n=701)

ブロック拠点病院が存在する各地域から相談が寄せられており、最も多いのが関東甲信越(東京以外): 374(53.4%)、東京: 202(28.8%)、近畿: 34(4.9%)、海外: 32(4.6%)、東海: 31(4.4%)だった。それ以外は数が少ないが、北海道、東北、北陸、中四国、九州からも相談が寄せられた。海外からの相談もあり、母国との連携も相談ニーズとして同時に存在していることがわかった。

●外国語相談(再委託)による相談対応時間(n=466/メールを除く)

相談時間は、30分未満: 347(74.5%)、30分~59分: 10(2.1%)、60~119分: 108(23.2%)、120分以上: 1(0.2%)となった。

●外国語相談(再委託)の相談内容(複数選択)

相談全体では、「医療体制・医療との関わり・連絡」335件、「通訳/翻訳」225件、「通訳派遣及び調整」と「社会資源活用の情報提供」105件、「在留資格や法律上の相談」60件、「心理や精神に関する相談」と「病気や病態の変化に伴う不安や混乱」56件、「母国情報の

提供／帰国支援」と「服薬・副作用に関する相談」55件、「医療費や支払いについて」48件、「海外移住と渡航支援」30件だった。その他、「HIV検査や告知に関する相談」「パートナーに関する相談」などがあった。

電話相談では、「医療体制・医療との関わり・連絡」が124件、「通訳派遣及び調整」96件、「通訳／翻訳」89件、「社会資源活用の情報提供」56件、「母国情報の提供／帰国支援」45件、「在留資格や法律上の相談」39件、「医療費や支払いについて」27件、「心理や精神に関する相談」25件、「HIV検査や告知に関する相談」24件、「パートナーに関する相談」22件、「服薬・副作用に関する相談」21件、「生活上の具体的問題&市民生活支援」17件、「HIVの情報提供」16件、「海外移住と渡航支援」と「他のNPO／NGOの紹介」が14件、「対人関係上の問題」13件、「病気や病態の変化に伴う不安や混乱」と「母子保健」が11件であった。

メールの相談では、「医療体制・医療との関わり・連絡」191件、「通訳／翻訳」35件、「病気や病態の変化に伴う不安や混乱」24件、「心理や精神に関する相談」22件、「社会資源活用の情報提供」と「医療費や支払いについて」21件、「在留資格や法律上の相談」20件、「海外移住と渡航支援」と「服薬・副作用に関する相談」16件、などとなった。

来所面談は、1件だったので、内容は省略する。

訪問／同行では、「通訳／翻訳」での活動が89件、「社会資源活用の情報提供」27件、「病気や病態の変化に伴う不安や混乱」21件、「医療体制・医療との関わり・連絡」20件、「服薬・副作用に関する相談」18件等であった。

各団体が提供したサービスの内容は以下のとおり。

■CRIATIVOS (n=525)

電話相談 (216)、メール相談 (205)、来所面談 (1)、訪問／同行 (103)

相談者の国籍／使用言語：ブラジル (290)、ペルー (168)、メキシコ (24)、スペイン (17)、日本 (13)、アンゴラ (12) 等

■シェア (n=176)

電話相談 (138)、メール相談 (31)、対面相談 (0)、訪問／同行 (7)

相談者の国籍／使用言語：タイ (41)、インドネシア (29)、ブラジル (17)、日本 (14) 等

Ⅲ 事業の広報について

相談サービスの広報は、フリーダイヤルや外国語相談などの電話番号を掲載した印刷物の配布及びインターネットの活用により行なっている。また HIV 陽性者本人やパート

ナー、家族にはもちろんのこと、行政や医療を含めた専門家／支援者への認知の向上にもつとめている。

パンフレット「HIV 陽性者とその周囲の人のためのサービス」では、本事業を含めた HIV 陽性者やその周囲の人へのサービス全般の広報をした。

(2)のまとめ

2020年の東京オリンピックの開催にむけて、外国語での相談ニーズは高まることが予測される。2010年に来日した外国人の数は860万人、2017年度の来日外国人数は2900万人と推計されており、この7年で2000万人の増加である。さらに、エイズ動向委員会の発表によれば、外国籍男性の新規のHIV報告数が増えているとのことである。

日本語主体のぶれいす東京の電話や対面での相談サービスにおいても、外国人からの日本語による相談や連絡が増えており、外国人に向けた相談体制の見直しが課題であるが、本事業だけの対応では限界がある。

今後は、定住者にむけた相談だけでなく、旅行者などの対応も増えることも考えられ、HIVを取り巻く相談の他言語による対応ニーズはますます増えていくことが予想される。これからも、他の支援機関とも連携し、できることを取り組んでいきたいと考える。

(文責：佐藤 / 生島 / 牧原)

部門報告 (研究・研修)

研究・研修部門では、当事者の視点を生かした独自の研究や、受託研究などのさまざまな調査研究と、HIV/エイズやセクシュアリティ等の講師派遣や、研修の企画・運営などを行っています。

担当…生島、牧原、大槻

研究



厚生労働科学研究費補助金

2015年度から3か年計画で行っていた、厚生労働科学研究費補助金エイズ対策政策研究事業「地域においてHIV陽性者と薬物使用者を支援する研究」の最終年度の調査研究を実施しました。研究代表者として理事の樽井、研究分担者として代表の生島が研究を進め、ぶれいす東京のスタッフも協力しました。

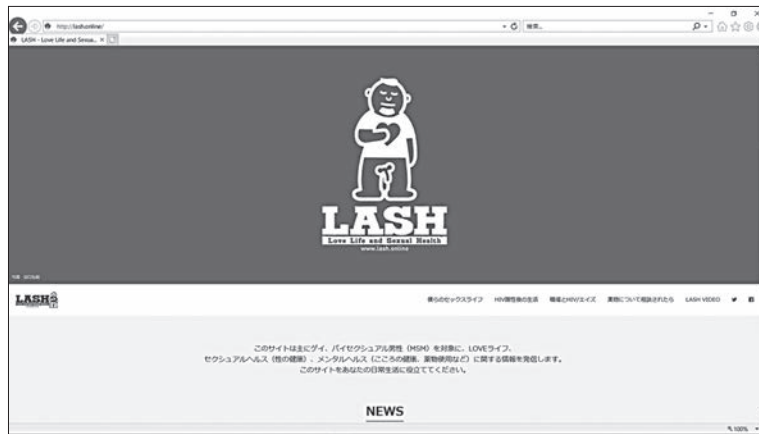


くわしくは…

左記の厚生労働科学研究班の制作物や報告書などは、下記のWebサイトに掲載しています。



「地域におけるHIV陽性者等支援のためのウェブサイト」
地域においてHIV陽性者と薬物使用者を支援する研究班
<http://www.chiiki-shien.jp/>



「Love Life and Sexual Health (LASH)」
地域においてHIV陽性者と薬物使用者を支援する研究班
<http://www.lash.online/>



ぶれいす東京Webサイト「調査や活動から見たこと」
<http://www.ptokyo.org/know/insights>

地域において HIV 陽性者と薬物使用者を支援する研究 (3 年計画の 3 年目)

研究代表者：樽井 正義 (特定非営利活動法人ぐれいす東京)



A MSM の薬物使用・不使用に関わる要因の調査

～男性とセックスをする男性向けの出会い系アプリ利用者の意識や行動に関する調査～



研究分担者：生島 嗣 (特定非営利活動法人ぐれいす東京)

男性とセックスをする男性 (MSM) の出会いに関連した環境が個人の性行動や薬物使用行動に与える影響を把握することを目的に、多くの MSM が出会いや交流を目的に利用する出会い系アプリ業者の協力を得て調査への参加を呼びかけ、そのアプリ利用者を対象とした 97 問からなる Web 調査を昨年度に実施した。調査の説明に同意し、回答を試みた者は 10,544 人で、データ・クリーニングを経て 6,921 人の回答を解析対象とした。

回答者の平均年齢は 33.8 歳で、95.8% がゲイ・バイセクシュアル男性であった。ゲイ・バイセクシュアル (トランス・ゲイ男性を含む) としての初めてのセックスを経験したのは平均 20.1 歳、初めてゲイ・バイセクシュアル男性の友達ができたのが 21.7 歳で、恋人ができたのが 22.9 歳であった。女性との結婚経験があるという回答者は 8.5% で、また回答者の 6 割以上が家族や職場に自身のセクシュアリティをカミングアウトしていなかった。

HIV/ エイズに関して身近に感じていると回答した人の割合は 55.5% で、HIV 抗体検査を受けた経験のある回答者も 62.3% いたが、その一方で過去 6 ヶ月間にコンドームなしのアナルセックスを経験したという回答者が 48.6% いた。HIV の感染経路や予防方法に関する知識は浸透していたが、HIV 陽性者でも治療の効果によりセックスの相手にウィルスを感染させることがなくなるという情報は認知されていなかった。

誰かが薬物を使用しているのを見たことがある回答者の割合が 41.4%、薬物使用を勧められた経験がある回答者の割合が 36.1% など、MSM を取り巻く環境には薬物が身近に存在することが明らかになった。また、幼少期の被虐待やいじめ被害といった逆境の小児期体験と、薬物使用経験とが強く関連していることが確認できた。

MSM の間では、薬物使用と HIV 感染リスクの高い性行動に強い関連性がある可能性が示唆された。また、薬物使用防止の啓発のためには、薬物を使用する背景にある、過去のトラウマや逆境を理解し、メンタルヘルスにも配慮した介入を行うことが有益であると考えられた。

B 薬物使用者による依存症クリニック受診経緯の調査



研究分担者：肥田 明日香（医療法人社団アパリ アパリクリニック）

MSMの薬物使用者への支援に有用な基礎資料を収集するため、薬物使用者に医療的支援を提供している依存症クリニック（A病院）を受診中のMSMが受診に至った経緯について明らかにすることを調査の目的とした。A病院へ来診した者のうちLGBT向けグループプログラム（LGBTグループ）に参加経験のあるMSM7名を対象に、半構造化個別インタビューを実施し、質的記述的に分析を行った。

参加者は、ゲイである自分が居心地のよい場所に通いゲイ同士の交流をするが、そこで初めて薬物を使うこととなった。その後、薬物を継続的に使用するうちに、それまでの生活や人間関係に支障が出たことで“ハマっている”“まずい”と自覚する。しかし、通報される怖さなどから言い出せずにいた一方、“根拠のない自信”を持ち、薬物使用をやめるという選択肢が出てくることはなく薬物を使用した。そして参加者全員が、司法や医療からの社会的第三者の介入を経験し、直接あるいは他の医療機関を経てA病院を受診、LGBTグループ参加に至った。そして、LGBTグループ参加を通じて自身の薬物使用の背景にある問題に気づき、生きづらさに折り合いをつけて自分の社会生活を送るようになっていた。

今回の調査対象者は、薬物使用により生活や人間関係に支障が出ても、通報への怖さなどから、援助を求められず孤立した。調査を通じて、当事者がより早期に安心できる環境のもとで相談できる体制の構築と、他機関との連携やピアの存在により連続するフォーマル／インフォーマルなケアやサポート、社会での居場所を提供していくことが有用であると示唆された。

C 地域の諸機関連携による HIV 陽性者・薬物使用者支援事例の調査



研究分担者：大木 幸子（杏林大学）

HIV診療の場においてMSMのHIV陽性者の薬物依存症からの回復へと分岐しうる支援方法や課題を明らかにすることを目的に、薬物依存のあるMSMのHIV陽性者への支援経験があるエイズ治療拠点病院および診療所の医師、看護師、MSWに対し半構成インタビューを行い、支援方法および支援課題に関する語りのデータを収集した。

調査結果をもとに、1点目は薬物使用が明らかになる前の支援方法、2点目は薬物使用が明らかになった後の支援方法、3点目はHIV診療における薬物依存症への支援に関する基本的態度、4点目はHIV診療機関での薬物使用・依存症に対する支援の課題について整理をした。薬物使用が明らかになる前の支援方法には、①「薬物使用」について話してよい場であることを伝える、②薬物使用のサインをキャッチする、③相談を徹底して「待つ」、が抽出された。薬物使用が明らかになった後の支援方法では、①逮捕を薬物依存症への支援のきっかけとして捉える、②HIV診療機関に来院できたことを肯定的に評価する、③経過と今困っていることを尋ねる、④薬物依存についての相談意向や回復意向を見きわめ、支援方針を検討する、⑤薬物使用行為の背景にある心理的葛藤に着目して、支援リソースにリファーする、⑥生活の破綻状況を確認、生活の「立て直し」の支援を話し合う、⑦再使用により再逮捕となった場合は、心配しているというメッセージを伝える、が示された。薬物依存症への支援に関する基本的態度では、①医療者として「健康の問題」にかかわる立場を堅持する、②回復の力があることを信じる、③スリップが言える関係づくりを目指す、ことが示された。また、支援にあたっての課題には、①HIV診療にかかわる専門職の資質の向上、②セクシュアリティやHIV感染症についての理解をもつ薬物依存の診療や支援機関の増加、③セクシュアリティやセクシュアルヘルス、「薬物依存症」が治療対象の疾病であることについての普及啓発の強化、が挙げられた。今後、さらにデータを収集し、薬物依存症への支援方法と支援上の課題の検討を行う予定である。

D 薬物依存からの回復を支援する社会資源の調査—薬物使用に関わる相談窓口の調査—



研究分担者：樽井 正義（特定非営利活動法人ぐれいす東京）

薬物問題に直面している人は、止めたいという意思を持っていても、一人で対処することが困難であったり、さらには犯罪と見做されたりするゆえに相談していくことに障壁がある。そういった薬物使用者が利用できる相談窓口の情報を調査し、当事者や関係者、HIV陽性者に関わる医療者や支援者に提供することを目的に研究を行った。

首都圏などにある薬物問題に取り組むNGO、HIV陽性者の支援団体、使用者の自助グループ、薬物使用に対応する行政である精神保健福祉センター、依存症治療を提供する医療機関を対象とし調査を実施した。結果、薬物使用者とその関係者、とくにLGBTなど性的少数者が、通報される心配をもちあずに安心して相談できる窓口であり、十分な情報が得られた26の機関を紹介するパンフレットを作成した（「身近な人から薬物使用について相談されたら2」参照）。

この調査を通じて、薬物使用に関する相談ができる窓口はきわめて限られていることが示された。薬物使用は健康問題であるとの認識のもとに、薬物使用とそれともなうHIV感染の予防をはかるために、安心して気軽に相談できる窓口の充実と活用が望まれる。



本研究班が2017年度に制作した「LASH調査報告書」、「意外と知らない僕らのリアルなセックスライフ～LASH調査報告書～」、「身近な人から薬物使用について相談されたら2」もあわせてご覧ください。

<http://chiiki-shien.jp/resource.html>

また、生島が研究分担者を務めた厚生労働科学研究費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業「効果的な献血推進および献血教育方針に関する研

究」(研究代表者：白阪琢磨、研究協力者：市川誠一、岩橋恒太)も3か年にわたる研究を終えています。

HIV 感染ハイリスク層への情報伝達方法及び意識調査の研究

研究分担者：生島 嗣 (特定非営利活動法人ぶれいす東京)

安全な献血血液確保のための有効な情報伝達のあり方と普及啓発方法を検討し提示するため、わが国のエイズ発生动向調査で感染者・患者報告数の多くを占めるハイリスク層の一つである MSM の、献血についての意識や行動の実態を明らかにすることを本研究の目的とした。今年度は、昨年度に実施した自記式質問紙調査の再分析を行うとともに、調査結果を専用サイトの構築と、ゲイ向け出会い系アプリの広告の活用によって広く周知した。

昨年度の調査 (n=2,286) によると、MSM が献血をする主な動機は、「自分の血液が役に立って欲しい」など社会貢献の目的が最も多く、「自分の健康管理」がそれに次いだ。HIV 検査をする目的で献血をした経験がある者は献血経験者のうち 4.1%で、地域差もあったが、その地域での HIV 検査の受けやすさや選択肢の多寡を示唆している可能性がある。MSM がより受けやすい HIV 検査環境の整備があらためて求められるといえる。

生涯献血経験の有無に対しては、生涯 HIV 検査受検経験、HIV 感染の可能性、HIV の教育経験、HIV 陽性者の身近さに有意差が見られた。献血の制限項目については 81.2%が認識をしているものの、それを献血場所で知ったという人が 70.2%と最も多く、事前の情報提供による周知は十分とはいえないようであった。

上記調査への協力のリクルートを行ったゲイ向け出会い系アプリを基点に、調査結果および献血について MSM に知ってもらいたい内容を掲載したサイトによる広報を展開した。今後も本サイトの認知を広げ、MSM と献血に関する啓発に継続して利用していく予定である。



「MSM&Kenketsu ゲイ・バイセクシュアル男性が献血する理由」効果的な献血推進および献血教育方針に関する研究班 <http://kenketsu.ptokyo.org/>

2017 年から新たに始まった厚生労働科学研究費補助金エイズ対策政策研究事業「HIV 感染症の曝露前及び曝露後の予防投薬の提供体制に関する研究」(研究代表者：水島大輔)並びに同「職域での健康診断機会を利用した検査機会

拡大のための新たな HIV 検査体制の研究」(研究代表者：横幕能行)に、研究分担者として生島が従事するとともに、ぶれいす東京のスタッフも参加しています。

日本在住 MSM の PrEP (曝露前予防) に関する意識や行動に関する研究

研究分担者：生島 嗣 (特定非営利活動法人ぶれいす東京)

近年 PrEP による HIV 感染予防の有効性を示す研究データが海外で数多く発表されている中、日本の MSM における PrEP に関する認知度やニーズを調査するため、また日本で PrEP が実施された場合の費用対効果を分析する資料の提供を目的として、本研究を行う。

今年度は世界保健機関 (WHO) が発行した PrEP 実施のためのツールキット (“WHO implementation tool for pre-exposure prophylaxis of HIV infection”) など海外のガイドラインや文献等のレビューを行うとともに、これまでに国内外で実施された研究を調査し、次年度に実施を予定する MSM 対象の大規模インターネット調査の質問票作成の参考とした。国内の MSM コミュニティを対象としたニーズ調査の実施は、わが国への PrEP プログラムの導入を検討するために必要不可欠であり、これにより医療施設へのアクセス、費用負担等の諸条件を明らかにし、PrEP に関して実現可能で受け入れ可能なサービス提供体制について検討する予定である。

職場における HIV 検査実施に必要とされる配慮と環境に関する研究

研究分担者：生島 嗣（特定非営利活動法人びれいす東京）

これまで健康診断に HIV 検査が積極的に実践されることはなかった日本で今後、職場での HIV 検査を実施するのであれば、従来の検査システムが機能しない可能性が考えられる。本研究では、企業健診の中で HIV 検査を実施する上での課題を洗い出し、受検者が不利益を被らない検査体制の構築に資することを目的とし、職場における HIV/エイズの取り組みに関する海外でのガイドラインや実践例等を収拾した。

国際労働機関（ILO）では、HIV 検査は真に自発的であり、強制的なものではならず、検査プログラムは秘密保持やカウンセリングと同意に関する国際的なガイドラインを遵守しなければならない、としている。また、米国疾病管理予防センター（CDC）では、“Business Responds to AIDS (BRTA)” という、公民協働のイニシアティブで、職場での HIV/エイズに対するスティグマ低減と、働く陽性者への差別を防止するための実践的な取り組みが行われている。

検査実施主体と職場が連携することで、これまでに検査を受けることがなかった人にその機会を提供できる一方、当事者に不利益が及ぶ可能性は排除しなくてはならない。本研究では、引き続きこれら事例を精査しつつ、HIV 陽性者を含む労働者側からの視点で、職場で HIV 検査を実施する上での課題とその対応の検討を行っていく。



学会発表

・第9回国際エイズ学会

（2017年7月23日～7月26日 於 フランス・パリ）

「Awareness, utilization and willingness to use PrEP among Japanese MSM using geosocial-networking application」

発表者：山口 正純（武南病院）

「薬物使用と性行動と精神的健康度の関連性—MSM 向け出会い系アプリ利用者の意識や行動に関する調査から—」

発表者：山口 正純（武南病院）

「MSM の薬物使用及び HIV 感染と児童期の逆境体験との関連」

発表者：野坂 祐子（大阪大学大学院）

・第31回日本エイズ学会学術集会・総会

（2017年11月24日～11月26日 於 東京）

「びれいす東京によせられる相談の内容と傾向～病院で相談しにくいこと～」

発表者：牧原 信也

「GPS 機能付き出会い系アプリを利用する MSM を対象にした、薬物使用、性行動、意識に関する LASH (Love life And Sexual Health) 調査概要」

発表者：生島 嗣

「東京東部地域における MSM 向け HIV 検査・相談会「快速あんしん検査上野駅」の啓発の構成」

発表者：岩橋 恒太 (akta)

「HIV 検査相談会「快速あんしん検査上野駅」の実施」

発表者：本間 隆之（山梨県立大学看護学部）

「MSM を対象とした自己穿刺血による HIV 検査—HIVCheck 受検者の有病率」

発表者：高野 操（国立国際医療研究センター）

「HIV 陽性者と周囲の人への相談事業における、判定保留者の背景について」

発表者：牧原 信也

「感染がわかって6ヶ月以内のピア・グループ・ミーティングの参加者に関する考察」

発表者：加藤 力也

「HIV 陽性者等の HIV に関する相談・支援事業（ピア・カウンセリング等による支援事業）における在日外国人のサポートの現状と課題」

発表者：山本 裕子（シェア＝国際保健協力市民の会）

「わが国の MSM における PrEP および nPEP の認知度、利用経験、利用意向に関する分析—ゲイ向け GPS アプリ利用者の意識や行動に関する LASH 調査から—」

発表者：山口 正純（武南病院）

「HIV 陽性の相談員による、陽性者等向け電話相談サービスに関する考察」

発表者：佐藤 郁夫

「刑事事件等による身柄拘束者および受刑者に対するソーシャルサポートの一考察」

発表者：村崎 美和

「新宿区 HIV/AIDS 関係機関ネットワーク連絡会の活動報告」

発表者：三宅 慧（新宿区保健所保健予防課）

「LASH (Love life And Sexual Health) 調査における自己評価関連項目とコンドーム使用状況との関連について」

発表者：仲倉 高広（京都大学大学院教育学研究科）

「ゲイ向け GPS アプリを利用するトランスジェンダー等の調査」

発表者：大槻知子

「GPS 機能付き出会い系アプリを利用する MSM における Sexual Compulsivity スケール日本語版 Ver.1 の信頼性、妥当性の検討」

発表者：井上 洋士（放送大学、株式会社アクセライト）

「MSM を対象とした献血に関する情報伝達方法および意識調査」

発表者：岩橋 恒太 (akta)

「地域の相談支援機関利用による薬物使用 HIV 陽性者の回復事例の調査」

発表者：大木 幸子（杏林大学保健学部看護学科）

「日本の HIV/エイズの現状は今」

発表者：生島 嗣

・ GID（性同一性障害）学会第 20 回研究大会・総会
（2018 年 3 月 24 日～3 月 25 日 於 東京）

「ゲイ向け GPS 機能付き出会い系アプリを利用するトランスジェンダー等の性の健康に関する調査」

発表者：大槻 知子



2017 年度の研究活動を振り返って…

ぶれいす東京の研究活動はこれまで、普段の相談・支援の現場の経験だけでは見えない HIV/エイズの全体像をとらえようとする試みであった。しかし近年、医療機関、大学などのさまざまな研究者から、研究プロジェクトとして領域を超えたコラボレーションが提案されることが増えてきている。

立場の違う人たちと行うプロジェクトは、お互いの相違を実感する場でもあった。しかし、HIV/エイズが社会的なスティグマを背負わされている疾病であることを考えると、何かを変えていくために、それぞれの立場の違いを明らかにした上で進めていく共同研究の取り組みにも価値があるのではないだろうか。

by いくしま

研修



講師派遣・研修

ぶれいす東京では、HIV/エイズの一般知識、HIV陽性者支援、性教育やセクシュアリティ、人権などをテーマに、学校や企業、専門家の集まりなどへ向けた講師派遣や研修の企画・運営を行っています。講師派遣では、HIV陽性者の支援経験が豊富な相談員やセクシュアリティの専門家、性教育の専門家などが出講しています。企業や教育機関、保健所を含む行政機関、医療機関、国際協力団体などの研修を受託し、独自の研修企画の立案も行っています。



くわしくは…

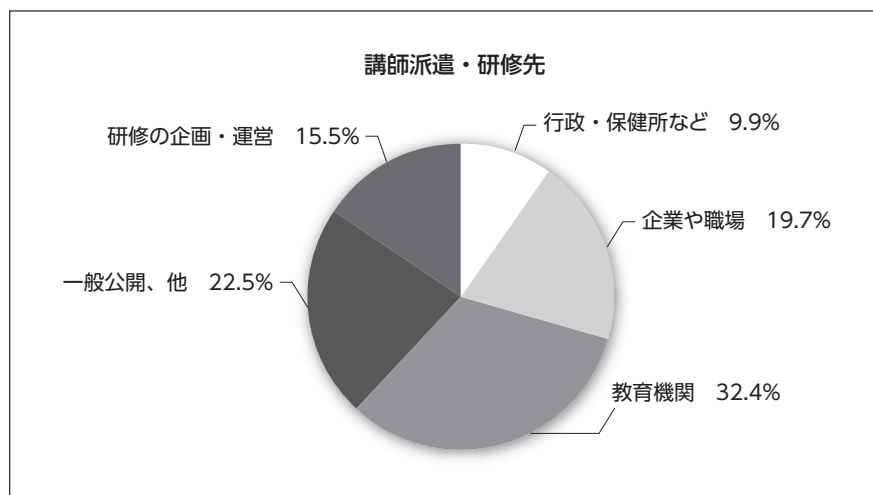
講師派遣や研修をご要望の場合は、ぶれいす東京 Web サイト「講師派遣・研修の依頼」(<http://www.ptokyo.org/know/lecturers>) からご連絡ください。

2017年度の講師派遣・研修実績は以下の通りです。

月	日	担当	内容	参加者数(人)				
				行政・保健所など	企業や職場	教育機関	一般公開、他	研修の企画・運営
4月	25日(火)	生島	就労継続支援事業所		11			
5月	3日(水・祝)	生島	[LGBT× 貧困 性的マイノリティが遭遇する困難・ピアサポートの可能性]				200	
	6日(土)	生島	[HIVとアジア～韓国・台湾・日本]				300	
6月	8日(木)	池上	大田区立六郷中学校			101		
	13日(火)	生島	岡山県	24				
	15日(木)	池上	早稲田大学本庄高等学院			338		
	16日(金)	生島	早稲田大学			75		
	18日(日)	生島	名古屋医療センター多職種合同研修会		100			
	23日(金)～ 25日(日)	牧原・生島・池上・ 加藤・大槻	青年海外協力隊エイズ対策技術補完研修					5
	28日(水)	大槻	郡山市	80				
7月	5日(水)	池上	国立東京工業高等専門学校			204		
	7日(金)	生島	東京都保健師研修会					20
	9日(日)	加藤	[J-PALS 2017]				78	
	21日(金)	池上	東京都立城東職業能力開発センター江戸川校			65		
	25日(火)	佐藤	渋谷教育学園渋谷高等学校			25		
	31日(月)	生島	東北ブロック HIV 検査担当者向け研修会					28
8月	2日(水)	生島	メディア関連会社		20			
	6日(日)	生島	第24回 AIDS 文化フォーラム in 横浜 『HIV/AIDS のいまとこれから』				70	
	20日(日)	佐藤	nI/minato 対話カフェ				19	
	25日(金)	生島	養護老人ホーム相談員研修会	28				
	31日(木)	大槻	横浜市立二ツ橋小学校			35		
9月	1日(金)	生島	千葉県研修会					9
	14日(木)	生島	SCSK 株式会社		19			
	20日(水)	生島	東京都エイズ専門研修	90				
	30日(土)	生島	community center akta スタッフ研修					3
	30日(土)	佐藤	community center ZEL 『陽性者と話そう』				6	
10月	13日(金)	生島	『「社会を変える」を考える ～今日からできる! 社会貢献の方法～』				40	
	16日(月)	生島	東京都エイズ・ボランティア講習会				42	
	17日(火)	生島・加藤	南障害者相談支援キーステーション		25			
11月	5日(日)	生島	[Living Together/STAND ALONE]				80	
	12日(日)	生島・大槻	# 渋谷にかける虹 『トランスジェンダー男性と HIV ～性の健康に関する相談先～』				18	

月	日	担当	内容	参加者数(人)				
				行政・保健所 など	企業や 職場	教育 機関	一般 公開、 他	研修の 企画・ 運営
11月	14日(火)	池上	台東区立浅草中学校			109		
	15日(水)	池上	清明学園中学校			74		
	23日(木・祝)	生島	『BPM (Beats Per Minute)』 ジャパンプレミア試写会&トーク				180	
	26日(日)	池上・大槻	「ゆるふわ性教育 ～よりよい性教育の在り方のヒントを探る～」				33	
	26日(日)	佐藤	『トークバック 沈黙を破る女たち』上映会&トーク				42	
12月	1日(金)	生島	自衛隊中央病院		30			
	2日(土)～ 3日(日)	牧原・生島・池上・ 加藤・大槻	青年海外協力隊エイズ対策技術補完研修					3
	4日(月)	生島	東京都エイズ予防月間講演会 「HIV 陽性者とともに働くために～ウイルス性肝炎の経験から～」				70	
	5日(火)	生島	埼玉県エイズカウンセリング研修会					24
	5日(火)	佐藤	虹色ダイバーシティ		21			
	7日(木)	佐藤	武蔵野大学			200		
	8日(金)	加藤	千葉県「エイズ等性感染症予防教育指導者研修会」	25				
	8日(金)	生島	dista				16	
	11日(月)	佐藤	東京女子大学			250		
	12日(火)	生島・加藤	世田谷区人権研修					50
	14日(木)	池上	東京都立忍岡高等学校			229		
	14日(木)	大槻	台東区立御徒町台東中学校			146		
	15日(金)	生島	東京大学			20		
	17日(日)	生島	人権擁護とソーシャルワーク研修 「HIV 陽性者へのソーシャルワーク研修・多職種連携により支援の質を高めよう」		70			
1月	7日(日)	加藤	SHIP スタッフ研修		40			
	10日(水)	佐藤	国際医療福祉大学			6		
	13日(土)	生島・加藤	HIV/AIDS 症例懇話会「HIV 陽性者の長期療養支援」	80				
	17日(水)	大槻	上野学園高等学校			167		
	17日(水)	池上	上野学園中学校			37		
	24日(水)	生島	神奈川保健所研修					16
	25日(木)	生島	藤沢市役所	100				
	31日(水)	生島	金融機関		8			
2月	9日(金)	生島	沖縄県保健所職員研修会					12
	9日(金)	加藤	武蔵野会群馬				11	
	10日(土)～ 11日(日・祝)	牧原・生島・池上・ 加藤・大槻	青年海外協力隊エイズ対策技術補完研修					7
	15日(木)	生島	社会的包摂サポートセンター		10			
	22日(木)	生島・佐藤	武蔵野会		24			
3月	3日(土)	生島	一橋大学「男児・男性への性被害」			24		
	5日(月)	加藤	練馬区立石神井中学校			260		
	6日(火)	大槻	台東区立柏葉中学校			161		
	7日(水)	佐藤	沼津市立病院		40			
	12日(月)	池上	大田区立糞谷中学校			130		
	13日(火)	池上	台東区立駒形中学校			99		
	14日(水)	池上	大田区立御園中学校			128		
	18日(日)	生島	大阪医療センター		21			
参加者数合計(人)				427	439	2,883	1,205	177
実施回数合計(回)				7	14	23	16	11
実施1回あたり参加者数(人)				61.0	31.4	125.3	75.3	16.1

※ このほかに、各部門で内部研修を実施しています。



2017年度の講師派遣・研修活動を振り返って…

さまざまな領域で、地域の支援職向けの研修会などに招かれることが増え、それはHIV/エイズがテーマのこともあれば、LGBTやセクシュアリティの理解促進などについて話すことを求められることもあった。

この1年あまりで、LGBT関連と、介護領域や地域福祉に関する派遣依頼が増えてきた印象がある。一方、以前多かったHIV陽性者の就労に関する依頼は微減傾向にあるようだ。

by いくしま

2017年度には、代表の生島が第31回日本エイズ学会学術集会・総会の会長を務めたこともあり、演題発表などで日頃の支援活動や研究成果を周知する機会が多くなりました。また、講師派遣も昨年度の62件から71件へと増え、とりわけ教育機関からの出講依頼の増加が目立ちました。

新たな研究課題による活動も始まりつつありますが、地域に根ざした支援活動を行うふれいす東京ならではの視点等を大切に、今後も研究・研修に取り組んでいきたいと思えます。

(文責：大槻)

相談員派遣

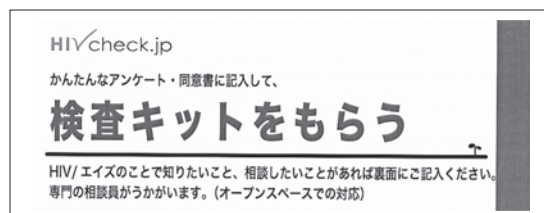
厚生労働科学研究費補助金【エイズ対策政策研究事業】HIV 検査受験勧奨に関する研究 (研究分担者：本間隆之) への相談員派遣

[相談員派遣日] 2018年1月21日(土曜日) 17～20時 @台東保健所
[相談員派遣数] のべ2人
[相談数] 相談実施：11件、検査数：94件
[相談率] 11.7%

厚生労働省エイズ対策政策研究事業「MSM に対する有効な HIV 検査提供とハイリスク層への介入方法の開発に関する研究」 (研究代表者：金子典代) への相談員派遣

[相談員派遣日] 2018年2月26日～3月の毎週月曜日
19～22時 合計5回 @akta
[相談員派遣数] のべ5人
[相談数] 相談実施：12件、相談希望：13件、
検査キット配布数：88件
[相談率] 13.6%

(表)



(裏)

A consultation card with a checklist. The title is '知りたいこと・相談したいことにチェックしてください。'. The list includes: 'もし HIV に感染していたら', 'HIV の感染リスク・セーフターセックス', '治療費・お金の問題', '仕事・学業', 'ブライバシー・カミングアウト', '周囲の陽性者について', 'こころの問題・薬物使用', '何を相談していいかわからないけど不安', 'この検査について', and 'その他 ()'.

相談カード

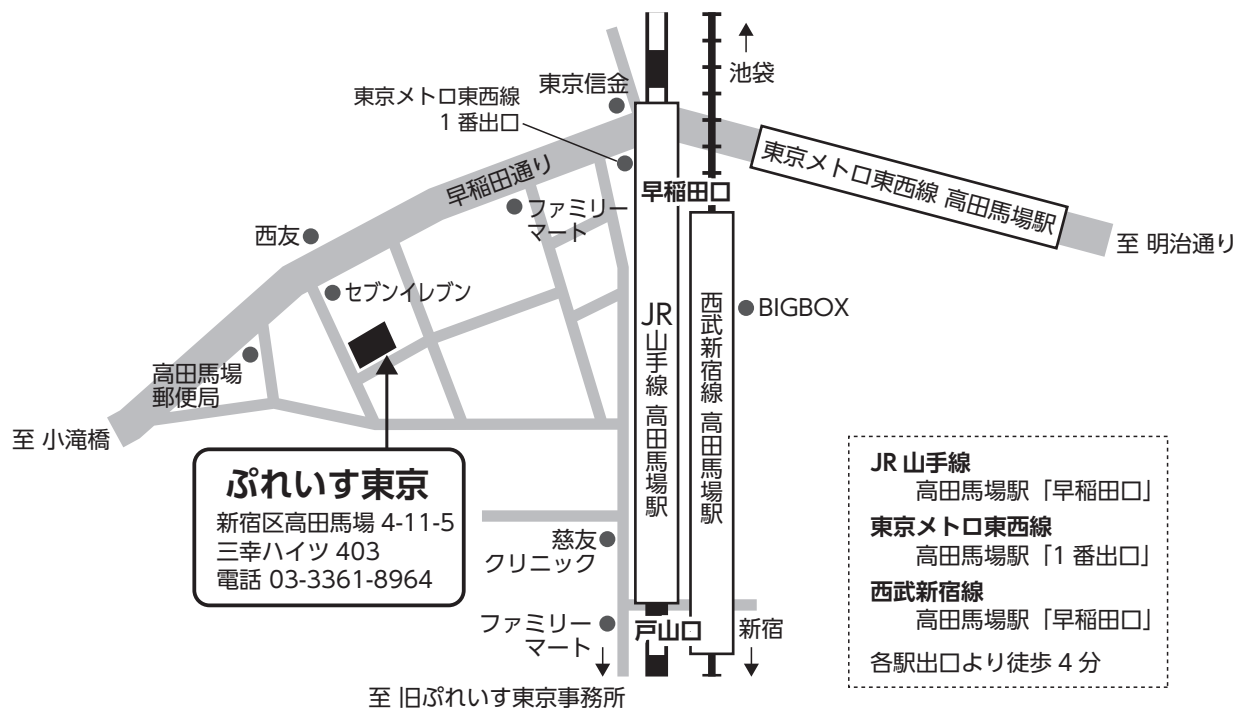
草加保健所 (日曜検査) への相談員派遣

[相談員派遣日] 2017年9月3日 12月3日の日曜日 13～16時 合計2回
[相談員派遣数] のべ2人 (akta から別にも2名)
[相談数] 相談実施：13件、検査数：35件 (12月分のみ)
[相談率] 37.1%

●相談員派遣のまとめ

MSM を対象にした検査会で寄せられる相談は、実際に HIV 陽性であった場合を前提にした相談が多く寄せられる。来所者自身が棚上げにしてきた HIV 検査と向き合う作業をお手伝いしているように感じられるという貴重な機会となっている。何の根拠もないが、会場によって、来所する人たちの相談傾向がやや違うように感じられる。新宿以外の場所での相談では、過去に HIV と接点が少なかった人たちと多く出会う。

(文責：生島、佐藤、福原)



ぷれいす東京 2017年度年間活動報告書

2018年5月27日発行

発行 特定非営利活動法人 ぷれいす東京

Positive Living And Community Empowerment TOKYO

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 4-11-5 三幸ハイツ 403

TEL : 03-3361-8964 FAX : 03-3361-8835 E-mail : office@ptokyo.org

ゆうちょ銀行振替口座 : 00160-3-574075 「特定非営利活動法人 ぷれいす東京」

URL : <http://www.ptokyo.org/>

Facebook : <http://www.facebook.com/PLACETOKYO>

Twitter : @placetokyo(<http://twitter.com/placetokyo>)

印刷 株式会社翔美

